Steins;Gate **暗黒世界のドヴェルグ**

監査機未起

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Steins;Gate 暗黒世界のドヴェルグ

【Nコード】

N3319U

【作者名】

監査機未起

【あらすじ】

ダイバージエンス2%オーバー！。

ある者が最悪の世界線と呼んだ 世界線。

そんな世界で生まれ育ってきた青年、岡部倫太郎は未来を決定付ける選択を突きつけられる。

運命などあるのか、未来は変えられないのか。

青年は必死に抗い続ける。

ネタバレし、独自解釈があります。性格改変、過去改変もあります。
その点をご了承の上よろしくお願ひします。

7月28日 11時45分

嘘や裏切りが跋扈する混沌とした世界。

悪が善を駆逐し、権力も暴力も全て悪の手に渡った。

そして善は悪に虐げられ、生きる事すら難しく自由など無かった。
そんな狂った世界にも支配者はいた。

誰よりも非情で、誰よりも悪であるその支配者の名を 鳳凰院
凶真と言った。

7月28日、秋葉原駅前。時刻を確認すると11時45分。

人が雑多にごった返す中、俺は一人である場所へと向かっていた。
改札を出て、すぐそこに見える通称ラジ館。

夏の日差しと熱気が汗を誘うのも無視して、俺はそのラジ館をぼんやりと眺める。

『世界のラジ館』と大きく書かれた派手な看板が主張する八階建ての雑居ビル。

今日わざわざここに足を運んだのには一応理由ある。

だが、冷静に考えると随分と馬鹿らしいものであり、このまま帰るのかと思うくらいだ。

その理由が……ドクター中鉢によるタイムマシンの記者会見。

ドクター中鉢は日本ではそれなりに有名な発明家。テレビの露出も多く、特許も取っていたりするのだが、世間の扱いはイロモノ科学者。

そんな奴がタイムマシンを発明したと言って記者会見を設けた。

普通なら胡散臭すぎて誰も来ようと思わない。

現に、記者会見と言っても記者もカメラマンも来てやしない。
本当に名前だけの記者会見。

そんなもの為に貴重な時間を費やしているのかと思うとげんなり
してくる。

それでも俺がここに来てしまったのは、『タイムマシン』という
言葉に少なからず興味を持ってしまったからだ。

過去を変える事をも可能とするソレに。

「あれは……」

ふとラジ館の入口に視線をやると、人が入って行くのが見えた。
しかも、どこかで見た覚えのある顔。

誰だつたらうかと、記憶を辿り……思い出した。

牧瀬紅莉栖。今年の春に十七歳でアメリカの大学を飛び級で卒業。
その後、学術雑誌『サイエンス』に論文が載った天才少女。

……その牧瀬紅莉栖がいつたいラジ館になんの用なんだ？

まさかドクター中鉢の記者会見でも見に来たのだろうか……と一
瞬考えて否定する。

いくらなんでもそれは無いだろうと。

牧瀬程の科学者がこんな胡散臭い記者会見に来る理由なんて見当
もつかない。

……そんな事を考えている時だった。

唐突に、何の前触れも無く 轟音が響いた。

耳を塞ぎたくなる程の大きな音がすぐ真上から。

砕けた破片がパラパラと落ちてくるのにも構わず見上げて 啞

然とした。

ついさっきまでの景色とはまるで違う。

ラジ館の最上階に明らかな異物があつた。

人工衛星の様にも見える巨大なナニか。

それがラジ館に突き刺さり、めり込んでいる。

「なんだ……これは……」

いつの間にかこんなモノが？

まさか墜落してきたとでも言うのか？

いくらなんでもそれは有り得ない。

あれ程の質量が突っ込んで来たら、この程度では済まない。

下手したら俺も、この周囲で騒いでいる者達ごと巻き込まれてい
たかもしれない。

「……俺だ」

そんな異常事態を前に、携帯を取り出す。

周囲が騒がしい中、冷静に。ラジ館を見上げながら。

「ラジ館で未確認物体を発見した。何か詳しい事が分かったら連絡
しろ」

そうとだけ言って携帯を切った。

7月28日 14時10分

人工衛星騒ぎから二時間後。

俺はラボにいた。

ラボとは未来ガジェット研究所の略であり、秋葉原にある古くさい雑居ビルの二階を借りて行っている小さな発明サークルの事だ。

一階には今時珍しい旧式のブラウン管テレビしか扱わない専門店『ブラウン管工房』がある。その『ブラウン管工房』の店長であり、このビルのオーナーでもある天王寺裕吾とは色々縁がある。と言うか、ざっくりと言えば敵だ。

……まあ、今は天王寺の事はどうでも良いか。

ラボの中は質素で、パソコンにテレビ、冷蔵庫、後はテーブルと椅子、そしてソファぐらい。

部屋を冷やす物は一つも無く、すぐに蒸々と熱気が籠もる為、窓は常に開け放たれている。

スナイパーにでも狙われたら一撃だ。

今度エアコンでも買うとしよう。最低でも扇風機は欲しい。

まあ、それはそれとして……やはり解せないな。

階下から頂戴したブラウン管テレビの画面を見てそう思う。

テレビでは今、ラジ館に謎の物体が墜落したというニュースが話題になっていた。

テレビの全局がこんな昼間から報道特別番組に切り替え、秋葉の様子を生中継している。

幸いにも墜落による犠牲者はいないようだが、中央通りの規制はまだまだ解かれていない。

マスコミと野次馬のせいもあり、秋葉原駅前は今混沌とした状態。おかげで調査は後回しだ。

「ところで、橋田。あれはどうなってる？」

俺はこのラボにいるもう一人の人物、ラボメンナンバー003、

橋田至に話しかける。

ちなみにこのラボに所属するメンバーの事をラボメンと呼ぶ。ラボメンナンバー001は俺、ラボメンナンバー002は椎名まゆりで、ラボメンナンバー004以降はいない。つまり三人だけと言う事だ。

「あれって、電話レンジのこと？」

「……ああ」

このラボでは時間を潰すように適当に発明品を作っており、最近八作目が出来たところだ。

その八作目である電話レンジは、電子レンジにケータイ電話を繋げることで電子レンジの遠隔操作が可能になると言う、なんとも使い所の無いモノ。

……だが、数日前この電話レンジで妙な現象が起きた。

レンジ内にあらかじめ入れておいた冷凍からあげをまゆりが遠隔操作で温めようとした時、レンジを起動させ中身を見ると、なんと逆に冷凍されていた。

「これホントどうなってるんだろね。あれから何度か試したけど冷凍されたりしなかったりだし」

原因は不明。

最近はこの奇妙な現象の究明に時間を割いている。

「……今日はこれだ」

「おお、これバナナじゃん」

俺はラジ館から帰る途中に買ってきたバナナを机に放り投げるように置く。

まゆりの大好物であるバナナ。

まゆりの分を買うついでに、実験用に余計目に買っておいただからあげだけではデータが少な過ぎるからな。

橋田が準備を終えると、一房丸ごとをレンジの中に入れた。

電話レンジの操作方法はいたってシンプルであり、レンジに無理矢理接続した専用のケータイ電話へかけるだけだ。

携帯で『#120』と入力すれば120秒間温められる。
ところが、『120#』と入力すると冷凍が始まるのだ。

元々はまゆりの単なる入力ミスだったのだが、これによりなぜか
冷凍が開始される。

中にある回転皿とそれに載るバナナが、ゆっくり回り始めた。
しかも通常とは逆回転で。

そして120秒が経ち、レンジから取り出すと

「ちょ！？ なんぞこれ!？」

バナナはバナナではなくなっていた。

極薄の皮一枚を残し蛍光グリーンのゼリー状。

試しに触れてみると、指が簡単に沈んだ。酷く脆い。

一体何が起きているのか見当がつかない。

冷凍の次はゼリー化。原理も理屈もさっぱりだ。

続いて他のモノ、身近にあつた塩や砂糖で試してみだが、今度は
変化なし。それは何度か試しても同じだ。

単結晶だと効果が無いのか、やはりさっぱりだ。

今までもろくに勉強してこなかったせいかな仮説すら浮かばない。

橋田もプログラミング技術やクラッキング技術には長けているが
今回は役立たず。

要するに手詰まり。

する事が分からなくなった俺達は、電話レンジについて悩むのを
切り上げて大ビルに向かった。

今日はこの後、ATFでのセミナーに参加しなければならない。

俺と橋田が通っている東京電機大学が、産学連携機能の一環とし
て、このATFに単位を設定しているのだ。

いわゆる夏の特別講習というところ。

これに出てレポートを書かないと単位がもらえないゼミがあるた
め、参加せざるを得ないのである。

……本当の所を言えば俺は大学など行くつもりなど無かったのだ
が、行かないとまゆりが心配するので一応通っている。そして通う

からには留年なんて御免だ。

そう言えば今日のシンポジウムはどんな内容だっただろうか。夏休みに入る前に一度確認した気がするが、忘れてしまった。

夏休みに入ってからには忙しくてそれどころではなかったからな。

大ビルの中に入ってエレベーターに乗り、5階にあるATFの会場へ向かう。

「あゝ、涼しいゝ、生き返るぜゝい。あばばばば」

大ビルはエアコンが効いており、隣の橋田は幸せそうな顔をしている。

やがて五階に到着したことを示す音が鳴り、わずかに体感としてあつた加速加重が消える。

そしてエレベーターのドアが、ゆっくりと開く。

エレベーターホールに出ると同時に

「きゃっ」

人と激突しかけた。

なんとかかわしはしたが、相手の方はバランスを崩し、俺はとっさに相手の肩をつかんで支える。

「……ありがとうございます」

さらさらの明るい栗色の髪に端正な顔立ちをした女性。いや、女性と言うより少女と呼ぶべきかもしれない。

そんな少女が軽くお辞儀をして礼を述べる。

「ああ、思い出した。今日は貴様の講義だったな。牧瀬紅莉栖」

先程ラジ館前で見えた天才少女。

彼女を見て、講義の内容を思い出した。

確か、『あの牧瀬紅莉栖によるタイムマシンについて』だったはずだ。

「……な、なんですかいきなり。いきなり貴様呼ばわりされる覚えはないんですが」

「気にするな」

「気にするなって……どうしてそんな偉そうなんですか」

「だから気にするなと言ってるだろうが」

追求が少し鬱陶しくなってきたので強引に納得させる。

紅莉栖もそれで、一步下がりがら黙る。

「しかし、よく無事だったな。あの人工衛星が落ちた時ラジ館にいただろうに」

「……なんで知ってるんですか？」

「偶々見ていただけだ」

……ドクター中鉢の記者会見を見に。

もっとも、記者会見は人工衛星騒ぎでそれどころではなくなり中止になったがな。

あの時、一足早く会場に向かっていたら直撃を喰らっていたかもしれない。間一髪だった訳だ。

「それよりも、そろそろ講義が始まる。さっさと行ったらどうだ」

「……言われなくてもそうします」

紅莉栖は不機嫌そうな顔でそっぽを向く様に顔を動かし、そのまま用意されていた壇上近くで出番まで控える様に突っ立っていた。

時間になると紅莉栖は壇上上がりマイクを持つ。

そして軽く挨拶をした後こう言った。

『タイムトラベルは不可能です』

はつきりと断言した。

その後、タイムトラベルに関する理論を述べ、最後にもう一度タイムマシンは造れないと結論づけた。

俺と同じ年だと言うのに随分と達観したものだ。

そうして講義を終えて壇上を降りる紅莉栖を見て、ふとある事を思いついた。

「おい、牧瀬紅莉栖」

「……なんですか」

「お前にいくつか頼みたいことがある。詳細は後で教える。時間がある時にここに来い」

俺はポケットから取り出した紙切れにラボの住所と俺の携帯のA

ドレスを書いて渡す。

「……いくと思いませんか」

「俺は来いと言ってるんだ。それに、面白いモノも見れるぞ」

言いたい事だけ言っていると俺は一人で、エレベーターに向かった。

橋田なら別に放っておいても問題はないし、そもそも俺は群れるは好きじゃない。

ラボだつてまゆりの提案で作ったに過ぎない。

そう、全てはまゆりのためだ。

途中あった自動販売機で冷えたマウンテンデューを買い、外へと出た。

7月28日 18時25分

ラボのあるビルに戻った俺は、ラボ下にある『ブラウン管工房』の前で立ち止まった。

日が暮れ薄暗い店内でぼんやりと光を灯す巨大なブラウン管。

この42型のブラウン管テレビは、今の日本では入手できないモノらしい。

……俺は欲しいとは思わんがな。

「おう、どうした岡部」

その巨大ブラウン管の前に腰を下ろしてスポーツ新聞を見ていた筋肉質の中年、この工房の店長である天王寺が野太い声で話しかけてきた。

どうしたと言われても大した用は無い。

かと言ってこいつと世間話をするつもりにもならない。

ただ

「おっはー」

そんな天王寺の隣に立っていた女性が気になっただけだ。

ラボを借りて以来この工房に客が来るのは殆ど見たことがなかった。来るのはせいぜい天王寺の娘ぐらい。

なので、見知らぬ誰かが店内にいる事は、ただそれだけで違和感がある。

「……客か？」

「うっ……そんな睨まないでよ。もしかして挨拶の仕方変だった？別に睨んだつもりはない。ただ目つきが悪いだけだ。

「挨拶などどうでも良い。客かと聞いているだけだ」

「あー、こいつはバイトだ。今日から雇った」

「……バイト？」

こんな時代遅れの店でか？

もしかやスパイの類ではないのかと疑ってしまうぐらいのセンスだ。

「うん、あたしは阿万音鈴羽。君は？」

「……誰でもいいだろ」

「えー、あたしは名乗ったのに」

「そっちが勝手に名乗っただけだ。俺には関係ない」

別に名乗っても支障は無いだろうが、この女……阿万音鈴羽には気を許してはいけないような気がなんとなくしたのだ。

経験による勘と言うものかもしれない。

「こいつは上で間借りしてる岡部倫太郎ってんだ」

……だと言うのに、この男はそれを容赦なくぶち壊した。おそろくわざとだ。

「岡部……倫太郎？ お前が？」

さっきは『君』だったのが急に『お前』になった。

愛想よくしていた目つきも鋭くなる。

どうやら俺の勘は当たっていたようだ。

こいつは信用出来ない。

「ああ、俺は岡部だ。何か用があるならいつでも二階のラボに來い」
俺の物言いに更に険しい顔する阿万音。殺気すら感じる。

それを俺は無視して店を出て階段を昇る。

ラボを設けて以来、用が無い時以外はラボで寝泊まりをしているのだ。

よって今日も例外ではなく、一人暗いラボのソファに寝そべる。

「……俺だ。少々調べて欲しい事がある。例の人工衛星とは別件で
だ」

携帯ごしに指示を出し終えた俺は瞼を閉じる。

翌日の昼過ぎ。

先程までまゆりと話をしていた。
るかの奴もいたので俺は一段落つくともゆりと別れた。
ちなみに、るかとは秋葉原にひっそりと存在する柳林神社の宮司
の娘だ。フルネームで漆原るか。

まゆりの友達の一人だ。

さて、このままラボに戻ってもいいのだが一つ問題が起きた。

そう、腹が減った。

思い返してみると朝から何も食っていない。

手軽な所でケバブで済みますか、それとも……と少し考えた結果、
何も買わずにラボに向かう事にした。

「お帰りニヤさいませ。ご主人様」

そして俺が辿り着いたのはラボではなく、ラボから徒歩三分あた
りの場所に位置するメイド喫茶『メイクイン+ニヤンニヤン』。

店員全てがネコ耳を装備し、喋り方もニヤンニヤンうるさい。

本来ならこんな店には足を運ぶ理由など無いのだが、一応ここ
には知り合いもいるからな。と言うか、今日の前にいる。「よく来た
ニヤン、倫太郎。ゆっくりしていくニヤ」

ここのメイドをしているフェイリス・ニヤンニヤン。本名は秋葉
留美穂。

るかと同じくまゆりの友達であり、俺もまゆりにこの見せに連れ
られ出会ってしまった。

「ご主人様、案内ニヤン」

フェイリスに案内され席につき、置かれた水を一口飲み一服。

「ご主人様、ご注文はお決まりかニヤ？」

「オムライス。それとコーヒー。ブラックで」

「かしこまりましたニヤンニヤン」

注文を受けたフェイリスはカウンターの方へ。

一人残された俺は時間潰しに携帯を開いた。

ネットに接続し、宛も目的も無く適当にページを漁る。
するとあるページで手が止まった。

『ジョン・タイター』

そこにはそう呼ばれる人物について書かれていた。なんでもその人物はタイムトラベラーを自称しているとか。

何を馬鹿な事を言っているんだかと思いつつも、気になったのでリンクからその自称タイムトラベラーがいると言つ@チャンネルの掲示板に跳んだ。

そこには確かにジョン・タイターなる者がタイムマシンで未来から来たと書き込んでいた。

しかも、ジョン・タイター曰わくタイムマシンを開発したのはSERNらしい。

確かにSERNはきな臭く、世間には明るみにならない裏もあるが、いくらなんでもタイムマシンはないだろう。

SERNは高エネルギー素粒子物理学を研究している組織であり、大型ハドロン衝突加速器、通称LHCを所有してる。

そして、このLHCによる加速衝突実験によりマイクロブラックホールが発生するかもしれないとSERNに黒い噂の様なものが流れた事もある。

このジョン・タイターとやらはそれに便乗した一人なのだろう。そう思いながらも俺はジョン・タイターの書き込みを読むのを止めなかった。

『ジョン・タイターは2036年からやって来た』

『ジョン・タイターがこの時代に来る為に使ったタイムマシンはSERNの技術を盗んで作ったプロトタイプ』

『2036年は独裁者によって支配されており、独裁者に逆らう者は容姿なく殺される』

『タイムマシンはSERNにより独占され、彼らは自身の利権の為にだけにそれを用いている』

『ジョン・タイターはその歴史を変える為にやって来た』

……等々。

作り話としては上等な方だ。

特に気になったのは『世界線』という言葉。

簡単に纏めると、過去に戻り歴史を改変すると、現在に戻ってきた場合、世界戦が変動し、その結果歴史も変わると言った所。

……過去を変えるね。

「そんな神妙な顔してどうしたニヤ？」

聞き覚えのあるニヤンニヤン声。

それによって引き戻されるように、携帯から目を離す。

「お待たせしましたニヤンニヤン」

そう言っただけでフェイリスは運んできたオムライスをテーブル上に置く。

俺はフェイリスになんでも無いと言ってスプーンに手を伸ばした。

「……何をしている」

メイクインで昼食を済ましラボへと戻ると、橋田が例の電話レンジに何か細工をしていた。

「メールを一つ送るのも面倒だし、直接これで入力出来るようにしてみた」

電話レンジにはX68000というPCがいくつもある配線で繋がれている。

これで、メールを送らなくてもPC側から直接タイマー指定を放り込めるらしい。

普段はレンジに接続されている携帯宛てにメールを送りタイマーをセットしていたので、面倒が省けて助かる。

「設定が終わったなら、さっさと実験を始めるぞ」

そう言っただけで取り出すバナナ。

昨日の続き。

あのバナナがゲル化をもう一度だ。

俺はテーブルに置いたバナナからを一本千切りレンジに入れる。

昨日は一房ごと使ったが、どう考えても一本づつの方が効率がいい。気になる点と言えば、状況が変わった事によりゲル化が起きない可能性だが、それも含めての実験だ。

「あ、でも今無理。携帯が充電切れてて使えないし」

橋田はレンジに接続された携帯を指差す。

確かに携帯がつけなければ電話レンジではなく、ただの電子レンジだ。

……しかし、ここで実験を中止にするのも面倒だ。

俺はポケットから自分の携帯を取り出しレンジに接続されていた携帯と入れ替える。

これで問題はないだろうと目で訴えると、橋田も了解。

キーボードに『120#』と打ち込み起動する。

時間を二分にする必要はないのかもしれないが、最初からあげが冷凍された時が二分設定だったので一応そのまま。

ただレンジの前で待っているだけだと二分は結構長い。

手持ちぶさたにしていると玄関から音がした。

続いて何者かがドアを叩く音が聞こえ、そちらに目をやる。

「それが電話レンジってやつですか？」

許可も貰わず勝手にドアを上げたあげく、ずかずかとラボ内に入ってきた少女。

「……来たか、牧瀬紅莉栖」

昨日の講義でこの住所は教えたが、紅莉栖が来る確証は無かった。

が、聞いた話では、その後紅莉栖は橋田に色々と質問もとい問い詰めをしたようで、俺の示唆した面白いモノに興味を持っていたらしかったので心配はしていなかった。

「一応気にはなったので。それですよ、私を呼んだ理由って」

紅莉栖の視線の先には電話レンジ。

頭の回転が速いのはこちらとしては助かる。

橋田と俺だけでは、この電話レンジで起きている現象を説明することは不可能。

そして、他に宛ても無い……そう、思ったときに紅莉栖を見つけ

た。
物理学の専攻ではないらしいか、昨日の講義を聴く限り少なくとも俺よりかは詳しいはずだ。

紅莉栖の問いに『その通りだ』と返そうとした時、割って入るようにレンジの軽快で聞き飽きた音が鳴る。

そして橋田がレンジのドアを開け 困惑しだした。

中を覗き込んだり、必要以上に瞬きをしたり、首を捻ったり。

「どうかしたんですか？」

かなり拳動不審さに、紅莉栖が尋ねる。

「……消えた。バナナが」

対する橋田の答えは、どうも要領を得ない。

何を言ってるんだと思いつながら、同じようにレンジの中を除くと

そこにはバナナは無かった。空っぽだ。

…… 一体どうなってるんだ？

冷凍やゲル化よりも理解不能だ。

起動してか、今開けるまでレンジのドアは閉じたままだった。

そして、橋田が開けた一瞬で隠した線もまたない。それは俺が保障する。

「あの、これって……」

そんな時、紅莉栖が言葉を発した。

それにつられて、振り向くと……更に理解不能な事態になった。

そこにはテーブルの上に置かれたバナナ。

先程実験に使ったバナナを千切った房のバナナ。

なのに、目の前にあるそれには千切った跡は無く、代わりに一本だけゲル化したバナナが繋がっていた。

「な、なんじゃこりゃー!? どうなってるんだ？」

橋田も事態に気づいたのか、大声を上げて混乱を示す。

「あの……何が起きたのか詳しく教えてくれませんか？」

おそらく紅莉栖が見たのはゲル化だけ。

俺や橋田が何に驚いているのかも今一分からないのだろう。

「ああ、いいだろう。だが条件がある」

「……条件？」

紅莉栖が露骨に怪しむ顔をする。

俺は気にせず話を続ける。

「そうだ。ここは未来ガジェット研究所と言う小さなサークルだ。

そして、お前にはそのメンバーとなってもらおう」

「……構わなけど私、八月中にアメリカに帰る予定ですよ？ まあ、

知識を提供するだけならオーケーですけど」

「それでいい」

紅莉栖読んだ理由は、電話レンジの解明の協力と、ラボメンへの加入。

女がまゆり一人しかいなかったもので、どうにかしたいの思っていたのだ。

他に宛ても無い上、るかやフェイリスには少し頼みづらかったので、丁度良い紅莉栖へ要請した訳である。

「そしてもう一つ。このレンジ及び俺の事は他言無用だ。もし破れば 命は無い」

電話レンジは原理不明の謎の物体だ。外に漏れたりするのは困る。そして俺がそんな研究をしている事もだ。

「……脅しですか？ 別に話すつもりもないんで安心してください。特にあなたの事は」

紅莉栖は一息を呑んだ後、強気で見返してきた。

「ならいい」

こうしてラボメンナンバー004として紅莉栖を迎え、電話レンジの実験と解明を再開した。

もう一度バナナを入れ電話レンジを起動、結果は同じ。

凝視していたにも関わらず、見事にバナナはレンジ内から消え、房へとゲル化して戻った。

紅莉栖は他にも、からげの冷凍や昨日のゲル化の話聞いた上で考え込む。

「うーん……取っかかりがほしい……」

「もういつそ、バナナが消えないように手で持っておくとかどうよ？」

「ドアを開けたら安全装置で停まるんじゃない？　そもそも危険過ぎる。まだ何が起きてるのかもさっぱりなのに」

橋田なら時間が有れば安全装置程度なら外せるだろうが、例え出来ても起動中のレンジの中に手を入れるのは危険だ。この電話レンジの場合、最悪ゲル化してしまう恐れがある。

……まあ、橋田の手がゲル化しようがしまいが俺には関係無いがな。

「ならば、消える寸前に開けるのはどうだ。もしかしたら何か変化があるかもしれんぞ」

この発想自体には何の根拠も無いが、このままだと同じような事を繰り返していても意味が無い。

例え危険でも何かをするべきだ。

「……分かった。それでいきましょう」

紅莉栖も少し悩んだ結果、実験の実行を承諾。

さつきからの様子からも察せられるが、どうやらは紅莉栖はかなりの実験好きのようだ。俺としては好都合。

すぐに準備をして、レンジを起動。

そして先程計った104秒のタイミングでドアを開け　薄暗い

部屋に、稲光にも似た青白い輝きが満ちた。

激しいスパーク音を響かせ、電話レンジが放電している。

とつさの閃光に目を瞑り、再び開くと……滅茶苦茶になっていた。部屋の中にはうっすらと煙が漂い、焦げたような匂いまでする。

「ちょ、ちょっと、これ見てー！」

開発室の真ん中に置かれていた、電話レンジとX68000が乗せてあったテーブルが 真っ二つ。

レンジはその割れたテーブルを突き抜け、更にフローリングの床に、文字通りめり込んでいた。

「なんぞこれ？ どうなって……？ いくら電子レンジでも、床に穴を開けるほど重くはないっしょ……」

「今のはただの放電現象じゃない。何かそれ以外の現象が……」

そう言えば、大発明の殆どはなにかの研究中に起こる偶然の産物だとか。

どうやらこの電話レンジもその一つの様で、思っていた以上の代物なのかもしれない。

7月30日 9時00分

この日は徹夜だった。

電話レンジの解明に、橋田と紅莉栖の三人で夜通し実験を試みていた。

実験用に買ってきた物を代わる代わるレンジに入れ、起動。

だがあれ以降、放電はおろか冷凍もゲル化も起こらなくなっていた。

何の反応も成果も無く、ただ時ばかりが過ぎ、とうとう今に至る。窓から差し込む朝の日差しが眩しい。

ちなみに紅莉栖は未だ電話レンジと格闘中。

ちなみに電話レンジは、安全を考慮してテーブルではなく床に置かれ、更に念の為にクッションにまで乗っている。

橋田は失敗ばかりの実験に飽きたのかPCの前に座り、今はキーボードを枕にいびきをかいている。

俺はと言うと、気分転換にラボの外に出る事にした。

そして、何の気もなしに携帯をいじっているとおかしなメールを着信。

『昨日の夕方にメールしたんだけど返事が無くて……。もしかしたら何かあった？』

内容はこんな感じで普通なのだが、念の為に確認してみても履歴にはそんなメールは見当たらなかった。昨日の夕方と言えば、放電騒ぎの頃のはず。何度か携帯も確認していたが、やはりメールが来ていた記憶は無い。

もっとも、その時のメールのは『今なにしてるの？』と言った内容の無いモノだったらしいが……。こうも奇妙な事が立て続けに起こると些細な事でも気になってくる。

一応見落としてはないかと履歴を適当に遡っている。そしたら見つかった。

『今なにしてる』『の?』と不自然に別れた二通のメールが。着信時間は『7/24 17:30』。今から六日前、昨日から五日前の夕方。

時間は丁度放電騒ぎがあった時と同じ。ただし四日前。

似たような内容のメールならいくつかあるが、こんな嫌がらせのように内容が二通に別れたモノを着信した記憶は無かった。現にメールは未開封だった。

メールは毎日確認しているつもりなので、見落としていただけという仮定は飲み込めない。

もしかして、また電話レンジが何かしたのではないかと勘ぐってしまう。

「何してんの、岡部倫太郎」

携帯を食い入る様に見ていると声をかけられる。

その暗く敵意の丸出しな声は顔を見なくても誰か分かる。

ブラウン管工房のバイト、阿万音だ。

「気にするな。貴様には関係の無いことだ」

無視してラボに戻ろうとする。

「……ねえ、未来ガジェット研究所だったっけ、君がやってる」

これも無視。

一々構うのが面倒だ。

「あたしも入れてくれない? それに」

「……なんだと?」

ラボのドアノブに手をかけて開けようとしていた俺は、そこでようやく振り返る。

「君の仲間に入れてって言うてるんだよ」

阿万音は頼むというより要求するように言う。

仲間にしてくれと言う割には敵意が消えていない。

本人は隠しているつもりだろうが、俺からしたらまだまだ甘い。

何を企んでもか丸分かりだ。

だが、俺はそれを分かって尚、敢えて阿万音の要求に応えた。

「いいだろう。ついて来い」

阿万音としてもやけにあっさりに行った事に、少々いぶかしんでいるようだ。

「何をしている」

「あ、うん」

ドアノブを握る手に改めて力を込め、ドアを開く。

電話レンジの前に紅莉栖、PCの前に橋田。

「……あれ、誰？ その人」

一段落着いたのか諦めたのか、電話レンジから手を離れた紅莉栖がこちらを見て当然の疑問を述べる。

「ラボメンナンバー005だ」

「……下のブラウン管工房でバイトしてる阿万音です。よろしく」

未だ警戒心を解いていない阿万音は、愛想笑いを浮かべるも切れが無い。

新たに増えたラボメンに。

「え、マジで！」

橋田は文字通り目が覚めるほどにテンションをあげ、

「私は牧瀬紅莉栖。ラボメンと言っても昨日入ったばかりだけどね」
紅莉栖は普通に挨拶をした。

「あらかじめ言って置くが、ここで見知った事は他言無用だ」

「……分かってる」

こうして阿万音はラボメンに加わった。

もっともすぐに帰っていったが。

今はまだバイト中らしく、休憩時間に顔を出す事にするらしい。

昼となり阿万音合流。

そして

「お、ゲル化したお！」

やっとの事で電話レンジに反応が起きた。

「今まで何度やっても駄目だったのに……」

電話レンジが機能するのは今の所ランダム。

「このようにひよっこりと使えるようになるしか今は手が無い。」

うわ、本当にゲル化してる。すっごいまずそう」

阿万音は興味深そうにバナナを見る。

今回は房ごとの為、バナナは戻る事なくレンジの中でゲル化していた。

「でも放電はしなかったわね」

「あれって偶々なんじゃね。あの時が初めてだったし」

「何か条件が有るんじゃないかな。これって他にも冷凍したり、瞬間移動させたり出来るんでしょ？」

「うーん……」

ラボメン三人が議論している間に俺は、電話レンジの下まで寄る。今レンジに接続されているのは、充電して復活した以前の携帯。

俺はそれを取り外し、昨日同様自分の携帯を接続する。

「あ、そう言えば昨日放電した時は岡部の携帯を使つてのよね。それにも意味があるのかしら……」

それを確かめる為にも入れ替えたのだ。

今ごちゃごちゃと言つても無駄でしかない。

試してみれば判るのだからな。

「橋田、もしくは紅莉栖。俺宛へのメールを用意しておけ」

「……どうして？ 理由を言つて」

疑問をぶつけて来る紅莉栖を無視して、バナナをレンジに入れタイマーをセット。

「内容は何でもいい。さっさとしろ」

「だから……！」

「多分何言つても無駄だと思われ。ああいう奴だから。大人しく従

っておくのがベスト」

さすがに付き合いが長いからか、橋田は何の文句も無しに携帯を取り出す。

……まあ、長いと言っても二年ほどだが。

「ほい、出来たお」

「送れ」

橋田の携帯から電話レンジに繋がれた俺の携帯へとメールが送信される。

それを確認した俺は、レンジのドアに手をかけ 開いた。

そうして再び起きる放電。

クッションが重みで潰れ、床がミシミシと軋んだ音。

部屋の中を閃光がほとばしる。

そして数秒経つとそれも止んだ。

「放電した。……どういう事なの、岡部」

紅莉栖が説明しろと口と目で訴えかけてくる。

それに答える代わりに、接続されていた携帯を取り外し、あるメールを見せる。

「……これが何だって言うのよ」

「今僕が送ったメールじゃん……て、あれ、でもこれちょっと変じやね」

「変って、どこら辺が？」

「ほら、受信日」

メールの受信日は『7/25 12:05』。丁度五日前の今だ。

どうやら推測通り、さっきの奇妙なメールと電話レンジには関係が有ったようだ

「これって過去にメールが送られたってこと？」

阿万音が言う。

「……それはない。過去にメールが送れるなんてタイムマシンじゃない」

紅莉栖が否定する。

そして俺は考える。

電話レンジは一体何なのだと。

もし、阿万音の言うように過去へメールを送る事が出来るのであれば、それは紅莉栖の言う通りタイムマシンと言う事になる……が、こんな小さな箱がタイムマシンだと言われても今一しっくりこない。業務用の電子レンジに携帯を繋いだけでタイムマシンが出来るのなら随分と安上がりなタイムマシンだ。

「メールの送受信は、人の手で作られたシステムなんだから、そのシステムの範囲内で現象を説明できるはずよ」

「ふん、君って科学者なんでしょ。それなのに確かめもしないで否定するってのはどうなの？」

「岡部達には昨日の講義で言ったけど、タイムマシンは今の技術では夢物語よ。まあ、まだデータが足りてないから絶対とは言い切れないけれど」

「ならば、とつとと実験を再開するぞ。時間の無駄だ」

電子レンジは一度機能すると続けて成功する傾向がある。

おそらく今実験を行えば成功する確率は高い。

結論の出ない議論よりも実験を優先すべきだ。

「あんたね……」

紅莉栖が何か文句を言いたそうにしているが無視だ。

「……また、何も起きなくなつた」

あれから電話レンジ起動中に接続した携帯宛てのメールを送る実験を何度か繰り返した。

そして、その実験のいずれも放電が発生した。

どうやらメールがあのか放電現象の鍵で間違いようだ。

もつとも原理の詳細は未だ不明で、発生条件さえわからない。

なので、電話レンジがただの電子レンジに戻ってしまった今、次の実験をいつ出来るかも未定にならざるをえない。

「わかったことと言えば、放電の発生条件とその影響ぐらい。原理も原因もさっぱりだし、肝心の電話レンジの条件がわからないってのはちょっとね……」

「でもさ、もしこれが本当に過去にメールが送れるんだったらすごくね？」

「だから、それはないって」

「ねえ、牧瀬紅莉栖。ジョン・タイターって知ってる？」

「……ネットにいる自称タイムトラベラーでしょ。もしかしてあなた、あれを信じてるわけ？」

「だったら？」

「あんなのデタラメよ。色々と穴があるし、そもそも研究機関であるSERENが世界を支配してる云々とか言い出した時点で怪しすぎるでしょ」

「もし本当に未来がそうならどうするのさ」

そこから紅莉栖と阿万音の議論というか討論というか……言い合いが始まった。

二人ともムキになってるのか、かなりヒートアップしてる。

そして、その言い合いの途中、阿万音が一呼吸間を取ったかと思つと

「……岡部倫太郎はどう思う？」

急に話題を振ってきた。放り投げてきたと言ってもおかしくはない勢いで。

「何故俺に聞く」

「さあ？」

含んだような物言い。

「……そこまで言うのなら調べればいいだろう」

「調べるってどうやってね」

「橋田」

「ん、なんぞ？」

「今からSERRNをハッキングしろ」

「ほいほい………え、今なんて？」

「SERRNにハッキングしろと言ったんだ。SERRNが本当にタイムマシンを研究しているのなら、何らかしらの痕跡が見つかるだろ」

「それっていくらなんでもまずくない？ いや、それ以前にSERRNにハッキングとか出来るの？」

「別に強制はしていない。橋田が無理だと言っのなら止めればいい。バレルと色々と面倒だからな」

「ちよ、僕がそんなへマするわけないじゃん」

「なら、やれ」

視線が橋田へと一点に注がれる。

「う………どうなつてもしらんぞ」

橋田はそのもとPCの前に座り早速作業を始める。

橋田は集中しているようでこちらの声は聞こえていない。

こいつのハッキング能力は確か。

その為にラボに置いているようなものだ。

「……岡部倫太郎、何を企んでる」

橋田がPCと向かい合ってる一方で、阿万音が鋭い視線でこちらを睨んでくる。

俺はそれを無視する。

企むも何も無い。

ただ、SERRNをハッキングしろと命じただけだ。

「どこにいくつもり？」

俺が玄関へと向かっていると、またも阿万音が問いかけてくる。

「お前には関係の無いことだ」

今度は無視ではなく、突っぱねるように応えた。

どこにもなにも、ただまゆりに会いに行くだけなのだが、こいつをまゆりに近づけたくはなかった。

こいつは危険だ。

そして、その危険がまゆりに飛び火させられたら困る。
そんな事になったら確実に殺す。

こいつをラボメンにしたのは監視の意味もあるのだ、迂闊な真似
をさせやしない。

せいぜい、利用できるだけ利用してやる。

俺はドアを開け、ラボの外へ出た。

太陽の日差しが眩しかった。

7月31日 14時20分

橋田がハッキングを始めてから二十時間以上が経った。

そして 成功した。

「本当に出来るなんて……」

紅莉栖は素直に驚いている。

橋田の事を見た目と言動からなめていたのだろう。

俺が無能を側に置いておくはずかれないと言っのにな。

手に入れたIDは加速器部門担当者のモノ。

SERNのサーバー管理者のモノであれば自由に全体を見回せたのだが、今の段階では限定的にしか見る事が出来ない。まあ、橋田ならもう少し時間をかければやってくれるだろうが。

調べていると『Experiment report』というメールが頻繁に目に付いた。

中身はLHCの実験レポートのようだ。

「……LHCが9年前から稼働していた？」LHCが稼働を開始したのは、去年の春ぐらいだったはず。だがこのメールでは、9年前から稼働していた事になっている。

更に調べ行くと『Zプログラム』という、LHCを使った実験らしきモノを見つけた。

『5月14日 第137次Zプログラム実験レポート』

そこには……ミニブラックホール生成が既に成されている事が記載されていた。

そう言えば、ジョン・タイターはネット上で

『既に彼らはマイクロブラックホール生成に成功しています』

との書き込みをしていた。まさに予言だ。

……出来過ぎな程に。

「公式には、実験はまだ成功してないって発表されてるはず……いや、そもそも実験の目的は、新しい素粒子反応を起こすことであっ

て、ミニブラックホール生成じゃないのに……」

「でも、実際は違う。こうして成功してる、SERNが隠していただけ」

更にレポートを続けた。

『実験結果：エラー。ヒューマンイズデッド、ミスマッチ。詳細は別紙ゼリーマンズレポート・ナンバー14を参照。リフターの調整、および各局所場適合地点をオンラインとして確定できない限り、実験は停止するべきと提案する』

「ちょ……ヒューマンイズデッドって、人が死んだって意味じゃね？」

「まさか……人体実験？……詳細は分からないの？ このゼリーマンズレポートとか」

「このIDでは見れなさげ。誰かもっと偉い人かサーバー管理者のパスを手に入れないと」

結局今回のハッキングではSERNがタイムトラベルの研究をしているという確証は得られなかった。

その代わりに、LHCが9年前から稼働していたり、ミニブラックホール生成の成功など、SERNが世間に公表していない事実が判明。

そして、くしくもそれはタイターの予言めいた書き込みと類似していた。

紅莉栖もその思考に至ったのか深く考え込んでいる。

「これで分かったでしょ。ジョン・タイターの言ってることは本当だって」

「……一部類似してる事は認める。でも、SERNがタイムトラベルの研究しているのかどうかはまだ分からないわ」

相変わらずタイタマシンを認めたがない紅莉栖とジョン・タイターは本物のタイムトラベラーだと主張する阿万音。

「ちなみにさ、今見てたのがSERNの一番でかいサーバーなんだけど、実はもう1個、妙なデータベースがあっただよなね」

「妙って?」

「いや、バグつつーか、一応プログラムのコードらしきものは出てくるんだけど、もうイミフすぎて無茶苦茶つつーか、まったくもって解読不能です本当にありがとうございましてたつつーか」

「暗号化されている可能性は?」

「あれは暗号には見えないのだけ。そもそもプログラムとして成立してないんだよね。プログラムだとしたら独特すぎるお。つまり誰にも見られないデータベースが。」

「ひよつとしたら暗号の代わりにコンパイラかまじるってのはあるかも」

コンパイラとはソースプログラムを突っ込むとプログラムになるというものだ。

橋田はちよつと解析してみるかとその謎のデータベースに対し、あれこれ試行錯誤をしたが……成果は無かった。

「つーかさ、もしこれがバグじゃなくてガチでプログラムだとしても、作ったヤツにしか分からんよ……」

そう橋田は漏らした。

そんな橋田を余所に俺はある思いつきに至っていた。

昔、あるPCがあった。

当時最先端の技術と独自使用を詰め込んだ、今やプレミアまでついているレトロPC。

そう IBN5100だ。

あれにはデバッグという機能が隠されている。つまり他のマシンのエミュレータが入っており、専用言語がマシンコードにあったときにIBN5100は他の言語も扱うことが出来た。

そして、IBN5100にしか解読出来ない言語もあった。

SERNとIBN5100。

……つまり、そういうことだ。

外部からのクラッキングに対する最高のセキュリティ方法はスタンドアローン。

そして、ISBN5100でしか解読できないのならば、それは擬似的なスタンドアロンとなる。

故にそこに眠るのは、SERNにとって最重要の機密だということであり、何がなんでも隠し通したいモノ。

ハッキングした事がバレでもしたら間違いなく消されるだろうな。

……ここにいる全員。

まあ、もとより危険は承知。

こいつらがどうなるかと俺には関係の無い事だ。

「橋田は管理者のIDとパスを手に入れる。紅莉栖と阿万音は電話レンジの検証を手伝え」

もしSERNがタイムマシンを研究しているのだと言つのなら……それすらも利用してやるだけだ。

「ちよつと……私や鈴羽はともかく、橋田とあんたは丸二日寝てないんじゃないの。少しは休まないと」

「……だ、そうだ。休みたければ休んでもいいぞ」
確かに橋田も俺も、最初の放電騒ぎからろくに寝ていない。

寝ていない……が、だからなんだと言っ。

「さつさと電話レンジを準備しろ」

紅莉栖の言葉を見無視して作業を始める。

限界来れば自分でわかる。

休むだけ時間の無駄だ。

……時間は有限なのだから。

「メールは18文字しか届いてない。他のはどこかに消えてる」

あれからまた幾時間かが経った。

その間の実験により更に判った事がいくつもある。

その一つが、受信日時妙なメールのまたも妙な点。

放電中に、電話レンジに繋いだ携帯にメールを送ると中身が全角で18字、半角なら36字。しかも三分割して届くわけだ。

弾かれた19文字目、もしくは37文字目以降はどこを探しても見つからなかった。

「じゃあ、やっぱり受信日時が狂ってるだけじゃないんだよね」

「……せめてもう少し情報が欲しい。いくら実験を繰り返しても、ここには機材も何も無いんだから限度がある」

「まあ、放電の条件として、昼頃だと成功する確立が高いってだけでも進歩じゃん」

「それもはつきりしないけどね」

放電が起きるのはだいたい正午辺りから夕方の間。その内からラウンドで成功したりしなかったり。

ただ深夜には、ほぼ放電しない事は間違いない無さそうだ。

なので、深夜二時を回ってる今は電話レンジは休まされている。

紅莉栖と阿万音はこんな時間でも飽きる事無く電話レンジについて議論を交わしている。

「……こいつらが帰らない理由はもう一つあるんだろうがな。

「キターーーーーー！」

橋田の叫び声。

歓喜と達成感の込められた叫びだ。

それに紅莉栖と阿万音も反応する。

要するに、ようやくSERENの管理者のIDとパスを手に入れたというわけだ。

これで、SERENの内部を勝手に探る事が出来る。

さっき見た『Zプログラム』という文字が『トップ・シークレット』の文字と同時に目に映る。

「プログラム立案日は……1973年になってる」

ちなみにIBN5100が発売されたのは1975年。

IBN5100独自の隠されたプログラミング言語が、このSE

RNのZプログラムのためだけにIBN5100に実装されたという可能性もくはない。

そしてZプログラムについて書かれたある記事にはこう書かれていた。

『時空の支配とそれに基づく歴史の破壊、言い換えれば過去から未来までを含む“委員会”による完全なる理想郷を実現することは、21世紀に向けてのSERNの存在意義となるだろう』

『Zプログラムは国家間の枠組みを超えた極秘共同プロジェクトであり、電磁波研究と同じく“300人委員会”から承認を受けた最優先研究事項である』

『Zプログラムでは、高エネルギーの陽子・陽子衝突を用いた、時空間転移実験を行う』

等等。胡散臭い言葉がずらりと現実そこにある。

時空間転移実験。それはつまり タイムトラベル実験。

「まさか……本当だったなんて……！ しかも40年近く前から、世界中の科学者を欺いてきたって言うの？」

記事の中に出てきた300人委員会。

300人委員会とは陰謀論の一つで、影の世界政府の最高上層部とされる組織。

「冗談の様な組織だが、この様にSERNと並べられると実在していそうな気がしてくる。

ホント……ふざける。

しかも『ゼリーマンズレポート』には、SERNのタイムトラベル実験の為に犠牲となった人体実験の被験者について書かれていた。『ヒューマンイズデッド。ミスマッチ』

超重力による無限圧縮、及びカー・ブラックホール内の特異点通過に耐えられなかったと思われるだとか冷静に分析されている。

ゼリーマンズレポートに貼られた写真には全身がブヨブヨのゼリー状のゲル化した人間がいた。

LHCは『世界一巨大な電子レンジ』なんて異名もあったりする。

つまり。電話レンジがLHCの縮小版であり、内部では同様の事が起きている可能性もある訳だ。

バナナがゼリーマン同様にゲル化した様に。

紅莉栖曰く、放電現象が意味するのは電荷であり、すなわち電子注入の可能性が高いとか。

ただ、LHCには『リフター』と呼ばれる重力制御の装置があり、ブラックホールを中心である特異点を生成する為のモノがあるらしい。もっとも、上手くはいってないようで、ゼリーマンになるは、場所は指定出来ないはときている。

だが……この電話レンジは違う。

もし、本当にこれがブラックホールを生成し、メールを過去に送れているのだとしたら、メールが指定されたアドレスに届いているのは、すなわち場所の特定に成功できていると言う事。

『リフター』に代わる物がなんなのかは不明なのは事実。

だが、少なくともその代替物の効果により、リング特異点に36バイト+ までは通り抜け可能な道が作られているのは確かとなる。この電話レンジを利用すれば……SERENを出し抜けるかもしれない。

過去を自在に変える事が出来るかもしれない。

……まあ、上手くいけばだな。

だが、可能性があるというのなら 俺は何だってやってみせる。

8月1日 13時25分

夏真っ盛り八月。

熱気が街を支配している様な蒸し暑さ。

普段ならクーラーが効いた部屋で涼んでいたいと、不必要に外を出歩く者は少ないだろうというのに、今年の夏の秋葉原はその例外となっている。

無駄に人がいて、無駄に騒いでいる。

要するに野次馬で溢れているわけだ。

目当てはラジ館にめり込む人工衛星らしきモノ。もう四日程が経ったが未だ詳細が不明の謎の塊だ。

ネットやニュースでも話題は絶えない。

通常、人工衛星は大気圏で燃え尽きるように軌道を計算して落とされる。しかし、今話題のソレはほぼ完全な形でラジ館に突き刺さっている。

ビルに激突して大穴を開けたにもかかわらずだ。

加えて被害も少ないときた。

世間ではすっかり、この謎の物体を人工衛星と扱っているが、それを証明した者はまだいない。

調査中と公言はされているものの、その実態は何も進んでいない。正体が知りたいのならば、回収なりなんなりをして解体でもすれば良いだろうに。

どこのナニかが判らないからとそこまで踏み込まない。

詳しいことが分かるまで撤去も出来ないとか。

……まあ、どこかの誰かが圧力をかけているのかもしれないがな。

国を相手取れる程に力を持った何者か、もしくは組織が。

俺は時間を潰す様に人工衛星を見上げる。

そして五分程そうした後、人混みに紛れて姿を消す。

ラジ館前を離れ、人知れず移動。

「……何の用だ」

人混みを抜け小道に出た所で、後ろを振り返る。

「やっぱりばれてか……」

俺の声に、少し間をあけ阿万音が姿を表す。おどけた風を装っているが、意味はない。

物陰からぬつと現れた以上、偶然出くわしたなんて言い訳は無理があるし、させない。

「お前達にはレンジの解明を命じていたはずだが」

この言葉にもう一人がガタツと物音を立てる。

「わ、私は偶々居合わせただけだからな。岡部の後をつけるつもりとかは全然……」

物陰から現れたもう一人は、テンパった風にペラペラと言い訳をしだす。

……天然か、こいつ？

「牧瀬紅莉栖……それ自白してるのと同じだよ」

張り詰められていた空気が見事に散り、阿万音も呆れ顔をしている。

「気分転換に買い物でもしようかってなって、駅前を通ったら君を見かけてさ。それで、どこにいこうとしてるのかなって尾行をね。君って、頻繁にいなくなるから」

「前にも言ったはずだ、お前には関係ないと」

紅莉栖はともかく、阿万音にはバラしたくない。

厄介事になるだけ。

……だが、こいつを撒くのが少々面倒なのは、ラジ館からこうしてついて来られた事から分かっている。

ここは目的をとりあえず断念して、適当に誤魔化するのが最適

「あれ、こんなところでどうしたんですか？」

方向転換をして、ラボの方へと戻るとした時だった。

今度は本当に偶々すれ違ったのであるう人物がそこにいた。

「……るか」

こんな時……。

運が悪いにも程がある。

「こちらの方達って……もしかして牧瀬さんと阿万音さんですか？」

「え……はい、そうですね」

「やっぱり。岡部さんから聞いてます。ラブメンになってくれたって」

「えっと……あなたは？」

「あ、すみません、忘れてました。ボクは漆原るかっって言います。その柳林神社で巫女をやってます」

「そう、私は牧瀬紅莉栖。よろしくね、漆原るかさん」

紅莉栖が手を差し出し、るかが慌てその手を握る。一瞬何の事か分からなかったようだ。

「……あたしは阿万音鈴羽」

阿万音は戸惑いながら名を名乗る。

現状が把握出来ないのだろうな。

「よろしくお願いします、牧瀬紅さん、阿万音さん」

素直に挨拶をする、るかにさすがの阿万音も俺へ敵意など出している余裕はなさそうである。

「岡部さんはまゆりちゃんに会いに行かれるんですね。ボクも今から向かおうと思ってたので一緒に一緒にしてもいいですか？」

るかは純粹にそう尋ねてくる。

まゆりの名がさらりと出てしまっている。

「お二人も来られるんでよね？ きつと、まゆりちゃん喜ぶと思います」

しかも、二人も来る事になっている。

「るか、二人は……」

違つと。

否定しようとした。

紅莉栖はいつか合わせようかとは思っていたが、阿万音を会わすつもりはない。

だが

「うん、そう。あたし達も行くところだったんだ」

阿万音に先手を打たれた。

「ちよっ、鈴羽……」

「お願い、話合わせて」

ひそひそと阿万音と紅莉栖が口裏を合わせ、結局二人ともついてくることになってしまった。

強引に返すのも手だが、るかの前で下手な事をするともゆりの耳に渡ってしまう可能性があり、それだけは避けたい。

悩んだあげく、俺は二人の同行を許すことにした。

もし、阿万音がまゆりに余計な事をしようとしたなら……消すだけだ。

「ねえ、漆原さん。ここって……」

紅莉栖は辺りをキョロキョロと見回しながら言う。

「……こっちだ」

阿万音は何かを考えているのかずつと黙り込んでいる。

そうして、まゆりのいる部屋の前までたどり着く。

るかがノックし、中から『どうぞー』の声が返ってきたのを確認した後、扉を開いた。

「るかちゃん、岡部くん、ようこそいらっしやいましたー」

部屋へと入る俺達をまゆりは歓迎する。そしてすぐに俺とるかの後ろにも人がいる事に気づいた。

「あー、えつと……私は牧瀬紅莉栖です。よろしく、まゆりさん」

「……あたしは阿万音鈴羽」

「あ、二人が新しいラボメンさんなんだね。ラボメンナンバー00

2の椎名まゆりです。どうぞよろしくなのです」

二人に挨拶すりように、まゆりはぺこりとお辞儀をする。

……ベッドの上で。

「ニヤニヤ、今日は人が一杯なのニヤ」

隣で先に来ていたらしいフェイリスが相変わらずのニヤンニヤン語でオーバーリアクションをしている。

プライベートの時ぐらい、その猫ミミとキャラを止めればよいものを。

だが、確かに一室にまゆりを含め六人は多いかもしれない。

少なくとも、今までにこんな事は無かった。

こんな風に……まゆりの病室に人が多く訪れたのは。

まゆりが入院して以来最多だ。

廊下を覗くと看護師が微笑ましそうにこちらを見ていた。

そう　　ここは病院。そして、まゆりはずっとここに入院している。

「主との契約により、今力が解き放たれるのニヤ。喰らうニヤ、因果逆転！」

「あー、もうちょっとであがりだったのにー！」

「えっと、確か、同じ数字のカードを4枚以上出とカードの強さが逆転するのよね」

「これであがりニヤ！」

「わー、フェリスちゃんはやっぱ強いね」

手が空となったフェイリスが、散らばったカードを回収する。

かくいう俺は、まだ一枚もカードを消費していない。

フェイリスの持ってきた猫の描かれたトランプ。

大富豪、もしくは大貧民と呼ばれるゲームだ。

場に出ているカードよりも強いカードを出していき、早く自分の手札を無くすというルール。

手札が早く無くなった人から順番に、大富豪、富豪と階級が割り当てられ、最下位の人は大貧民となる。

カードの強さは、ジョーカーを除くと2が一番強く3が一番弱い。そして俺の手札は、3と4が二枚、5、7、9、10、Qが一枚づつ。しかも柄はバラバラ。

「えい、9！」

俺の前の阿万音が9を出し、順番が逆転した。

この大富豪というゲームにはローカルルールが多く、今回はフェイリスが『全部ごちゃ混ぜにするニヤ』などと言い出してきたため、ルールが滅茶苦茶である。

ちなみに阿万音が行ったのは『9リバーズ』。

UNOに類似したルールで、9を出すと枚数、マークに関係なくターンの順番が逆になる。

おかげで、俺の番は来ず、手札はまたも減らない。

だが、今は革命中。先程までは最弱だった手札も、今ならすき放題に出せる。

「はい、」

「あ、1」

「……パスだ」

」バツク。一時的な革命であり、場札が流されるまでカードの強さが逆転する。場が流れると元に戻るが、おかげで俺が出せる手札がなくなってしまった。

「よし、2。これで、あつがりー」

「まゆりもあがりです」

……こうして次の俺の番が来るころには、るかもあがってしまい紅莉栖と一騎打ちの形に。

おまけに、るかがあがり際に革命を起こしていった為、手札は最

弱に戻ってしまっている。

その後なんとか9を消費し手札は八枚。

「……4」

紅莉栖の手札は今4枚。

さっきの革命中のJバツクで1を出したことから、紅莉栖の持つカードは最高で1。

2もジョーカーも既に出され切っているため心配する必要は無い。……勝負に出るか。

俺は5を出し、続けて7を出し、3を一枚紅莉栖に渡す。

5跳びと7渡した。

5跳びは、9リバー同様UNOに類似したルールで、5を出す
と次のプレイヤーの順番を飛ばすことができるのだ。

7渡しは、7を出した枚数だけ次のプレイヤーに不要なカードを
渡すことができるルール。

通常はゲーム進行に伴い手札は減っていく一方だが、このルール
を採用すると逆に増える訳だ。

これで紅莉栖の手札は六枚、俺は七枚だ。

紅莉栖はしばし考えた後、9を出す。

それに俺は10を返し、3を捨てる。

「うわー、緊迫してきたね」

「倫太郎が巻き返してきたニヤ」

「二人とも頑張ってる」

あがり終えた大富豪達がギャラリィとなって騒いでいる。

「……パス」

10で何も出せないということは10以上はないと考えてよさそ
うだ。

いや……ペアになっている為、出しあぐねただけかもしれない。

俺が持つ手札は、4のペアとQ。

紅莉栖が10以上を持っていないのならば、ここは迷わずQを出
す。

だが、もしそれが失敗すれば俺に勝ち目は無くなる。

ここは手堅く4ペアを出し、様子をうかがうべきか……。

俺は長考の末　Qを出した。

「く……」

それを見て紅莉栖は息をつまらし　Kを出した。

俺の完敗だった。

「緊張してドキドキしちゃいました」

「ナイス、牧瀬紅莉栖」

るかが感想を述べてる一方で、阿万音が紅莉栖を労っている。俺が負けたことがよっぽど嬉しかったようだ。

言い訳のようだが、紅莉栖にはペアは無く、あの時4のペアを出していれば俺の勝ちだった。

まあ、終わった事を後からごたごた言うつもりは無いがな。

「勝者であるクーニヤンにはこのトランプをあげるニヤ」

「いや……私、下から二番目なんだけど」

紅莉栖が猫トランプをフェイリスから受け取る。

片付けも終わり、一段落ついたところで俺は腰をあげる。

「帰られるんですか？」

「……ああ」

俺はまゆり達に背を向け、病室の扉を開く。

るかはここに残り、紅莉栖と阿万音、フェイリスは俺と同じく帰るようだ。

「えへへ、今日はとっても楽しかったのです」

それを見送るまゆりは、はにかみながら感謝を述べる。

「今日は来てくれてありがとうがとうね、クリスちゃん、スズさん。それ

と……岡部くんも」

「……また来る」

俺は病室を出た。

なし崩しのに連れて来てしまったが、これはこれでありだったのかも知れない。

阿万音もここでは俺に対する敵意を消して、純粹にまゆり達と楽しんでいた。

まゆりも楽しそうだった。

俺は携帯を取り出す。

……時間は少ない。

あの笑顔を俺は失わさせはしない

8月1日 17時00分

ラボへと戻ると、もう夕暮れだった。

ちなみに阿万音はバイトをサボった為、下のブラウン管工房で店長に説教を喰らっている。

「ちょ、僕だけ仲間はずれとか」

何をしてたんだと尋ねてきた橋田に、紅莉栖が説明をすると橋田はすねだした。

「人が電話レンジを必死に改良してる間に、フェイリスさんとトランプなんて……このリア充め！」

「電話レンジを改良？」

橋田の叫びを無視して、電話レンジの話題に食いつく紅莉栖。

橋田はもう少し文句を言いたさげだったが、ため息をついた後、仕方ないと話を始める。

今までは、放電現象を起こしDメールを送るには、一々メールを受信する携帯を電話レンジに繋ぐ必要があった。橋田はその面倒な過程を省略しようとしたのだ。

簡単に言うと、以前利用していた電話レンジ専用携帯にメールの転送機能を付けることで、その専用ケータイを経由して好きな番号にDメールが送れるというわけだ。

……ちなみにDメールとは『電話レンジで起こる放電中に送信すると過去へ送れるらしきメール』を略したものだ。電話レンジの『D』。正直俺は名前とかはどうでも言い。

あと、過去へ送れるらしきというのは、まだ過去へ送れている確証がないからである。

「今まで何度かDメール送ったけど岡部は過去に受け取った記憶はないんですよ」

「……ああ」

「だったら、まだ決め付けるのは早すぎる」

「……ならば、確かめればいいだろう」

「確かめるって……どうやって」

過去にメールが送れているのかを確かめる方法？

そんなの簡単だ。

「過去に干渉するメールを送ればいい」

今まで送ったメールは内容の無い、迷惑メールの様なものばかりだ。

『AAAAAAA』や『あいうえお』など。

こんなメールを受け取っても怪しむだけで、過去に何の影響も与えない。事実、影響どころか受信した覚えも無い。つまり意味の無いメールだ。

「それって……過去を変えるってこと？」

「それが一番手っ取り早いだろ。Dメールが過去へと送られているならば、なんらかしらの変化が起きる。そうでないのなら、何も起きない」

ほら、簡単だ。

言葉にする事も、今の俺達が試す事も。

……人類史上で誰も成し得ていない『過去の改変』、その可能性が今俺達の身近、すぐ目の前にある。

「岡部、あんたバタフライエフェクトって知ってる？ もし、本当にDメールが過去へと送れるのなら迂闊に試すべきじゃない」

バタフライエフェクト……どんな些細なことでも、意図的に変えれば未来に重大な影響を及ぼすかもしれないというカオス理論の一つ。つまり、取り返しの付かないことになったらどうするのだと言っているようだ。

「試さなければ、永遠に真実は判らないかもしれんぞ」

「う……」

口ごもる。

思った通り、口では否定的でも、心の中では実験はしたくてたまらないようだ。

つくづく利用しやすく、都合のいい性格だ。

俺には過去がどう変り、どんな滅茶苦茶な未来になると知ったことではない。

過去を変えられるのなら……こんな『今』、簡単に否定してやる。

「実験は明日の昼だ。今日は帰っていい」

おそらく今は、放電現象は起こらない。

実験まで少しの間休息をとることにした。

「でも、過去を変えるって、実際何て送ればいいん？」

「確かに……」

翌日の昼、十二時半前。

ラボには全員が集まっている。

「それなら悩む必要は無い。俺がやる。さっさと準備をしる。時間が無い」

「ちよっ、そんな横暴な」

俺は携帯を取り出し、Dメールで送る中身打ち込む。

「何を送るつもりだ！」

阿万音が接近し、携帯を奪おうとしてくる。

それを、俺はかわしたが 誤って携帯を落としてしまった。

「しまっ」

「牧瀬紅莉栖、それを拾って！」

携帯は滑るように転がり、紅莉栖足元へ。

そして、紅莉栖が携帯を手にし、中身を見る。

「これって……」

「ちよっと、見せて」

今度は素早く紅莉栖の下へ移動する阿万音。

「……え？ なにこれ」

阿万音は間抜けな声そう言う。予想外で驚いているのか、素で呆れているのか。

『紅莉栖の持ち札にペアは無い』

……俺が打ち込んだ中身はこれだ。

「これってもしかして、昨日のトランプ？」

「せこいというか小さいっていうか……」

紅莉栖も同様にため息をつきそうな口調で言う。

「……何とでも言え」

別に負けず嫌いでこんな事をしているわけではない。

昨日負けたのが悔しかったわけでもない。

ただ、些細で身近で変える事が可能な過去を考えたとき、思いついたのがこれだったというだけだ。

深いは無い。

本当に無い。

無いと言えば無い。

「タイマーは19秒だ」

今が十二時半で、昨日のトランプが午後の五時半頃。

今から十九時間前にメールを送れば、ちょうど紅莉栖との一揆打ちあたりが届くはず。

……本当に過去に送れるのならばの話だがな。

キーボードに『19#』と打ち込まれ、電話レンジが起動する。

危なっかしい光を放ち、ラボを揺らす。

そしてすかさず送信ボタンを押し 世界が歪んだ。

何の前触れも無く目眩が襲い、同時に身体が宙に浮いたような感覚を得る。

まるで俺一人が違う世界に放り込まれたかのような錯覚。

俺はこの感覚を以前にも感じた事がある。

忘れもしない。

いや、忘れる事など永遠に許されない。

十年前のあの日あの時、俺は

「おい、岡部。急にどうしたの。ふらふらと
はっとした。」

俺の目には紅莉栖が映っており、目眩は治まっていた。

「……なんでもない」

口ではそう言うが、本当のところは少し無理をしているかもしれない。

今感じた奇妙な感覚のせいで、あの時の事を思い出してしまった。
それに、今のは一体なんなんだ？

Dメールを送信したのとはほぼ同時。

偶然で澄ます事も可能だが、俺の勘がそれをさせなかった。

そして違和感に気づく。

俺は……手ぶらだった。何も持っていなかった。

ついさっきまで持っていた携帯が忽然と消えしまっている。

確認するように、身体のおちこちをペタペタと探り、ポケットに
二つの固形物を感じた。

一つは 携帯。

Dメールを送る寸前までこの手で持っていたはずの携帯が、
いつの間にかポケットの中にきれいに収まっていた。

そして、もう一つ。

手に収まるサイズ箱。

猫の絵が描かれたトランプの箱。

昨日病院で紅莉栖がフェイリスが賞品として受け取ったモノ。

それがどうして俺のポケットに？

当然、俺には預かった記憶も、ポケットに入れた記憶も無い。

本当にいつの間にかなのである。

「……俺はいつこれを手にした」

紅莉栖に尋ねた。

紅莉栖は嫌味のもりかと言った。

「それは昨日、大富豪で勝ったあんたがフェイリスさんに貰ったん

でしょ。勝ったっていつても下から二番目なのにな」

俺が下から二番目なら、お前は最下位だろうが……そう頭の中で呟いたところで、もしかしてと思った。

「……俺はお前に勝ったのか？」

「だから、そう言ってるのが」

「……どうやって」

「どうやってって……岡部が4のペアを出して、ペアを持ってなかった私がパス。そして、最後の一枚を岡部が出して終了。もしかして、記憶喪失にでもなった？」

挑発するように紅莉栖が言うが、俺はそれを無視する。

そんな事に構っている場合ではない。

俺は昨日、4のペアではなくQを出して負けたはず。

それなのに、紅莉栖は間逆のことを言っている。

俺の記憶にはない事を、さも事実の様に。

実際にはありえていないはずの事を、さもあったかの様に。

「……紅莉栖が言ってることは本当か？」

阿万音に問う。

本当だと頷く。

……一体どうなっているんだ？

本当に過去が変わったとも言うのか？

俺はポケットからさっき取り出した携帯を開き、メールの受信履歴を見る。

受信日時は「8/1 15:35」。

中身は「紅莉栖の持ち」 「札にペアは無」 「い」。

三つに分割された、今さっき送ったDメール。

「……お前達、これに見覚えはあるか？」

まさと思いなながらも尋ねた。尋ねずにはいられなかった。

「何これ？ Dメールよね。こんなのいつ……って、これ、昨日の大富豪の話じゃない」

「受信時間も丁度大富豪の真っ最中だよ。それも、牧瀬紅莉栖と岡

部倫太郎の一騎打ちの時」

「そう言えば、あの時メールを見てた……って、まさか……」
ここまで聞けばさすがに判る。

俺は昨日、紅莉栖に勝っている。

そして、賞品としてフェイリスから猫トランプを受け取った。

俺の記憶とは異なった過去。それが事実となって、ここにある。

「この電話レンジは……本物のタイムマシンだ」

Dメールは本当に過去へと送られている。

そして過去は改変された。

俺は思わず、ガラにもなく笑みを浮かべた。

口を軽く引きつらしたただけで、とても笑っているとは言えない顔だが、それでも俺は笑っていた。

過去は変えられる。

俺は今を変えられる。

俺はこの世界の決定を 否定できる。

8月3日 10時00分

過去は変わった。

今も変わった。

俺以外のモノ全てが変わった。

……あの後、紅莉栖達に聞いたところ、俺は突然立ち止まって呻き始めたそうだ。

その前後にDメールを送った事実は存在しなかった。

誰も覚えてはいなかった。

そして、現状を理解しようと頭を悩ませていた俺は、ネット上でタイターが言っていた世界線理論を思い出す。

世界線とは無限に存在する因果の系の様なモノで、その世界線は日々、刻々と変動している。

しかし。因果は何か有っても矛盾を許さず、結果が改変された場合、それに伴う原因も破綻が無いように改変される。

それゆえに因果に支配されたあらゆる生物は世界線の変動に気づけない。

今回の場合ならば、俺はDメールを受け取り過去を変えた。その結果、今も同時に改変された。

俺は紅莉栖に負けたからこそ、勝てるようにDメールを送った。

だから、紅莉栖に勝った『今の』俺はDメールを送る必要が無い。そういう風に改変されたのだ。

だが、そこでもう一つ疑問が湧いてくる。

人の記憶もその世界線にあわせて再構成されてしまうというのなら、どうして俺の記憶は改変されていないのか、だ。

俺だけが、因果の流れから逸脱している。

「……で、何故お前がついてくる」

「べ、別にいいでしょ。まゆりに会いに行くだけなんだから」

あのDメールの後も実験は行われた。

Dメールは過去を変えられる。

その事実により、紅莉栖も電話レンジがタイムマシンだと認めざるを得なかった。

だが、実験は失敗続き。

あれ以降過去は改変されていない。

少なくとも、俺の認識では変っていない。

要するに過去改変が成功しないままタイムリミット。

電話レンジは使えなくなり、また使えるようになるまで待機となった。

そして、今はその翌日。朝だ。

ラボで目を覚ました俺は、まゆりの下へと行こうと外へ出た。

すると、ホテル泊まりの紅莉栖がラボへとやって来て遭遇。

そのまま、ついてきた。

……まあ、紅莉栖を連れて行けばまゆりも喜ぶだろうし、断る理由も特には無かったので、放っておくことにした。

「ねえねえ、紅莉栖ちゃんって科学者さんなんだよね。どんな事研究してるの？」

今日はまだるかは来ていないようで、病室には俺と紅莉栖のみ。さきほどから二人はお喋りを続けている。

「私は脳科学専攻。分かりやす言えば、脳の仕組みを科学的に解明するの」

「へー、すごいんだね、紅莉栖ちゃん」

「え、いや……ありがとう」

素直に、純粹に感謝するまゆりに照れながらも礼を述べる紅莉栖。

紅莉栖の性格から『大した事じゃないわよ』とでも言うかとも思ったが、まゆり相手ではそんなすかした態度は取れなかったのだから。

「えっと、それで……」

ニコニコと笑みを向けてくる、まゆりについて耐えられなくなり、誤魔化すように話を再開した。

「あ、そうだ。まゆりって『サイエンス』って知ってる？」

「うん、紅莉栖ちゃんが載ってるんだよね。この前、岡部くんに見せてもらったよ」

正しくは紅莉栖の論文が載ったのだがな。

『サイエンス』誌に載っていた論文。

タイトルは確か『側頭葉に蓄積された記憶に関する神経パルス信号の解析』だったはず。

「その論文にも書いたんだけど、私が研究してたのは記憶ってどんなものかについて」まゆり向けに、ざっくり、単純に話す。

多少の親切心はあるようだ。

おそらく、神経パルスやらニューロンやらを話されても素人であるまゆりにはさっぱりだろう。

俺とて理解しきれない。

「記憶って連想ゲームに近いの。朝、ご飯、パン……みたいな感じで繋がってる。パターン化してるとも言える」

脳をタンスで例えるとするなら、そのパターンの集合体は引き出しだ。

そして、その引き出しの中も細かく分類されている。

食べ物の中に、野菜があり、その中にナス科が、さらにその中にトマトがある、さらにトマトにも種類があり、また分類される……例えるとこんな感じだろうか。

他の引き出しには肉とか、野球とかがあるのだろう。

「その記憶のパターン、そしてさらにそのパターンに辿りつくパターンを解析したのが私のいた研究チームなの」

「へー、そうなんだあ」

「……おそらく、まゆりは紅莉栖の話の一割も理解していない。噛み砕こうが、単純かしようがまゆりには難しかったようだ。」

「まゆりは、ただ紅莉栖がすごいんだという事実だけを理解し、うんうんと訳も分からずうんうんと聞いている。」

「それに気分をよくしてか、話しやすいのか紅莉栖は話を続ける。」

「あとね、私の通ってる大学の、精神生理学研究所が、ヴィジュアル・リビルディング、略してVR技術っていうのを何年前に開発した」

「ぶいあーる？」

「そう。簡単に説明すると、ビデオカメラなんかの映像機器に映した風景の映像信号を、神経パルス……脳の電気信号に変換する技術のこと。逆に、神経パルスを普通の電気信号に変換することもできるわ」

「で、このVR技術と、私たちの研究を組み合わせると……どうなると思う？」

「紅莉栖はまゆりにクイズを出すように問う。」

「問われたまゆりはうーんと考え込む。」

「……まゆりは紅莉栖の今の話を理解出来たのだろうか？」

「えへへ、まゆりには思いつかないのです」
「やはりな。」

「答えはね……人間の記憶のデータ化よ。記憶の移植、バックアップ、外部保存……そういうことができるようになるの」

「記憶を保存できるの？」

「ええ、いずれはね」

「紅莉栖はさらりと言うが、言葉で言う程簡単な話ではない。」

「それはまさに『魂』の保管に等しい行為。」

「一部の宗教圏からは、強い反発があがり、その一方で、医療界からは画期的な研究として賞賛の声も出ているとか。」

「タイムマシンといい、随分とSFじみた事が身近になったものだ。」

「じゃあ、まゆりの記憶も保存できるのかなあ」

「え……まあ」

「えへへ、そっか。すごいね」
まゆりはそうはにかむ。

記憶がデータとして残せるのならば、記憶上では永続的に生きる事ができる。

身体に寿命が変われば、新しい身体に記憶を移せばいい。

だが、それは神とやらに反逆するような行為。

倫理的にはまかり通ることはできないだろう。

だが……それでも生きたいと願う者がいるのならば、誰が否定できるか。

少なくとも俺は否定させない。

「今日ありがとうね。色々と勉強になりました」

「うっん、こちらこそ喋りすぎたかも」

話も一息つき、俺と紅莉栖は返ることにした。

もっとも話と言っても、ほぼ紅莉栖が一方的に語っていただけだ
が。

「そんなことないよ。とつても楽しかったです」

「そう言ってもらえるなら、私も嬉しいわ」

微笑み合う二人。

「またね、紅莉栖ちゃん、岡部くん」

そうして俺は病室を出る。

「……ねえ、岡部はほとんど喋ってなかったけどよかったの？」

確かに、今回俺は二人を少し離れた位置から見守っていただけだ
った。

「……まゆりが笑顔でいてくれるのならそれでいい」
別に俺が関わる必要は無いのだ。

まゆりが明るく元気に生きてくれるのなら……俺は必要ないのだ。
「……悪い、先に行つてくれ」
病院を出たあたりでメールを着信したので、紅莉栖を先にいかせ
る。

「え、メールでしょ。少しくらいなら待つわよ」
だが、紅莉栖はそう言つてこの場に留まつた。

……これには意外だった。
てつきり、俺とはあまり関わり合いになりたくないと思つてい
るとばかり思つていたのだが。

まあ、ただ紅莉栖が人を放つて先に行けない質なだけかもしれない
いが。

どちらにしろ少し意外だ。

「時間がかかるのなら飲み物でも買つてくるわ。何がいい？」
そう尋ねてきたので『マウンテンデュー』と返しておいた。

紅莉栖はそのまま近くにある自販機まで向かつていった。

気まできかせるとは更に意外だった。

……金はちやつかりとつていったが。

俺は携帯を開きメールを見る。

念の為に言つておくが、Dメールではなく普通のメールだ。
受信日時はいさつき。

そのメールは非常に短く、紅莉栖を先に行かせる必要は無かつた
かもしれない。

メールには

『ジョン・タイターを捜せ』

……そうとだけ書かれていた。
短く簡潔。

ジョン・タイターを捜せ？

何を言つてるんだこいつは。

どこにいるかも分からないネット上の人物を捜せとは無茶無理過ぎる。

もしこいつが本気で俺が見つけれられると思っているのならば、よっぽどの馬鹿か、よっぽど俺の能力を過大評価しているかだ。ため息をつきながら携帯を閉じポケットにしまう。

まったく何が捜せだか。

……命令されなくても既にやっている。

例え無理だとしても、不可能だとしても俺は奴を捜し出す。

タイターはSERENの情報を知りすぎている。

それは国家機密にまで至り、奴はネットに書き込みまでしている。

そして……俺の知りえない事もおそらく知っている。

それはすなわちタイムマシン。

奴が本当にタイムトラベラーなら聞き出したい事はいくらでもあるんだ。

ならば探すのは当然であり、必然だ。

「……FB、俺はお前の思い通りには動きはせんぞ」

俺は無意味に太陽を見上げた。

周囲には人が何人もいるというのに、ここには俺一人しかいない

……そんな錯覚を覚えた。

だが、やはりそれは錯覚で、視線を落とせばジュース管を二つ持った紅莉栖がいた。

8月3日 12時50分

ジョン・タイターはこの誰か……それを探る術は俺にはない。だが、もし奴がこの秋葉原にいと仮定するとしたならば、色々見えてくることがある。

タイターが最初にネットに書き込めをしたのが7月28日の午後。そして、ラジ館に例の人工衛星が墜落したのが7月28日の正午あたり。

これを偶然で済ますことも可能だが、逆に疑おうと思えばいくらでも疑える。

それに、7月28日は他にも色々ありすぎだ。密集している。まず、ドクター中鉢によるタイムマシン開発の記者会見。

これは、結局人工衛星騒ぎで中止になったが。それと実際のところ中鉢がタイムマシンを開発できていたのかは不明。

続いて、電話レンジによるバナナのゲル化。放電が起きてDメールが送れたのはその次の日。

次に、牧瀬紅紅莉栖による講義。あの時タイムマシンはありえないとか主張していた紅莉栖が、今はそのタイムマシンの解明に携わっているのだから、人生どこで何が起こるか分からない。

……こいつの運の尽きは、俺に目をつけられてしまったことだな。ご愁傷様だ。

あと二十八日あったことと言えば……ラボ下のブラウン管工房にバイトが入ったことくらいか。

あの万年閑古鳥が鳴いているような店に、このタイミングでバイト……やはり、疑えばいくらでも疑えるな。

特に阿万音は最初から俺を敵視していたし、偶然とは余計思いきい。

だから、とりあえず阿万音についても調べてみたのだが……

「……ここで何してるの、鈴羽」

紅莉栖が驚いたような、呆れたような声。
俺も半ば同感だ。

阿万音の現住所を聞いた俺は、確かめるためにも病院帰りにその場所へ寄った。

ちなみに紅莉栖はまたもついてきた。

どこに行くのかとしつつこく聞いてきたので

「……この前あそこで阿万音を見た。確かめにいくだけだ」
そう吐き捨てた。

そしたら、私も、とついてきたわけだ。

まあ、場所が場所なので、紅莉栖がついてきても問題はない。

むしろ緩和材になってくれるかもしれん。

俺が一人で訪ねても怪しまれるだけだろうからな。

そうして紅莉栖と共に阿万音の家に辿りついたのだが、そこには

……テントがあつた。

「何って……ご飯炊いてるだけだけど？」

その側には飯ごうに火をつけている阿万音。

情報では聞いていたが、本当にホームレスだとは。

……まあ、不況の現代では大して珍しくもないが。

「いやー、東京にきた初日に携帯とかマウンテンバイクとか買ったら当座の資金が底をついちゃってさ」
へらへらと誤魔化すように笑う。

確かに、テントの隣には浮いたようにきれいで本格的なマウンテンバイクがある。ブラウン管工房前にも置いてあったのを覚えている。

「だからってこんな所に……」

「まあ、慣れてるから」

心配そうにする紅莉栖に対し、阿万音はけるっとそう言う。

強がりではなく、これは事実で本音だ。

「それに……ここはあたしのいたところより安全だからさ」
だから心配は無用だ、と阿万音は言う。

そして……俺を睨む。

「あたしが住んでいたところは地獄だった。……ここが天国に思えるほどにね」

その目は口で言う通り、平々凡々と気楽に生きてきた奴ができる目ではない。そもそも、そんな奴は殺気など放たない。

「……でも、どうしてここに？」

紅莉栖はそんな空気に耐えられなかったのか、阿万音に問う。

どうしてこんなところに住んでいるのかではなく、どうして東京に来たのかだ。

この見計らったようなタイミングで。

「……あたしにはやらなきゃいけないことがあるんだ。命に代えてでも成しとげなきゃいけないことが」

真剣な目つきの阿万音が、ふと誰かと重なった。

あの目をした者を俺は見ることがある。

運命を変えられるのなら神さえも殺してやるという目。

「ねえ、鈴羽っていつまでここにいてつもりなの？」

「え？ うーん……わかんない。夏の間はいると思うけど」

「ならば、私のところに来ない？ 私が泊まってるホテル、ツインだからベッドが空いてるの」

「え、でも……」

「でもじゃないわ、こんなところで寝てたりしたら風邪ひくわよ」

今は夏だからその心配は無いと思うがな。

「で、どうする？ 来る？ 来ない？」

紅莉栖と阿万音は確か同い年だったはずだが、上から目線というか偉そうというか……。

「あはは、そこまで言われちゃ断れないよね」

そういうことだ。

紅莉栖のこれは提案ではなく一種の命令だ。

「じゃあ、荷物はいつ運ぶ？」

「今はバイトの休憩時間だけど、今から荷物運んだりしてたら過ぎ

るかも」

どうしよう……そう二人がああだこうだ言っている。

煩わしい。

「……それなら任せておけ。あの店長には俺から言っておく。紅莉栖と鈴羽はさっさとやることをやっておけ」

俺はそう言っただけで二人に背を向け公園を出た。

「岡部……」

……これは、すこし前に時を遡る。

『ねえ、あんたってどうして鈴羽だけ名字で呼ぶわけ？』

鈴羽がいるという公園に向かう途中、紅莉栖がそんな事を聞いてきた。

『……どうでもいいだろ』

『いや気になるわよ、まゆりやるかさん、フェイリスさん……は、名前かどうかわからないけど、つい最近会ったばかりの私でさえ名前と呼んでるのに、どうして鈴羽だけ？』

『……特に意味はない。橋田だって名字で呼んでいるし、お前だってそうだろ』

『いや、橋田を名前で呼ぶのは、ちょっと生理的に無理』

『それと同じだ』

鈴羽は俺を敵とみなしている。

ならば俺もそれなりに警戒するのは道理だ。

戦場で敵を親しげに名前で呼ぶなんてありえないだろう。

……そう言ったそばから、鈴羽と呼んだことには特に意味はない。

ただの気まぐれ。

あと……不思議とこの呼び方がしっくりくるのもある。

何故かはわからないが、紅莉栖を紅莉栖と呼ぶのもそう。

いつか、そう呼んだことがある気がしたのだ。

……まあ、こんなのはよくあるデジャビュだ。

「ジョン・タイターについては何かわかったか」
俺は電話越しに尋ねる。

「……まだ、なにも」

「そうか、ならば阿万音鈴羽についてももう少し調査を続ける」

鈴羽が東京の地を踏んだのは、ジョン・タイターがネットに現れたのと同じ七月二十八日。

今俺が考えられる唯一のタイター候補だ。

もし、タイターがタイムトラベラーであり、そのタイターが鈴羽であればある程度の辻褃はあう。

鈴羽は自分の住んでいた場所を地獄と呼んだ。

そして、ネット上でタイターも未来は最悪な世界になっている言っていた。

紅莉栖がタイターを否定した時も、鈴羽はタイターを擁護した。

怪しむなと言う方がおかしい。

俺は誰も信じはしない。

全てを疑ってかかる。

そうやって生きてきた。

そしてこれからも。

「IBN5100の搜索も並列して続ける。俺も探す。絶対に見つけるんだ」

「……了解」

電話を切り、携帯をしまう。

タイムトラベルの研究や人体実験の事実よりも、SERENが極秘にする謎のデータベース。

所長クラスでさえ閲覧不可のそれを見る為にはIBN5100が必要となる。

今まではそんなモノ、俺に必要ななどなく、見つける意味はなかつ

た。

だが、今は違う。

今探さなくて、いつ探す。

電話レンジのことがいつSERNにバレるか分からない。

一刻の猶予も無い。

SERNも、FBも、ジョン・タイターも、紅莉栖達も……全て

を利用してでも、俺は俺の成すべきことをする。

失敗は許されない。

何をしてでも俺は勝たねばならない。

この……運命とやらに。

8月5日 14時25分

俺は時々夢をみる。

まゆりが……殺される夢。

原因も理由も何一つ分からない。

ただ、死ぬのだ。

時に銃で撃たれ、時に電車で轢かれ、時に病気で……あらゆる手段でまゆりは殺される。

これがまゆりの運命なのだと示唆するように。

何をしてもまゆりは助からないのだと。

そしてその度に俺は、その死を何も出来ず、無力に見送る。

こんな夢はもう……御免だ。

「あ、あの、こんにちは……」

玄関ドアをゆっくりと開かせ、顔をのぞかせたのはるか。

俺が呼んだ。

「あの……お話ってなんですか？」

今ここには、紅莉栖、鈴羽、橋田……つまりラボメンが全員いる。

そして、ラボメンだけの内密、おれ自身が他言無用と言った言葉がある。

「なあ、るか。過去にメールを送れるとしたら……お前はとうするDメール、電話レンジ、要するにタイムマシン。

外へと決して漏らしてはいけないそれを俺は口にした。

それは、見るものが見れば俺がるかを信頼している様にも見える。また、見るものが見ればるかを巻き込もうとする非情な行為にも

見える。

今まで俺はるかをこのラボに呼んだことはない。

るかはまゆりと一番親しく、会話も多い。

つまり、るかを俺の厄介後に巻き込めば、間接的にまゆりも巻き込みかねない。

だが、俺はそれに反した。

もう手段を選んでる時間は無いと決断した。

……これが、るかでない他人なら、なんの躊躇いも無かっただろうに。

今日の朝のこと、適当に辺りをうろついていた俺は柳林神社に足を運んでいた。

そして、その神主、つまりるかの父親に出会い、多少の雑談をしていた。

雑談と言っても、情報収集だ。

人工衛星の墜落から、ネット上で騒がれているジョン・タイターについてどう思うか……という、表面上は当たり障りの無い世間話るかの父親はジョン・タイターを知らなかったようだが、自称タイムトラベラーでありSERENがどうか言ってるそうだと言つと、急に考え込むように黙った。

そして、思い出したのように口を開いた。

『……今何と？』

『いやね、るかが生まれる前の話なんです、妻が奇妙な体験をしたんです。妊娠中、ポケベルにおかしな数列を受信したんです。

それが未来の日付からでして』

話はまだ続く。

『それが何なのか分からなくて、知り合いに見せましてね。その方は大企業の社長で、そしたらその数日後にSERENの科学者さんが来たそうで』

更に続く』

『なんでも、その人は2000年問題の時にワクチンプログラムを

作った偉い人だそうで」

「……そうなんですか」

それしか言えなかった。

未来からの受信。それはすなわちDメール。

送った記憶の無い、あるはずの無いDメール。

それが十八年前のるか母親のポケベルへと送られた。

誰かが送ったDメール……それがSERENの科学者の手へと渡った。

つまり、Dメールの存在がバレている可能性が高い。

当時のポケベルはナンバーディスプレイが実装されていないため、誰が送ったかは分からないだろうが。

聞いた話では送信日は、今年の八月。

そこから推測できるのは、俺たちがDメールをこれからの母親のポケベルへと送るのか、それとも俺達以外の何者かが俺達から電話レンジを奪いDメールを送るのか。

……それは、いくら考えても答えはでない。

未来はまだ確定しない。

ならば　こちらが決めるまでだ。

「過去にメール……ですか？」

「ああ」

「まあ、全角で18文字しか送れないけどね」

紅莉栖が補足する。

紅莉栖と鈴羽は、人には他言無用とか言っておきながら自分は例外つてのはどうなんだと言ってきたが「るかなら外に漏れることは無い」、その一言で納得したのか黙った。

Dメールによる過去改変の実験は、結局あれから一度も成功していない。

なので紅莉栖に関しては実験に行き詰まりを感じ変化を求めているのかもしい。

鈴羽は謎だ。

「それって、タイムマシンなんじゃ……」

「そう、タイムマシン。過去を変え、今を、未来をも変える可能性を秘めたモノだよ」

「そんなモノを……ボクが使っていていいんですか？」

「ええ。私はDメールは送らないし、橋田は何度やっても不発。鈴羽は最近携帯を買ったばかりだし。他の人のデータも欲しかったから」

「でもボク、ラボメンじゃないし……」

「それなら心配は無い。今日から、お前はラボメンナンバー006だ」

「え、いいんですか」

「ああ」

「あの、嬉しいです。ボクもラボメンになりたいなあって思ってたから……」

涙を浮かべるような勢いで喜ぶるか。

……だが、俺はるかの為ではなく、自分の目的のために利用しようとしている。

それでも俺は何も感じない。

罪悪感など今更俺が感じていいものではない。

罪悪感など……言い訳にすぎないのだから。

「あの、でも、過去へ送りたいメールと言っても……」

何も思いつかないんですけど、申し訳なさそうに言う。

「……なら、俺から頼みがある」

「頼み……ですか？」

その言葉にるか……いや、ここにいるラボメン全員が驚いたような顔をしている。

そう言えば俺が形式上とはいえ『頼み』だなんて言うのは珍しいかもな。

……こいつらの前では。

「十八年前のお前の母親のポケベルへDメールを送ってくれ」

「なにゆえポケベル？」

「そもそも、どうして漆原るか本人じゃなく、漆原るかの母親なわけ」

俺の頼みにラボメン一同は疑問の声。

……ただ一人を除いて。

「それって、もしかしてお父さんから聞いたんですか？」

「……ああ」

「いや、ちよつと待って。二人だけで納得されても困るんだけど」

ラボメン……特に紅莉栖が騒ぐので、俺がこの結論に至った原因である未来から着た謎の数列について話す。

るかは既に知っていることだ。

「るかさん、あなたのお母さんはDメールが届いたのを覚えているのよね」

「あ、はい。よく聞かされてました」

「岡部の時と同じ……」

「じゃあまさか、もう過去が改変された後とか？」

俺たちの知らぬ間に過去が改変された。

このままではそうなる。

トランプの時と違い、今回、俺は改変される前を覚えていない。
だが

「その改変するDメールを今から送れば、何の矛盾も起きない」

そうすれば改変した事を俺は覚えていられる。

誰かが送ったという不確定要素をなくし、俺達を送ったという実にすり替えられる。

……事実とはかく、俺の観測上はな。

「でも岡部倫太郎、君が改変した後はそんな事言わなかったじゃん。今回に限って、どうして？」

「るかの話聞いた後に思いついたただけだ。それに、あの時の送信日はもうとっくに過ぎていた」

疑いのまなざしを向ける鈴羽を軽くスルーする。

あの時は、いつDメールを送ったが確定していた。

だが、今回は今年の八月という事しか分かっていない。

少なくとも俺の主観ではそうだ。

もし、るかの母親のポケベルには送信日が正確に記録されていたのだとしても……俺が知ったことではない。

「岡部の時は、おさらくDメールを送った後に改変された事に気づいた。でも、今回はDメールを送る前に改変された事に気づいた。こういう機会がまた来る保障はないわ」

だから検証はしてみるべきだと、そう紅莉栖は主張する、

『でも……』と鈴羽は反論したそうだったが、るかが『やります』と言ってしまったせいで口ごもってそのまま黙った。その目は俺を睨んでる。

依然俺への警戒は解かれていないようだ。

その後、るかが家にポケベルを取りに帰り、Dメール送信を試みたが、放電が起きず失敗。

次の日の昼をまた待ち、再度挑戦すると今度は放電が起きた。

ポケベルへ送る場合、数字に変換したメッセージも電話番号と同じ扱いになるので入力はキーボード。『*2*22929831831』とるかの言う通りの数列を送る。

そして また世界が歪んだ。

目眩が俺を襲い、感覚が宙に浮く。

そして意識が覚醒すると……そこには、紅莉栖、鈴羽、るか、橋田。ラボメン全員がいる。

「うーん、やっぱり何も変化なしか」

「Dメールでの事象のコントロールは難しいってことだね」

紅莉栖鈴羽がそんな話をしている。

……何も変わっていない？

だが、俺が今味わった感覚はこの前過去を改変した時と同じだった。

なのに、紅莉栖達は『失敗』だと、『何も変わらなかった』と言っ

ている。

事実その言葉通り何も変わっていない。

そい 思った。だが、その直後、それは間違いだということに気づいた。

「おい、るか。お前、ポケベルはどうした」

「え、ポケベル……ですか？」

「そんなの今時持つてるわけないじゃん常考」

話がかみ合っていない。

これは、やはりあの時と同じだった。

話の節々を聞いて推測した結果、るかはポケベルではなく普通にDメールを送ったそうだった。

内容は『ラボに来る前にマウンテンデューを買っ』だったらしい。ラボのどこを探してもマウンテンデューは無い。

過去を改変することはまた出来なかった……そう、ラボ内では決着がついていた。

ポケベルの件のことなど、すっぱりと記憶から抜け落ち、最初からそんな事実が無かったかのように。

……過去の改変は間違いなく行われている。

今送ったDメールはただの辻褃合わせではなく、新たに過去に影響を与えた。

そして、過去が変わり、今も変わり、タイターの言葉を借りるなら世界線が変わった。

過去は再構成されたのだ。

そして、それは俺だけが感知できている。

これで、るかの母親の元に未来からの着信があってもおかしい点はない。

俺の主観ではDメールは送られたのだから。

整合性は取れている。

電話レンジを奪われて、他の誰かに使われた、だなんて可能性は否定できる。

過去も、未来も、今も……全て俺が確定する。

8月7日 16時40分

Dメールで過去を改変する事が可能なのは確かだ。

だが、過去をどう変えるかはコントロールが難しい。

まだデータが不足しているためはつきりとは言えないが、トランプの改変については意図通りに過去が変わった。

しかし、ポケベルの改変については過去がどう変わったのかさえわかり得ない。

過去が変わったという事実を認識しただけ。

つまりDメールにはまだまだ不安要素が多い。

……だと言うのに。

「このラボ内での事は他言無用と言ったはずだが」

「う……それ言うなれば岡部だつてるか氏に話したじゃん」

俺の責めるような目に橋田が一歩おのきなながらも反論する。

……まあ、事実責めているのだが。

橋田は全く反省してないようだ。

「まあまあ、落ち着くニヤ」

「……誰の話をしていると思ってるんだ、フェイリス」

「ニヤニヤ、フェイリスだけ仲間外れなのは納得がいかないのニヤ」

ここはラボ内だ。

そしてここにラボメンでないフェイリスがいるのは、ご察しの通り橋田が原因だ。

簡単に纏めるとラボへ来る前にメイクインによつた橋田がすっかりフェイリスに電話レンジの話をしてしまったそうさ。

おまけにフェイリスは勘がいいので誤魔化せない。

おかげでるかに続きフェイリスまで巻き込むことになってしまった。

「次からは迂闊に電話レンジのことを漏らすな」

まったく……SERENにバレたらどうしてくれるつもりだ。

ただでさえ危ない橋を渡ってるというのに。

「フェイリスも話したりしないのニャン」

……まあ、フェイリスなら大丈夫だろ。

それにこいつを巻き込む事にメリットが無い訳でもないしな。

秋葉原の大地主で有権力者。利用価値はある。

「ねえ、前から気になってたんだけど、フェイリスさんってどうしていつも猫ミミをつけてるの？」

「それは……フェイリスが猫ミミメイドだからニヤ」

「いや、それはお仕事の最中だけの話じゃ……」

「ちょ、牧瀬氏。フェイリスさんは常にフェイリスたんのだお」

「そうだニヤ」

「あ……そうなんだ」

橋田とフェイリスのゴリ押しで紅莉栖は諦めた。

そう言えば俺もフェイリスが普通にしているのは見たことがないな。

いつもニャンニャンうるさい。

「クーニャンやルカニャン、スズニャンも今度お店に来てニャン。

目一杯おもてなしするニヤ」

「え……うん、今度行かせてもらおう」

返事までに間があったのは、即答できなかったからだろ。

なんせ猫ミミだらけのメイド喫茶。普通は迷う。俺だって普通ならいかない。

「メイド喫茶ってさ、どんななの？」

鈴羽の疑問。

こいつは時々無知な時がある。

特にこの時代特有の流行の類に関して。

「ニヤニヤ、スズニャンは知らないのかニヤ。ニヤら倫太郎が教えてあげるのニャン」

「……………なんだと？」

聞き間違いか、フェイリスは俺にメイド喫茶について語れと言っ

た気がした。

「倫太郎はうちの常連さんだし、うまく説明してくれるはずニヤ」

「え、岡部、あんたメイド喫茶に通ってるの？」

驚きながら若干ひいている紅莉栖。

「……ただ近いからだ。メイド喫茶だから行ってるのではない」

加えて言うならフェイリスがいるからぐらいだ。

「フーか、きつげはまゆ氏だろ。まゆ氏が岡部を連れて来なきゃ僕も知り合ってたし」

「え、どういうこと？」

余計な事をベラベラと……。

おかげで紅莉栖が食いついてしまったではないか。

「じゃあ、ここからはフェイリスが語るニヤン」

ウインクをかまし、左手で猫手の仕草、右手でエアーマイク。

「それはフェイリス達の前世の更に前世まで遡るニヤ」

「いや、遡らなくてもいいんだけど……」

「ん、そうかニヤ？ 魔王ルシフェルとかには興味ないのかニヤ」

「え、ええ。今回は無しの方向でお願いするわ」

そう紅莉栖がほっとしたように、話題を本筋へと戻させる。当のフェイリスは猫ミミが垂れてしょんぼりとしているようにも見える。

錯覚だろうが不思議だ。

「じゃあ、これは大体二年前の話ニヤ」

そうしてフェイリスは本当に語り出した。

今から二年前、その時はまだまゆりも外を出歩けた。

まあ、今も出来ないこともないのだが、安静にしておくのが最良なのでさせていない。

だが、まだ外を出歩けた二年前でさえ、まゆりはそうしなかった。家族も友人もいなかった当時のまゆりは、自分か外へ出ようとはしなかったのだ。

病弱で世間知らずの少女が一人で外に出ても何にもならない、迷惑をかけるだけだと。

口には決してしなかったが、そんな風に思っていたであろうことは簡単に察する事が出来た。

まゆりにとつて病室が家であり居場所。

外の世界を見ようとしなかった。

そして、いつも俺にすまなそうに『えへへ』と笑うのだ。

そんなある時、俺はダメもとで『どこか行きたい所はないか？』、そう尋ねてみた。

そしたらまゆりは『うーんとね』と言った後、『ここに言ってみたいかな』とテレビを指差した。

画面の向こうは秋葉原。

そこは不景気の現代に逆らうかのように活気が溢れていた。

そして、その秋葉原はこの病院からすぐそこ。行こうと思えばいつでも行けるし、俺なんかは毎日通り過ぎている。

だが、あそこは人が多く、妙な輩もいる。

危ないから止めておけ……そう言おうかとも思ったが、まゆりが自分で行きたいと言ったんだ。まゆりの意思を尊重する事にした。

もし、まゆりに危害を加える奴がいれば俺が排除すれば良いだけだ、と。

『うわー、人がいっぱいだあ』

秋葉原に着いたまゆりは相変わらずのおっとりとした口調。

電気街の側面を残しつつも、『萌』とやらが入り込んだこの秋葉原は、まゆりにとつて新鮮で楽しめたようだ。

まゆりが秋葉原に行きたいと言いだした理由は何となく分かる。

おそらく俺に気を使ったのだろう。

だが、理由がそれでも気分転換が出来たのであれば、それはそれで構わないか……そう一通り探索したところで昼食をとつて病院に戻ることにした。

店はどこがいいかと聞くと、『じゃあね、あそこがいいかな』とある店を指差した。

それは喫茶店だった。

だが、普通に喫茶店ではなくメイド喫茶。

そう……『メイクイーン+ニャンニャン』だ。

『お帰りニヤさいませ。ご主人様』

入店早々、猫ミミをつけたメイド風の店員が姿を現した。

妙な格好で、妙な喋り方で、妙な事を言う店員。

着たばかりだというのに、何が『お帰りニヤさいませ』なんだと、その時は思わず突っ込んでしまった。

もちろん口にはしなかったが。

『メイドさんだあ』

まゆりの方は楽しんでいるようなので余計な突っ込みは無粋だ。

席に案内され注文した後、まゆりがトイレに行くと席を離れ、俺は一人猫ミミメイドがニャンニャン言う奇妙な空間に残された。

店内を見回すと平日にも関わらず、こんな店なのにも関わらず客が割といた。

サラリーマンっぽいおっさんや、大学生ぐらいの若者……などなど。

働きも、学校にも行かずなにしてんだか。

……まあ、俺も学校には行っていないが。

『どうかしましたかニャン?』

ぼんやりとしていると店員の一人が声をかけてきた。

だが、煩わしかったので無視。

沈黙が店員との間に流れる。

『……何か用か』

それでも中々店員がその場を離れなかったので、いかにも『鬱陶しい』という感情を顔に出して追い払おうとした。俺に構っている暇があるなら仕事をしろと言っただ。

念には念をで威圧する為にも睨みを聞かせようと目をみる。
すると

『ちよ、フェイリスさんの親切に対して、なんたる言い草!』

後ろの席に座っていた、全く関係の無い客が騒ぎ出した。

太った若者っぽい男。

あまり若者とは形容したくはなかったので『ぽい』にしておいた。そして無視しておいた。

あまり関わり合いになりたくないタイプだ。

こいつが世間でいう『オタク』といやつなのだろうと直感的に悟る。

無視してさらに騒がれたら面倒なので睨みつけて

『あれえ、岡部君、もしかしてお友達？』

男へと振り返る途中、まゆりが戻ってきた。

『ぐぬぬ、フェイリスさんに悪態をつくだけでなくリア充とは……許さない、絶対にだ！』

『……おい、店員。こいつは何を言ってるんだ？』

俺には男が何に対し怒り、何を言ってる怒っているのかがさっぱりだった。

『けんかはよくないよ、岡部君。それと……あなたも』

『え、僕？』

まゆりが俺と男に諭すように。

『みんなが仲良くできたら、それは幸せなことだと思わないかな？』
まゆりは人と話すのが苦手なはずだった。

それなのに、初対面の相手に、しかもこんな男に、自分の意見を述べた。

俺にはそれが、とてもすごい事のように思えた。

『そうだニヤ、みんな仲良しニヤン』

……こうして俺は、猫ミミメイドのフェイリスとその追っかけオタクの橋田と知り合いになってしまったわけだ。

しかも、その後橋田が同じ年で学校にも通っていることをすると、まゆりが

『やっぱり学校はいった方がいいんじゃないかな。まゆりなら大丈夫だから……』

と申し訳なさそうに言うものだから、仕方なく高卒認定試験を受

け、そのまま大学まで通うことになってしまった。まあ、まゆりに余計な心配をかけるのも嫌なので一応卒業はするつもり……だった。「それから、まゆしいと倫太郎は度々お店に来てくれたのニヤ」……おかげで、あのニヤンニヤン空間を完全にスルー出来るまでになったがな。

その後もフェイリス達はラボでわいわいと騒いでいた。

そして、

「今日から、ラボメンナンバー007のフェイリスニヤ、よろしくニヤン」

フェイリスがラボメンに入る事が正式決定した。

「はあ……」

フェイリスが引つ掻き回したせいで、今日はDメールの実験は行えず終いになってしまった。

時間が無いと言っているというのに……いつからラボの空気はこんなにもゆるくなっただんだ。

「おお、岡部。今日は偉く賑やかじゃねえか」

ラボの外へ出、一服しているところにブラウン管工房の店長が現れる。

「……それがなにか？」

「いいや、お前の性格からして、人と関わるのが嫌いなタイプだと思っただけだからな。ちよつと意外だったただけだ」

「ふん……あなたの娘ほどじゃない」

「え……わたし？」

天王寺の背中に隠れていた、天王寺の娘……絢がおそるおそる顔

を出す。

俺はこの娘に怖がられているので、この反応は仕方がないだろう。いや、そもそも俺を怖がらない奴の方が少数派だ。

上で騒いでいるラボメン達のように。

「な、うちの娘のどこが意外だっただ」

「……それぐらい自分で考えたらどうだ」

どう見たって似てないだろ。

見た目も性格も。

「まあ、いい。それよりも、あんまり建物揺らすんじゃない。上で一体何やってやがる」

「……あなたには関係ないことだ」

「家賃あげるぞ」

「……どうぞお好きに」

そう言っただけ、俺はラボへと戻ろうとする。

すると、二階の窓からラボメン達の声が聞こえてくる。

しかも、言葉までしっかり。

……ぼろいとは思っていたが、この建物、防音対策が皆無だ。

これでは丸聞こえ。

外部に電話レンジの事が漏れていないかと気が気でない。

そして、ラボ内から聞こえてくる楽しげな声に、思わず溜め息。

天王寺の言う通り、本来なら俺がこんな空間にいるのは珍しい事であり、ありえない事だ。

ちよと扉を開ければ、そこには団らんをしているラボメン達。

微笑ましくも見えるこの光景。

……だが俺は知っている。

この空間はしょせん偽りであり、あっけなく崩れ去ってしまうのだと。

そして、壊すのは他の誰でもない……俺自身なのだ。

8月11日 18時40分

10年前のあの日、何も出来なかった自分が嫌いだ。
拳げ句全てを投げ出て逃げ出した自分が何よりも嫌いだ。
そんな風に今も生きている自分が殺したいくらい嫌いだ。

「阿万音鈴羽という人間は戸籍上存在しないか……」

鈴羽について調査を頼んだ結果、阿万音鈴羽という人間は存在しない事が判明した。

……少なくとも、この時代では。

鈴羽は確か18歳。

そして、ジョン・タイターがやって来たのは26年後の2036年。

もし鈴羽がタイターだとするならば、まだ生まれていなくて当然だ。

まあ、ただ偽名を名乗っているだけかもしれないがな。

「とりあえず今は、例の人工衛星を調査する」

「……了解」

タイターや鈴羽と同時に現れた人工衛星らしきもの。

もう10日が経過していると言うに、新たに見つかった事実はなく、半ば放置されている状態だ。

野次馬ももう飽きてきたのか、夕方の今にはもうラジ館の周辺には人はほとんどいない。

おかげで、大した苦も無く入り込めた。

エレベーターもエスカレーターも動いていなかったため、階段を使っ

て。

8階に出ると、ラジ館の壁にめり込むようにして、不安定な形で突き刺さっている人工衛星が目に見え込んで来る。

人工衛星と呼びはするが、誰も認めてはいない謎の物体。

あの日、大気圏に突入した廃棄人工衛星など存在しなかった。

加えて、通常人工衛星は廃棄されるとき、大気圏に急角度で突入させて燃え尽きさせるモノで、こんな完全な形で落ちてくることは有り得ない。

それに、不思議なことに実際に人工衛星が墜落するのを目撃した者が一人もいない。

突然、何の前触れもなくコレはラジ館をえぐって現れた。

その正体不明の物体に俺は近づく。

今は、おそらく警察の手によるものだろうワイヤーが張られており、落下しないよう固定されている

銀色の樽型駆体。シリンドージャッキ。張り出した太陽電池パネル。スラスタ。アンテナ。

見れば見るほど人工衛星ではない。

「この人工衛星について本部からは何か連絡はあったか」
俺は後ろについて来ている部下に尋ねる。

「……これについては、何も」

「FBからもか」

「……うん」

弱々しい声。

「どうやら本部からもFBからも指示はないようだ。」

俺は信用されていないからな。

俺には内密で事を進めている可能性は多いにある。
疑ってかからねば、やっていけない。

……その点、こいつは俺に隠し事しない。

依存に近い状態であり、利用するには都合のいい存在。

コードネームはM4。本名……桐生萌郁。

四年来の部下でありパートナー役だ。

「岡部君……M3がタイムマシンを造っている可能性があるって」
やはり弱々しい声。

だが、口にした言葉はそれに反して重い。

タイムマシン……それはすなわち電話レンジの事。

それがSERNにバレた。

M4が言っているのはつまりそう言う事だ。

そして、M4の言葉からは他にも分かる事がある。

俺達が所属するラウンダーという組織はSERNの駒だ。

特に俺やM4は末端。

詳細など知らされぬまま任務を命じられる。

それは機密保持としては当然の選択。

だが……今回は違う。

本部はM4に『タイムマシン』と言った。

おそらく今までの任務の中にもタイムマシンに関わっていたものは多くあっただろう。

それでも俺達末端は何も知らずにただ上に動かされてきた。

俺だって、SERNがタイムトラベルを研究していたなんて、ハッキングして初めて知った。

それほどの機密。

……だと言うのに、今回上はM4にその機密を漏らした。

それが示すのは信頼ではなく 処分。

元々ラウンダーはIBN5100を探す使い捨ての駒。

その任務を遂行した者は用済みとなり処分される。

末端が機密を知る必要は無い。

知った者は例外なく消される。

つまり そういう事だ。

SERNがタイムトラベルを研究している事は機密であり外へ漏れてはいけない事実。

それを知ったM4は当然処分の対象となる。

簡単に言えば用済み。

だが、タイムマシンについて命令されたのも処分の対象なのも俺ではなくM4のみだ。

俺には何も知らされていない。

その事から俺がどういう扱いなのかを想像するのは容易。

俺は 駒としても終わってるといふ事だ。

そりゃ、ただでさえ信用されていない俺がSERNを出し抜きタイムマシンを造っただなんてバレたら処分どころじゃ済まないだろう。

「M4、その事に関して何か指示はあったか」

「……調査」

「そうか」

調査ということは、まだ詳しい事は分かっていない事になる。

知っている情報をわざわざ調べる必要は無い。ならば、まだ俺が出し抜ける余地はある。

……しかし、電話レンジの事はどこから漏れた？

M4……はないだろう。そもそも知らないはずだ。

ならばFBか、どこからか噂を聞き第三者か。

それとも 未来からの情報か。

タイターがネットに書き込んでいるのが事実なら、SERNは2034年にタイムマシンを完成させる。

ならばそれ以降の時代からDメールが送られている可能性もある。

未来のSERN。

タイター曰く、今から26年後には世界を支配しているとか。

そりゃタイムマシンがあれば、過去も未来も全てが手に入る。

支配するのも難しくはないだろう。

もしかしたら今も、SERNの監視下にあるのかも知れない。

だからこそ電話レンジがSERNに知られた。「……だが、全てを知っているわけでもなさそうだな」

その一つがこの人工衛星。
もう一つがジョン・タイター。

この二つは、ほぼ同時に現れた得体の知れないモノ。
二つに繋がりとがあると、結びつけて考えるのは、疑って冷静に分析したならばたどり着く思考。

そうして俺は、この謎の物体がタイターが使用したタイムマシンだと仮定した。

だと言うのに、SERNにはノータッチ。

あえて放っているのかもしれないが、その油断がいつか災いと呼ぶ事になる……それを俺が教えてやる。

さて、ジョン・タイターや人工衛星……それらの正体についての仮説が正しいかを確認する手っ取り早いのは『鈴羽に問い詰める』だ。

鈴羽が素直に話してくれば、この仮説が間違っているのか、正しいのかがすぐにでも分かる。

だが、この手段にはいくつかデメリット、危険性がある。

まず一番の問題、鈴羽が素直に話す可能性が極めて低い事。

あいつが本当にタイターだとしたら、俺に秘密を話すぐらいなら自ら命を絶ちかねない。

そして第二に、俺の正体がバレてしまう……だが、その心配はおそらく無用。

最初からバレてる。

あいつはその上で俺に近づいてきた。

鈴羽がタイターでSERNを憎んでいるのなら、SERNの駒である俺を睨むのも当然。

どちらにしる聞くだけ無駄だ。

だが、だからと言って諦める訳ではない。

何も鈴羽がタイターかどうかを確かめるのに、馬鹿正直に『お前はタイターか』とか『あの人工衛星はタイムマシンか』とか直球で聞く必要は無いのだ。

そんな事をしなくても確かめる方法はある。

簡単な話だ。

「鈴羽……お前は2000年問題をどう思う」
記憶を尋ねればいい。

「……2000年問題？」

「ああ」

「いきなり何なのさ、それって聞いて意味あるの？」

鈴羽はあからさまに嫌そうに、何か魂胆があるに違いないと警戒しながら応答する。

「ただの雑談だ。それともなんだ、お前は2000年問題を知らないとも言つつもりか」

そんな鈴羽を煽るように挑発。

「な……知ってるよ、それぐらい。2000年に起きた事故でしょ。世界中のコンピューターが故障して、死者も沢山出たって」

「ああ、その通りだ。だが、ずいぶんと人事だな。その程度なら教科書にも載ってるぞ。いや、むしろ教科書そのままと言ってもいい」
例えば、第二次世界対戦やバブル崩壊。

それらは俺とて知識として知ってはいる。

だが、実際に経験した者とは認識が大いに違う。
経験者にとって、それは記憶であり、非経験者にとって、それはただの知識に過ぎないのだ。

鈴羽にとつての2000年問題も同じ。

あの大惨事を経験して『事故』で済ませられるはずがない。
鈴羽は以前、自分が住んでいた場所は地獄だったと言った。
その地獄がどんなものかは俺は知らない。

おそらく言葉で語られとも同情はできても共感はできないだろう。
記憶とはそういうものだ。

誰にも理解はされない。

鈴羽はここが天国のようだと行った。

だがな、俺は 天国で生きてきたつもりは毛頭無い。微塵も無い。
い。

8月12日 14時00分

2000年問題。

今から10年前に起きた事故で片付けるには生易しい大惨事。

2000年を迎えた瞬間、世界各地のコンピューターが誤動作をし暴走した。

かつて、コンピューター上で『西暦』をデータとして扱う際、記憶容量を節約するために、完全な4けたではなく、下2けただけが使われてきた。

ところが、この記述だと、1999年から2000年に移行する瞬間、『99』は『00』になる。このとき、コンピューターの中では、西暦2000年の00を1900と混同するなど、様々な誤動作が生じると2000年になる前から予想されていて騒ぎとなった。

西暦2000年の1月1日には、コンピューターの誤動作による事故が、世界中で同時に発生するのだ。それらは連鎖的に被害を増大させ、未曾有の大災害へと発展すると見られている

日本やアメリカなどの先進諸国では、銀行業務はコンピューターに依存する割合が極めて大きく、2000年問題では、支払期日や取引データの管理・確認、金利計算、経理処理が適切に実行できず、預金・貸出や決済などの通常業務に支障が生じ、その挙句業務そのものが停止してしまった。この影響で多くの銀行が倒産し、更には決済や取引の相互依存関係を通じて、混乱が他の金融機関に波及する事態に発展し経済ごと混乱に陥った。

会社も麻痺し、経営危機に陥り、これまた倒産が相次いだ。

電気や水道、ガスなどの供給システム、そして電話などの通信システムにも影響を受け、ライフラインが経たれた。電気に至っては停電だけではなく、電圧が高まって家電製品が爆発したケースも多かったらしい。あくまで『らしい』というのは、こんな些細な事を

調査する余裕なんて当時には無かったからだ。

工場等では、コンピューターが異常を起こし、動かなくなってしまうた為事故が起こり、爆発事故などが多発。

コンピューターの塊である飛行機に関しては、安全を考慮して運休をしていた会社が多かったが、それでも運行を決した飛行機が各地で墜落。

……ここまでなら、悲惨な『事故』で済んだかもしれない。

これだけでも多くの死者をだしたというに、悲劇はまだ続く。
軍用兵器。

アメリカ軍は、世界中で最もコンピューター化されている軍隊であり、兵器の中にも何百万個ものマイコンチップが埋め込まれていた。2000年を迎える前は、これらが誤動作を起こせば大災害となることは言うまでもないとされていた。

そして事実そうだった。

核ミサイルは地下格納庫のコンピューターには、安全装置の保守機能に全面的な故障が起こり、あるミサイルは完全に動かなくなり、またあるミサイルは点火してして大地を抉り火の海を生んだ。

それにより、戦争が起こった地域もあり、今でも続いている国もある。

そんな大惨事が起きた2000年の1月1日、その日俺は……その惨事を知らなかった。

前世紀最後の師走に突然倒れ、そのまま一カ月ほど俺は四十九度近い熱を出し寝込んでいた。

激しい目眩で視界が歪み、身体が世界から切り離されたかのような浮いた錯覚。

まるで、Dメールによる世界線変動時のような……いや、それ以上の衝撃により意識失い、再び目を覚ました時は 滅茶苦茶だった。

寝ていた家は半壊し、辺りは燃えていた。

何が起きたのかもさっぱりな俺は気がついた時には、家も 両

親も失っていた。

俺の見ていた世界が変わった瞬間だった。

……その後、2000年問題を解決するワクチンプログラムが出回り、事態はとりあえず沈静化した。

不幸中の幸いなのか、日本では戦争は起きなかったため、仮初の平和は訪れた。

……もつとも、残され爪痕の悲惨さが、平和なんてものを感じさせなくしていたが。

脳裏にこびりつく赤。

この2000年問題で多くの人が死んだ。

俺の両親も、まゆりの両親も。

生まれて初めて目の当たりにした『死』だった。

……そして、復興が進められる中、俺は地方にいる大して親しくもない親戚の家に行くことになり、まゆりは祖母の家に留まった。

こうして俺はまゆりに別れの挨拶もせず、東京を去った。

……逃げた。

実際に2000年問題を引き起こしたのはコンピューターの不具合ではなく、ウイルスの仕業ではないかと一部で囁かれている。

俺もその支持者だ。

SERNの科学者がワクチンプログラムを作っただなんて話は特に向こうから怪しめと言っているようなものだ。

全ての研究は、Zプログラムの隠れ蓑に過ぎないとたまっているSERNが、何故ワクチンプログラムを作るなんてことになるんだと言う。

「……M3、これ」

俺が2000年問題について思考していると、M4が食料を差し出してきた。

それを見て、そう言えば今日は朝から何も食べていなかったなと食料を受け取る。

ケバブとマウンテンデュー。

どちらも俺が好んで口してきたモノだ。

M4は俺に手渡すと、買ってきた自分の分のケバブを頬張る。相変わらずの無表情。

俺はこいつが笑ったところも泣いたところも見ることが無い。

いつも俺の側にいて、俺の指示に従う影の様な存在。

「……………なに？」

観察するように見ていると、何か用があるのかと口をケバブから話し確認してくる。

『なんでもない』と短く素っ気なく返すと、しばらく俺の目を見つめた後、ケバブへと口を戻した。

M4……………桐生萌郁はこのように口下手で暗い性格だ。

とても社会に馴染めるとは思えない。現にこうして俺と共に社会の裏側で生きている。

だがもし、俺に出会わなければ……………萌郁はどんな生き方をしていたのだろう、と戯れにつまらない事を考えてみたりする。

この暗い性格のまま表の社会でなんとか生きていたのか、それとも諦めてあのまま死んでいたのか、俺が関わらなくともやはり裏社会に身を墮としていたのか。

……………まあ、どうでもいいか。

思考を止め、ケバブをかじり、マウンテンデューを飲む。

萌郁は……………M4はしょせん俺にとって駒の一つに過ぎない。

俺がSERENやFBの駒であるように。

駒に感情移入をする必要はない。

ただ効率よく、有効的に使えれば、それで十分。

それに、そもそもM4は四年前に偶然拾った駒。本来なら切り捨

てるのも容易なはずなのだ。

四年……俺がラウンダーとなって半年が経過した頃。

道で偶然、ふらふらと弱々しげに歩く女性を見つけた。

その目は絶望して生きる気力を失った者のそれだった。

2000年問題以降、よく見る目。

社会問題の一つともなったが、あの2000年問題の後、あちこちで自殺が多発した。

せつかく生き残った命を……と言う者もいるかもしれないが、自殺した彼らにとって生きる事に意味は無かったのだらうと俺は思う。大切な人を失い、先も真つ暗で、希望も何も無くて、生きている事が辛くて……そして死を選んだのだらう。

その時の萌郁も、そんな者達と同じ死んだ目をしていて放っておけばいい。

死にたい者には死なせておけばいい。

俺が干渉するべき事じゃない。

すると唐突に、萌郁は右手に握っていた瓶を開けた。

睡眠薬の入った瓶。どう見ても普通に使うつもりだとは思えない。

そもそもこんな道端で取り出すものじゃない。

萌郁は手に大量の睡眠薬を取り出し、水も無く呑み込もうと口にやった。

それを俺は 止めていた。

『なにを……するの』

『死んでどうする？』

ほんの気まぐれだ。

ただ何となく声をかけ、何となく睡眠薬を含んだ手の腕を掴んだだけだ。

『……あなたには関係ない』

『ああ、ないな。だが、どうせ死ぬのなら、その命を有効的に使え』
萌郁は黙る。俺の話もろくに聞いていなかった。

『ラウンダーになれ、そして俺の為に生きる』

この言葉もほんの気まぐれ。

無意味に無駄に無くなる命を、気まぐれで拾っただけ。

どうせ死ぬつもりだったのなら、巻き込んで苦にはならない。

そう思っただけは萌郁をこちら側に引きずり込んだ。

だが、今思えば……寂しかったのかもしれない。

独りで闇の中を生きるのが。

誰も信じず、誰にも頼らず、人を裏切り騙す……そんな生き方が。

まあ、今となっては関係の無いこと。

俺はもうガキではない。

寂しいだなんて感情は持ち合わせていない。

とっくに捨てた。

利用できるもの利用しきるだけ。

「さて、とつとといくぞ。任務だ」

俺はケバブを食い終え、マウンテンデューを飲み干すと、それら

の跡をゴミ箱に投げ捨てる。

萌郁の目は見ない。

そんなものを気にしている余裕は俺には無い。

空が雲で覆われ、不穏。

「東京、この秋葉原周辺にネズミが入り込んだらしい。それを俺達

は駆除する」

ついさっきFBから送られてきた新たな指令のメール。

なんでも何者かが東京にやって来て、色々とかぎ回ってるとか。

しかも、そいつはSERENの裏、つまりラウンダーを追っている

らしい。

通常ラウンダーはダイレクトメールでメンバーを募集する。俺の

萌郁に対する勧誘は例外みたいなものだ。

そして、その方法は機密性の保持の観点からすると割と穴が多い。

だから、ラウンダーの存在自体は裏では噂として知ってる者もいる。

もつとも、噂でなく確信した時点で処分されるがな。

だから噂の範囲内を出る事は無い。

全て、ラウンダーが……SERENが隠蔽する。
国家機密でもあり、トップシークレット。
知ったものは消されるだけ。

内通者はあちこちに散らばっているんだ、逃げきれはしない。

「写真のこの男だ」

指示メールに添付されていた画像を見せる。

欧州系の白人。

それが二人。

FBの見立てではユーロポールの捜査官だとか。

わざわざ遠くからご苦労な事だ。

俺はそこら辺にある店のガラスをちらりと見る。光が反射して鏡の様に俺を背後の景色ごと移す。

そこには、二人の白人。携帯に映る男達だ。

人気の無い高架下。

周囲には人の気配は無い。けれど背後だけには気配が残っている。
要するに尾行。

俺がラウンダーだとバレているって訳だ。

まあ、裏では割りと派手に動いていたしな。

そろそろ俺も切り捨てられてもおかしくらいに。

危ない橋ばかり渡ってきた代償。

本格的に時間が無い。

俺はおもむろに携帯を取り出し立ち止まる。

右手は携帯、左手はだらんとぶら下がる。

ガタンゴトンと電車が上を通過する音が聞こえ、地面が僅かに揺れているのが分かる。

「リントロウオカベ……いや、M3。大人しくしろ」

そして後頭部に感じる冷たい鉄の感触。

外国人だとは思えない流暢な日本語。

しかし、ちらりと見える肌の色は綺麗な白だ。

「こちらに従えば悪い事は」

男がそう言いかけて止まる。

息を詰まらせ、動きも止まる。

その一瞬生まれた隙を突き、俺は携帯を放し右手でその白い手に持つ銃を払い落とす。

左手には 血塗れたナイフ。

そのナイフを持って俺はふらつきながら後ろへ下がる男にトドメを……ナイフを心臓に一刺し。

今まで何度も味わった感覚。

もう 何も感じない程に。

倒れる男を無感情で、温度の籠ってない目で見下ろす。

これも何度も見てきた光景だ。

ただ一つだけ違うところがあるとすれば 俺の視界に見覚えの

ある栗色の髪が映ったことぐらい。

……仮初の平和が終わった瞬間だった。

8月12日 16時20分

過去は変えられる。

未来は変えられる。

運命なんて否定してみせる。

その為なら俺はなんだってする。

何を犠牲にしようとも成し遂げる。

例えその結果、俺が地獄に堕ちたとしても 後悔なんてしてられない。
後悔なんてしてら

する資格も権利も無い。

つけてきた二人の男は始末した。

一人は俺が、もう一人はM4が。

死体の始末はFBにでも任せればどうにでもなるだろう。

俺は返り血を浴びた上着を脱ぎ、高架下を離れる。

「M3、FBからは待機命令が……」

M4はそう言うが、無視して足を進ませる。

俺にはもう時間が無い。

立ち止まってる余裕も無い。

そうして向かうのは病院。まゆりの入院する病室だ。

M4は病院外で待機させ、俺一人病室扉を開く。

「あ、岡部君だあ。よこそいらっしやいましたー」

そこには、こんな俺を暖かく微笑みながら出迎えてくれるまゆり。

「岡部さん……今日はもう来ないかと思いましたが。椅子をどうぞ開いている椅子を用意するるか。」

俺はその椅子に腰を落とすし、まゆりと向かい合う。

「あ、ボク、飲み物かって来ますね。まゆりちゃんは何がいい？」
気を利かせてか、るかはそう言っただけ上がる。

「うーん、じゃあね、オレンジジュース」

「岡部さんはいつものマウンテンデューですね」

俺が『ああ』と軽く頷くと、るかは病室を出ていった。
残されたのは俺とまゆり。

二人つきりだ。

「……この病室、写真が沢山飾ってあるよな」

世間話でもしようかとも思ったが、とっしには話題が出てこず、
今更な話を振る。

「うん、いい思い出がいっぱいあるから。子供の頃のもあるよ。ほ
らほら、これなんて小さい頃の岡部君も映ってる」

昔一度だけ行った今はもう潰れて無い遊園地での写真。

そこには、特に何も考えずに呑気に毎日を生きていた当時の俺が
いた。

照れくさそうにあえて顔をカメラか目をらそらしてそっぽを向い
ている。

……まだ平和だった2000年問題が起きる前の夏休み。

俺がカメラどころか現実から目をそらして逃げ出す五ヶ月前。

俺は懐かしむように、そして同時に自分を責めるように病室に飾
られた写真に目を通していく。

良い思い出がいっぱい……そう、まゆりは言ったが、写真に写る
まゆりは子供の時が大きくなった最近。

この遊園地の次写真は七年後。

俺が逃げ出し、再び戻ってくるまでの空白の間……まゆりは良い
思い出なんてなく独りで生きてきたのだ。

両親を同時に失い、その数ヶ月後には唯一頼りに出来た祖母も亡
くなった。

2000年問題により殺伐とした世界で、まゆりは独りで、友達

も頼れる者もなく生きていた。

無理も無茶もして。

「……岡部君と再開したのは三年位前だったよね」

まゆりが唐突に話題を振ってきた。

何の脈絡も無い過去話。

「最初はちよつと怖かったけど、まゆりのことを色々気にかけてくれて、髪留めもプレゼントしてくれて……」

まゆりは髪を飾っている花の髪留めにそつと触れる。

その髪は、もうまゆりのモノではなく、医療用のウィッグ。

治療の副作用。

「お友達も沢山出来たのも岡部くんのおかげだし。るかちゃん、フエリスちゃん、クリスちゃん、スズさん、あと橋田くん。みんなここに遊びに来てくれて、毎日が楽しかったのです」

『えへへ』と笑う。

そりやそうだ、ラボは元々まゆりの為に作ったものなのだから。

……元々は。

ホント、物事は上手く回らないものだ。

『それにね』

そうまゆりは少し表情を落とす。

「入院費までだしてくれて、何から何まで……ホント、どれだけ感謝しても足りないのです」

ニコリと、そして申し訳なさそうに微笑む。

今までありがとう……そう別れの挨拶でもするかの様に。

感謝……まゆりはそう言ってくれるが、俺にはそんな資格はない。

……過去に逃げ出し目をそらした俺には。

俺が逃げなければ、俺が現実と向き合っていれば……こんな事には成らなかつたかもしれない。

まゆりが 死ぬなんて事には。

「あのね、岡部くん。まゆりね、クリスマスまでは生きていられるかもって、希望が出てきたんだあ」

持ってクリスマス。四カ月も無い。

「そしたらクリスマスにはサンタさんに、もう少し時間をくださいってお願いしようかなって」

それなのにまゆりは無邪気に笑う。

俺を心配させまいと、気を遣わせまいと……暖かく微笑む。

そして、俺はその笑顔から 目をそらした。

俺にはそんな資格はない。

とうの昔に闇に身を墮とした俺にとって、そのまゆりの微笑みは太陽のようで、眩しすぎた。

着信音。

マナーモードの携帯が震えるのを感じた。

それは小さな音だが、静かな病院では場違いなほどに響く。

俺はまゆりに『ちよつと席をはずす』と言って病室から廊下へ。

携帯はまだ震え、まだ響く。

そのまま歩き屋上へ出ると、ようやく携帯を開き、電話の相手が誰かと分かると目が冷たくなる。

「……なんの用だ」

『へ、なんの用だとは随分じゃねえか』

「戯れはいらない。とつとと用件を言え」

電話の向こうはFB、俺の上司で、俺をラウンダーへと招いた張本人。

『M3……テメエ、ハマしやがったな』

「……ハマだど」

『ユールポールの捜査官の件、目撃者がいたそうだ。通報があったらしい』

……目撃者。

俺はその言葉に驚きはせず、やはりなと心の中で呟く。

『警視庁への根回しが現場レベルまで徹底されるには今日一杯までかかる。次の命令まで待機してろ』

そう言つとF Bは電話を切つた。

「岡部さん……病室にいないと思つたら屋上にいたんですね」

携帯をポケットにしまつと今度は後ろの方から声。

手にはマウンテンデュー。

まゆりと話をしている間は中々帰つてこず、その後病室を出てつてしまつたせいか、わざわざるかはそれを持つてきた。

……中々戻つてこなかつたのは気を利かせてたからだろうに。

「あの……ついさっき、紅莉栖さんから電話があつて」

るかは言いづらそうに、声を震わせながら。

「……嘘ですよ。岡部さんそんな事する人じゃないですよ」

俺は無言。

るかの台詞には、その何が嘘なのかの重要な部分が抜け落ちてい

る。口にはしたくなかつた、いや出来なかつたのだろう。

本来ならこんな問いもしたくなかつただろう……けれど確かめたかつた。嘘だと否定して欲しかつた。

「……お願いだから、嘘つて言つてください！ お願いですから……」

るかは懇願するように叫ぶ、そして涙を浮かべる。

今ここで嘘だと言えば、それがるかの望んでいる言葉なのだ、おそらく信じるだろう。

俺が 人を殺す訳がないと。

紅莉栖は勘違いをしているだけなのだ。

だが

「どうして……何も言つてくれないんですか……」

そんな事は無意味だ。

仲良しごっこをするつもりはない。むしろ逆に仲良しごっこを潰す側。

紅莉栖はあの高架下で俺が人を殺すのを見てしまった。そして通報した。

所詮俺の紅莉栖への信頼度などそんなもの。

あいつがラボに入ったのは、電話レンジに対するただの好奇心。俺を認めてなどいなかった。

根回しのおかげで事件はもみ消されるだろうが、今頃ラボでは俺の正体がバレている頃。

鈴羽は端っから俺を適していたし、正体も知っていた。

紅莉栖が俺を疑った今が、俺がSERENの駒……裏切り者だと真実を話す絶好の機会。

これで俺はあのラボには戻れなくなっただって事だ。

ふと視線を泳がせると、屋上の入口付近にM4の姿があった。

奴にもFBから連絡がきたのだろう。

待機してると。

待機とはじっとしてるという意味ではなく、どこかに隠れてると言う事。

よつするにM4は早くしろとせかしに来たわけだ。

俺はそちらへ足を向ける。

そして涙を流して俯くるかの横を通り過ぎ

「……まゆりを頼む」

そうとだけ伝えて屋上から姿を消す。

「岡部さ」

るかの声も制止も聞こえない。

……俺はもう引き返す事は出来ない。

背後は底無しの谷、正面は光の無い暗闇。

出口など無い。

8月13日 13時55分

「……FBから新しい任務」

待機すること約一日。

潜伏場所はM4の借りアパート。

「……未来ガジョット研究所のタイムマシンを奪えって」

「……そうか」

思っていたより早かったが想定内の任務だ。いつかは来ると思っていた。

俺達がしている事がバレていると分かった時点だな。

「バックアップに他のラウンダーも来る。抵抗すれば殺しても構わない。ただ……開発者である牧瀬紅莉栖と橋田至は捕らえてSERENに連行しろと」

監禁でもしてタイムマシンの研究をさせるって事か。

「……それで全部か」

「……え？」

俺がそう問うとM4は惚けた声を出す。

「FBの指示はそれが全てかと聞いているんだ。例えば……捕らえるのは俺を含めた三人だ、とかな」

M4は『どうして』とでも言いたそうな顔をしてこちらをじっとみている。

どうしても何も簡単な思考だ。

俺は元々危険分子として扱われていたんだ。目的の為なら手段を選ばず、平気で裏切る男として。

そんな厄介者が、SERENの裏を探ったり、出し抜く様にタイムマシンを開発していれば、鬱陶しく消したくなるだろう。

裏切る前に切り捨てるってな。

そんな時に俺がミスをやらかし、ラウンダーとしてはもう役立たずだと向こうに言い分を与えたら、こうなる事は必然。

SERNに捕らえられ、今度こそ俺は完全に自由を失う。

「M4、作戦の詳細を教えろ」

「え……それは」

「言え」

口ごもるM4を威圧する。

「……実行は三時間後の五時。わたしはタイムマシンの確保、バックアップのブラボーチームが……M3を」

M4はそれだけを言うつと再び黙り俯く。

……まあ、これで十分か。

作戦は大体分かった。

俺はM4と共にラボを襲いタイムマシンを強奪、その後バックアップが俺を捕獲。

裏切り者は裏切られる……そんな末路。

「どこ……行くの」

俺は必要な物を荷物として持つ。
要するに荷造り。

「作戦はもうすぐ」

止めるM4。

それを黙らす俺。

部屋に隠しておいた銃を手に持ち、そのままM4へ。

「俺がその作戦に従うと思うのか」

……従う訳あるまい。

俺に作戦を漏らした時点で失敗なのだ。

「でも、逆らえば命が」

「どちらにしろ俺は捕らえるんだろ。そんな奴隷みたいな扱いは御免だ」

ホント……何もかも中途半端だ。

俺に反逆をさせたくなかったのなら、作戦の実態を話さなければ良かったのだ。

それを漏らし、そして俺に銃口を向けられる。

何がしたいんだ。

それにM4は、銃を突きつけられているのに怯えた風も無く俺を見てくる。

元々無表情な奴だったが、この状況だぞ。

殺されるとは思わないのか。

「……わたしはあなたに救われた。生きる意味を貰った」

……いきなり何を言ってるんだ、こいつは。

「わたしはM4……岡部くんのためなら死んでも構わない。でもあなたには死んで欲しくない。……生きてて欲しい」

「……M4、お前は今逆らえば死ぬと言ったな。SERENがタイムトラベルに参与している事はトップシークレット。それを末端風情が知っていていいはずがない。このまま何もしなければ、おそらく俺達を捕らえた後、作戦に関わったラウンダーは全員始末される。お前も、バックアップも、FBも。俺達ラウンダーは使い捨てだ。逆らえば死ぬ？逆らわなくても死ぬんだよ」

例え俺は殺されなくても、監禁され死んだも同然となる。

そんなものは生きているとは言わない。

そんな状態では目的を果たせない。

「M4、逆らうなと言っが、お前はそのままこれが運命だと黙って受け止めるつもりなのか。……俺は断じて認めない。この世に定まった未来など無い。運命など最初から無い。俺は抗ってみせる。その為なら なんだってしてやる」

M4に向けた銃の引き金にかけた指に力を込める。

「M4、ここで選ばせてやる。俺に従うのか 従わないのか」

秋葉原から電車に乗ってすぐそこにある住宅街の一角にひっそりと建つ平屋の古くさい家。

「こんな所にわざわざ来るとはな。……何か用か」

呼び鈴も鳴らさず戸を開けると、そこにいたのは天王寺。

ラボ下のブラウン管工房の店長。

用事があるから今から出かける、そんな感じだ。

「……用など、俺がここに来た時点でとっくに理解しているだろ」

俺は右手に持つ銃を天王寺に。

天王寺はそれを怯えもせず余裕顔で見逃す。

最初から警戒心が全く感じられない。

家を教えられた俺がいきなり押しかけてきたというのに。

……今から罫に嵌めるはずの部下が自ら出向いてきたというのに。

「今日でお前の下で働くのは終わりだ。……FB」

周囲に人はいない。

天王寺の娘も家を空けている。

念には念をで消音機も付けている。

「俺に……SERNに逆らう気か？」

「……ああ」

SERNに逆らえば命は無い。

それは天王寺……FBも知っている。

そしてFBはラウンダーが使い捨ての駒だという事も知っている。

良い様に使われ、いつかは切り捨てられる。

……俺の様な。

だが FBは逆らわない。他のラウンダーも誰一人逆らおうとしない。

過去にはいたらしいが、そいつは呆気なく殺された。

無関係な家族や友人をも巻き添えにして。

SERNや委員会にとって俺らは……いや、自分達以外が全て道具。

思うように動かないのなら捨てるだけ。

だが、始末が悪い事に奴らは道具を有効的に効率的に使おうとする。

要するに簡単に人質を用意してくる。

「へ……そうかよ」

FBは銃口を向けられているのまだ余裕そうにふるまい、笑いまでする。

……乾いた嘲笑の様な笑いだがな。それが俺に対するものなのか、FB自身に対するものなのかは俺には分からないし、知る由もない。知る必要も無い。

「だが、お前らしくねえな、M3。お前の性格からすると、戸を開けると同時に引き金を引いてくると思っただんだがな」

こいつ……。

「あんたの方こそ、何故抵抗しない。銃も持っているはずだろ」
今から作戦に向かう予定だったのなら拳銃の一つや二つは潜めているはず。

なのに、FBはへらへらとするだけで何もしようとしてこない。
いや、口ぶりからすると、俺が殺そうとした事にも気づいていたようだ。

なおさら解せない。

「岡部、知ってるか？ この作戦終了時に生きていられるラウンド
Iは一人だけ」

天王寺は俺をあえて『M3』ではなく『岡部』と呼んだ。

「……お前一人だけだ。俺もM4もブラボーチームも全員残らず処分される。皮肉なもんだな、騙して捕らえて、その結果死ぬのは自分だっただから」

相も変わらずへらへらと笑う天王寺。

「俺には逆らう度胸はねえよ。従わなければ娘が危険に晒される。

岡部……お前はどうかんだ？」

天王寺は問いかけるように、試すように言う。

俺はどうだって？

そんなもの決まっている。

答えはとっくに出ている。

この男に銃を突きつけた時点で……いや、もっと前から。

「FB……これが答えだ」

ガチャリと重い引き金を軽く引く。

鉛が擦れる音がし、天王寺の脳天を貫いた。

筋肉質の巨体が崩れて地に倒れる。

それを俺は見下ろす。

「さらばだ……ミスターブラウン」

ブラウン管と娘をこよなく愛した男。

俺はこの男を恨むべきか感謝するべきか。

ミスターブラウンと言う名については特に意味はない。ふと頭に浮かんだだけだ。

ただ、なんとなくなんだ。

倒れる天王寺の携帯を懐から奪う。

そんな時、背後に近づく気配。

「……M3」

そう小さく呟いたM4はFBの死体を見る。

偽りの関係とはM4はFBのことを父親のようだと言っていた。

ただの上司にしては少々面倒見がよく、時に厳しく、時に気づかうその接し方は確かに父親のそれに似ていたかもしれない。

……俺は父親など忘れたがな。

「M4、時間が無い。FBの死体を片付けておけ」

このままでは誰かに見つかる。

娘の絢に見られでもしたら面倒だ。

わざわざトラウマを植え付ける必要もあるまい。

「FBはもういない。今から作戦の指揮は俺が取る」

俺はもう引き返せない。

行くところまで行くしかない。

その先が絶望しかなかったとしても俺は進むしかない。

それ以外に道は無い。

8月13日 17時30分

何度も夢に見るまゆりの死。

だが、その悪夢の中に紛れ込むように浮かんだ夢があった。

まゆりは病気でもなく元気で、いつも俺の側について、ラボで紅莉栖達と仲良く楽しく笑ってる。

そんな夢。

そんな幻想。

俺はそんな手を伸ばしたくなるような夢から覚め現実に引き戻される。

否応無く、問答無用で。

こんなものは有り得ないと。

こんな未来は永遠に訪れないと。

そう頭の中に響く囁きに俺は

気がつけば雨が降っていた。

空は黒い雲で覆われており、太陽の光など照らすものかと言わんばかりだ。

ここはラボ。正しくはラボの前。

そこに身を潜めるようにM4と共に立つ。耳につけたイヤホンから聞こえるラジオの放送を確認すると、イヤホンを抜き銃を構える。

そして ドアを蹴破った。

勢い良く開かれた入口をくぐり、M4と俺は中に押し入る。

「……全員動くな」

そして黒で塗装された金属をラボ内の人物達に突きつける。

「岡部……あんた……！」

そこにいたのは紅莉栖、鈴羽、橋田……その三人。
るかはいない。

フェイリスもいない。

二人は必要ない。

だから　ここにはいない。

「全員壁に向かってひざまずけ。少しでも抵抗すれば　撃つ」

それに従うようにまず橋田が手をあげ壁に向かう。

鈴羽は俺を睨み、紅莉栖はわなわなと震えていた。

「あんた……どうしてこんな事を……」

「喋るな、撃たれたいのか」

「あの子……まゆりはもう長くないんだから、悲しませるような真似はやめてよ……！」

「黙れと言っているだろ！」

嘆く紅莉栖に向かって非情に銃口を向ける。

「……俺はもう、まゆりに会うつもりはない」

元々闇の中で生きる俺と、光の中で生きるまゆりは交わるはずが
無かったのだ。

それが奇妙な巡り合わせでこうなった。

嫌と言うほど考えて出した結論がこれなんだ。

今更覆す事は出来ない。

「さっさと従え、ここを狙ってるのは俺たちだけではない。お前達はもう……逃げられない」

今ラボで映るテレビもそれを肯定するようにニュースを流す。

爆破テロ予告により山手線、総武線、京浜東北線の全線が運転見
合わせ、と。

この秋葉原周辺には俺に従うラウンダーが潜んでいる。

「M4、こいつらを縛れ」

俺の命令で動くM4。

俺はその瞬間　何かを見た。

それは脳内での出来事。何かを思い出すかのように鮮明な映像が頭に浮かぶ。

ラウンダーに襲撃され、うろたえる俺達。

そして 撃たれるまゆり。

これは一体……

「 隙ありっ！」

俺が注意を逸らした一瞬。

それを見逃さず、はむかって来るの鈴羽。

銃を持つ俺の右腕を掴み、鳩尾を膝で蹴り間接を決める。

拳銃は地面に転がり、俺も同時に叩きつけられる。

「 M3！」

「 撃つな！ 岡部に当たるぞ」

M4が鈴羽を狙うが、鈴羽のその言葉で動きを止める。

…… どちらも甘いな。

M4は俺に構わず撃てば良い。

鈴羽は俺を無力化させたいのならこの程度ではなく、せめて腕の一本でも折ればいいのだ。

せっかく俺の油断で掴んだチャンスだというのに。

「俺を捕らえてどうする。他にも狙っている奴はいると言っただろ。

そいつらは俺の命など気にせず攻めてくるぞ」

俺は挑発するように鈴羽に語りかける。

「少なくとも、お前を殺せば未来は変る」

冷たい声で鈴羽は返す。

「 殺すって…… 鈴羽……」

「 牧瀬紅莉栖、さっきも言ったはず。この男は生かしておいちゃいけない存在なんだ」

「 ふ…… 俺を殺す為だけに、わざわざ未来から来たのか、ジョン・

タイター」

「 な、なんで……！ 」

やはり甘い。

俺の挑発に簡単に乗せられ隙を作る。

そして、その隙を俺が見逃すはずが無く　今度は俺が鈴羽を地面に叩きつける。

右手で腕の間接を決め、左手で懐から取り出した予備の拳銃を頭に突きつける。

「鈴羽、お前は何かもが中途半端だ。殺気も隠せず、自分が未来人だという情報すら完璧に隠しきれていなかった。スパイとしては落第点だな」

先程の鈴羽に負けず劣らずの冷たいく暗い声。

ガチャリと引き金に指をかける音を敢えて鳴らす。

「岡部……こんな事をして何になるわけ！　もうやめてよ……お願いだから、自首して」

自首つて……そんな事を俺がするとも思っているのか。

自分を騙し裏切り、拳銃仲間を銃を突きつけてる俺を見て……説得に応じるとほんのわずかばかりとはいえ信じてるつもりなのか？

「答える、鈴羽」

俺は紅莉栖の方を見向きもせず、無視を決め込む。

「お前が乗ってきたタイムマシンの動かし方を教える。素直に吐けばお前だけは見逃してやる」

「……そんな嘘をあたしが信じると思う。嘘と裏切りだけで世界を手に入れたお前をさあ」

鈴羽は俺の誘惑を断り反抗的な態度で口を動かす。

「あたしがいた2036年でもそうだった。お前は、その嘘を塗り重ねるために数多の命を奪い続けている。お前のせいで沢山死んだ仲間も、両親も、友達も、あたしの知らない誰かも、お前の手下として虐殺に加担した連中も皆。だから……あたしはこの時代に来たんだよ。お前を止めて、未来を変えるためにね！」

俺から抜け出そうと鈴羽はもがく。

だが、俺はそれを問答無用で潰し、腕を折った。

「があっ……！」

「それがお前の答えか。ならばもう用は無い。……しかし、お前は本当に甘いな。俺を止めたければ、さっさと殺しておけばよかったものを」

何もかもが甘い。

覚悟が足りない。

決断が遅い。

ホント甘いな……俺も。

独りで生きて、独りで死ぬ。そんな覚悟とうに出来ていたはずなのに。

「やめて、岡部！」

紅莉栖の静止も聞かず、俺は引き金を引く。

これで終わりだ。

偽りの仲間ごっこも、平穩も……全て。

そして 乾いた銃声がラボに響いた。

……俺が撃つ前に。

「……何をしてる、M4」

銃声の正体はM4。

誰を撃つでもない、無意味な発砲。

鈴羽を警戒しつつ、M4に視線をやる。

すると 意識を奪われた。

「まゆり……どうしてここに……！」

ラボの入口にはよたよたと立つまゆりがいた。

病室で安静にしてなければいけないまゆりが。

……今までもまゆりがラボに来た事はない。

だと言うのに、何故よりもよって今……。

紅莉栖も、橋田も……鈴羽すらも呆然とまゆりを見つめていた。

「もう……いいんだよ、岡部くん。もう無理しなくても」

「何を言ってる……」

「まゆりの為なんだよね……全部。普通に考えれば、岡部くんの年で入院費や手術費を出せるはずがないのに、まゆりはいつも頼りつ

きりで……。無理までさせちゃって」

まゆりはやはり笑う。

俺が仲間……鈴羽達に銃を向けているという状況を目の当たりにしているとこのように、それでも尚。

「まさか、岡部、あなた……」

俺は何も言えなかった。

黙ってまゆりの微笑を見ているしかなかった。

「まゆりはもう大丈夫だから、これからは岡部くんは岡部くんの為に生きて。……お願い」

まゆりは三年間に再会して以来始めての……『お願い』をした。

まゆりは俺の話の話を聞くだけで、いつも俺に心配かけまいと、申し訳ないと思いつつも口にはせず、内に秘めて黙っていたのだらう。そんなまゆりの初めての『お願い』は、やはり我侭ではなく、俺への思いやりだった。

今から三年前。

2000年問題から7年後。

ラウンダーと成って一年半程経った頃。

俺は秋葉に戻ってきていた。

それは任務としてであり、偶々だった。

かつて逃げ出した事をその時は忘れていた。

あの惨劇から復興し、過去の面影も消え、懐かしさも何も感じず。俺は秋葉原を去ってから独りで生きてきた。

昔の知り合いが俺を見ても気づきはしないだらう。そう思った。それぐらい俺は変わり果てた。

昔は学校に行き、友達と遊び、そして笑っていただらうに。

その時はそんな生き方を忘れていた。
引き取られた親戚の家は俺を歓迎せず、俺もそこにいつらくて家を出た。

そりゃ、その親戚は2000年問題で子供を亡くしたばかりだったんだ。殆ど面識の無い俺の面倒を見る余裕など無かっただろう。今は割とマシにはなっているが、当時の日本……いや、世界全体は荒れに荒れていた。

コンピュータのトラブルは収まっても、経済はひたすらに混乱し、各地で起きた戦争で、輸入も多くが止まった。

だから、全うな手段では金を稼ぐ事は出来なかった。

当時は小学生だったのでなおさら。

バイトも出来てせいぜい新聞配達くらいで、それだけではとてもじゃないが生きていけるはずがなかった。

時に盗み、時に騙し……時には犯罪に加担する仕事もこなした。

そうして生きていく内に、気づけば俺の周囲には誰もおらず、俺も他人を信用していなかった。

自分一人の力で、自分の為だけに生きる。

そんな風に日々を過ごしていたある時、携帯にメールを着信した。
ラウンダー募集。

その見るからに胡散臭そうな仕事に、俺は手を出した。

利用できるものなら利用してやると。

騙すつもりなら、騙し返してやると。

そう思っていたからだろうか、仕事の内容を聞いた時は若干拍子抜けだった。

IBN5100の搜索……たったそれだけだったのだから。

もう少し金になるのは無いのかと、思わず上司であるFBに尋ねてしまうほどに。

そうしてラウンダーになってから一年半が経ち、M4を部下にしながら裏の仕事を続けていた。

ラウンダーとしての仕事もいつの間にか増え、だれかを傷つけて

生きる機会も増えていた。

そうして秋葉原に足を運んだ俺はIBN5100の搜索の為街を歩いていた。

そして 見つけてしまった。

それはIBN5100ではなく、俺が逃げ出し見捨てた少女。椎名まゆり。

独り寂しく、弱弱しく歩くその姿に俺は目を逸らし、再び逃げ出そうとした。

結局俺は何も変わっていなかった。

いや、いつそ変わっていなかつた方がまだマシだつただらう。

俺は悪化した。

無邪気だつたあの頃の俺はいない。

逃げ出した拳句人を蹴落とし生きている俺に、まゆりに合う資格など無い。

だけど

まゆりがふらりと倒れるのを見て、俺は無我夢中で駆け寄っていた。

救急車を呼び、病院へと向かった。

そうして、知った。

まゆりが病気を抱えていると。

それにも関わらずまゆりは無理をして治療してこなかったと。

天涯孤独となったまゆりには金は無く、このマシに成ったとは荒れた国で金も無い者に治療など誰も施さない。

それでもまゆりは独りで闘っていた。

逃げ出した俺とは対称的に。

そんなまゆりは目を覚ましてこう言つたんだ。

『……岡部くん。久しぶり、大丈夫だつたんだね』

こんな俺に微笑みながら。

だから 俺は決めた。

まゆりを守るうと。

今まで逃げてきた罪滅ぼしとは言わない。

例えそれが、俺が側にいればまゆりが無茶をする事はなかったという罪悪感から来る義務感だったとしても、俺は今度こそ逃げないと。

だが、今更生き方は変えられないし、全うにやっつけては守れない。

だから俺は　一線を越えた。

より非情に、より無情に。

どんな仕事でも引き受け金を得た。

そしてそれが三年たった今、俺は未来を……過去を変える事の出来るチャンスにめぐり合った。

タイムマシン。

それは偶然であり、断じて運命などではない。

その偶然のチャンスを逃すまいと俺は、見えない闇に突き進む事を決めた。

まゆりから離れ、今まで世話になったFBも殺し、SERNへの反逆を決め、ラボの仲間達も裏切った。

俺は俺の為に生きることをとくに止めていた。

全てはまゆりを殺すという運命というふざけたモノに抗うため。その為に俺はあらゆるモノを捨てる。

自分の幸福なぞ求めていない。

こんな俺に幸せにある権利など端から無い。

だと言つのに　まゆりは『自分の為に生きてくれ』と。

微笑みながら、涙を流しながら。

「俺はもう……引き返せない。俺はとっくに死んでいる」

あの惨劇のあったあの日から、逃げ出したあの瞬間から。

俺は幸せになる権利を失ったんだ。

「うっん、岡部くんは生きてるよ。今、ここで」

まゆりは穏やかな顔で諭す様にそう言つと、ふらりと倒れた。

「まゆり！」

鈴羽を放し、まゆりの下へ駆け寄った。

再会したあの時の様に、無我夢中で。必死に。全てを投げ出すように。

「えへへ、まゆりね。ラボにずっと来たかったんだ」

やっと来れて嬉しいな、不思議と初めてって気がしないんだ……
そう弱弱しく。

「桐生さんが教えてくれたんだよ。岡部くんが危ないって」

「萌郁が……」

俺は隣に立つ萌郁に視線をやる。

「……ごめんなさい。岡部くん……後悔して欲しくなかったから裏切った……つまりはそういう事なのだが、何故だか恨む事は出来なかった。

「さっきメールが来たの。あなたがFBの所に向かっていた間に」

それは未来からの日付のDメール。

『流されるな。』『正直にならな』『いと後悔する』

未来からの忠告。

それで萌郁は俺に逆らい、自分の思う通りに行動した。その結果がこれだ。

「岡部倫太郎、これからどうするわけ。まだ、あたし達を捕らえるつもり？」

鈴羽が問う。

初めて会った時から感じていた殺気を感じない気がした。

さすがにまゆりがいるこの場では殺せないか。

……相変わらずの甘さだ。隙だらけ。

その隙を狙わない俺も冗談じゃなくらいに甘い。

「岡部……私達に出来ることならする。だから話して」
紅莉栖も。

「出来ることなど無い。俺は今SERENに狙われてる身だ。逆らわなければ死ぬだけだ」

俺はまゆりを萌郁にあずけ歩き出す。

「それに、俺は何が何でも運命とやりに反逆する」
向かうは電話レンジ。

「過去を……未来を変える。その目的は変わらない」
X6800のキーボードに『35370#』。
今から四年前。

「……電話レンジを使うつもり？ 今Dメールを送れるかも分からないのに」

「いや、送れる。……そんな気がする」
「なんて送るつもり」

鈴羽が俺の下まで来て携帯を覗く。

『秋葉原へ戻れ。まゆりが病気。逃げるな』

それを見た鈴羽は黙って息を呑み、電話レンジは閃光を放つ。

そして俺は 送信ボタンを押す。

何度か感じた世界が歪む感覚。

目眩が視界を覆い、宙に浮いた感覚が世界と俺を切り離す。

そんな感覚に俺は耐え切れず 意識を手放した。

十年前のあの時と同じように。

ただ違う点があるとすれば、あの時は独りで、今はそうでない……

……それぐらいだ。

8月13日 16時20分

「これは……」

世界線の変動。

俺はそれに耐え切れず意識を失った。

そして今、頭を押さえながら目を開き、身を起こす。

ソファの上。どうやら寝ていたらしい。

「目が覚めた？」

視界にまつさきに映ったのは紅莉栖の顔。

「突然倒れるから心配したじゃない 身体は何とも無いの？」

「……ああ」

責めるように、かつ安心したような口調で紅莉栖は言う。

この世界線でも俺は突然倒れたようだ。

なんの前触れも無く頭を押さえて。

「良かったです。もう目を覚まさないかと……」

震えた、泣きそうな目。

視界には紅莉栖に続くかが映る。

「だから言っただじゃん。オカリンがなら大丈夫だって」

「ダルニヤンと言うとおりニヤ。魔王ルシフェルを倒した倫太郎が

こんなところでやられるわけがないのニヤン」

更に続いて橋田とフェイリス。

魔王ルシフェルって何だよと突っ込みを入れたい気もするが、そ

れ以上に理解できない単語がちらほらと混じっていた。この二人が

の言ってる事が理解出来ないのはしよっちゅうだが、今回は少し勝

手が違う気がした。

「……その、オカリンってなんだ？」

「え、オカリンはオカリンっしょ」

橋田はそう言っただけを指す。

なにを当たり前前の事を、とでもいいたそうな顔。

そんな呼ばれ方をしたのは初めてだが、あだ名か何かなのだろうか。

世界線が変わった影響かもしれないが……俺があだ名で呼ばれる事に違和感を感じずにはいられなかった。

そもそも俺を『岡部倫太郎』と認識する奴ら事態、こいつらしきいなかったんだ。

大抵の奴らにとって、世界にとって、俺はM3という駒でしかなかったのだから。

あだ名で呼ぼうとする奴なんて一人もいなかった。

「もしかして頭でもぶつけて記憶とんじやった？」

「……そうなの？」

状況把握をしきれていない俺の前に、また二人。

鈴羽と萌郁。

「なんでお前達が……」

「え……あたしがいちや迷惑だった？」

「……そうなの？」

「いや、そうではないが……」

単純に驚いただけだ。

萌郁がラボにいる事もだが、鈴羽と並んで存在している事に。

鈴羽はSERENを恨んでいて、ラウンダーである俺も萌郁もその対象に入るはず。

だろいうのに、今の鈴羽には殺気は無く、むしろ俺を心配している風にも見えた。

「そっか、安心した。あたしも桐生萌郁もラボメンだもんね」

鈴羽はそう言った。

萌郁もそれを否定せず、安堵の表情を浮かべていた。

……つまり、そういう事なのだろう。

過去がどう改変されたのかは知らないが、いつのまにか萌郁がラボメンになっている。

ラボメンナンバー008。

俺は萌郁にラボには近づくなと言っていたはずなのだがな。
何をどうすればこんな事になるのか。

俺は今一度、辺りを……ラボを見渡す。

視界に映るのは、紅莉栖、るか、フェイリス、橋田、鈴羽、萌郁。
そして 勢い良く、音を立ててラボのドアが開かれる。

「トウツトウルー ただいまー」

そこには、元気に笑う幼馴染が……まゆりの姿が確かにあった。

8月13日 16時20分(後書き)

これで一応完結です。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

需要があるか分からない 世界線を独自解釈で書かせていただき
ました。

しかも、内容が薄くて分かりづらかったのではと思います。

本当はもう少し、萌芽や鈴羽が目立つはずだったんですが……微妙
に。

そのため、現在鈴羽ルートを執筆してしまっております。

書きあがったら投稿したいと思しますので、またよろしく願
います。

8月8日 16時45分(前書き)

Chapter 05の終わりから分岐する鈴羽ルートです。
拙い文ですがよろしくお願いします。

8月8日 16時45分

昨日はフェイリスのおかげで実験が出来なかったが、今日も電話レンジの解明は無理そうだ。

まず、放電が起きる条件が分からない時点で先は遠い。

放電が起きやすい時間はあるものの、それも確実ではない。

要するに謎の塊だ。

何故こんな携帯と電子レンジを繋げただけのモノがタイムマシンに成り得るのかさっぱりだ。

その上、Dメールによる過去改変も起きない。

分かった事は、この電話レンジでは思う通りに過去を変えるのは極めて難しい事、そして電話レンジの検証もそろそろ限界だという事くらいだ。

「何度もDメールを送ったけど、過去に影響を及ぼした可能性があるのは岡部の一通のみか」

実際はるかかのDメールも何らかの影響を与えているのだが、この世界線ではあの時送ったDメールは不発だった事になっている。

「でもさ、岡部の時ってDメールを送ったの、誰も覚えてなかったじゃん。もしかして、知らぬ間に変わってるって事もありえるんじゃないか」

「……否定はできない」

紅莉栖達はそう言うが、俺としてはその可能性は低いと思う。

俺には改変前の記憶がある。

主観的感觉から言うと、少なくとも、この電話レンジで改変されたのは二回だけだ。

……紅莉栖達には話していないがな。

「岡部倫太郎、君はどう思う？」

「……何がだ」

「メールが過去に送られた事に気づいたのも、過去を変えたのも、

それに気づいたのも君。これって偶然？」

鈴羽がやたら挑発的な態度で話題を振ってくる。

「電話レンジの仕組みに関しても、話し合ってるのは主にあたしと牧瀬紅莉栖、橋田至、君は殆ど何も言わないよね」

何を企んでるんだと言わんばかりの目。

橋田も紅莉栖も言われて『そう言われれば確かに』と俺を見る。

「岡部、あんたは何か思うところはないの。些細な事でもいい」

疑いの視線を向ける鈴羽と違い、紅莉栖は純粹に意見を求めてくる。

ホント根っからの研究者だな。

おそらく理屈で他人を言い負かし過ぎて、友達が出来なかった口だ。

こいつからは馴れ合いに慣れている感じがしない。

「……黙秘？」

鈴羽に至っては馴れ合う隙すら無かった感じだな。

俺より年下なのに、よくもここまで殺気を放てるものだ。

……殺気を隠しきれしていないのはまだ甘いかな。

そんな鈴羽に向かって俺は、ならばと口を開く。

「ジョン・タイター」

今ネットで話題の自称タイムトラベラー。

その名を出した瞬間、鈴羽は顔を強張らせ、言葉を詰まらせた。

分かりやすい性格だが、声を出さなかっただけ、まだマシかもな。

……スパイには向いてないが。

「タイムマシンの事なら奴に聞いてみたらどうだ？ なんせ203

6年から来たって言うんだからな」

「タイターがタイムトラベラーだって証拠なんて無い。そんな胡散臭い人物に聞くって言うわけ？ そもそも他言無用だったんじゃないの」

「……タイターの話が胡散臭いように、奴からしても俺達の話も胡散臭いはずだ。電子レンジがタイムマシンに成ったって言うんだぞ」

「それはそうだけど……」

「それに奴なら、誰にも言わないさ。SERENに刃向かう為にわざわざ一人で過去に来るような奴だからな」

そこまで言う俺は、ちらりと鈴羽の顔を見る。

動揺、かつ疑惑の目。

ホント分かりやすい。

「……確かにタイターの言っていた通りSERENはタイムマシンの研究をしていたし、タイムマシンの仕組みもそのままだった。けど、それだけじゃタイムトラベラーかは分からない。釣りって可能性も否定出来ないし……」

「……釣りだと？」

「あ、いや、畏かもしれないって事！」

意味が今一分からなかったので聞き返すと、慌てて、というか取り乱した感じで言い直した。

「……何だったんだろうか。」

「それはつまりタイターがSERENに通じていると」

紅莉栖の事も気になるが、今は非常にどうでもいいので無視して話を進める。

「な、そんな訳あるわけないじゃん！」

「……どうしたの、いきなり」

紅莉栖に向かって言った言葉に反応したのは鈴羽。

それも過剰に。

「いや……タイターは信用出来るんじゃないかあって思ってさ。はは……」

笑って誤魔化そうとするが目が笑っていない。

「タイターに話す位なら、専門的な研究機関に電話レンジを持ち込む方がまだ真つ当な考え。前から思ってたけど、本来なら電話レンジは、こんな小さなサークルなんかにあっていいモノじゃない。現に今も行き詰まってる訳だしね」

しかるべき頭脳と金、設備。それがここには圧倒的に足りない

紅莉栖は言う。

「そんな事したらSERENに狙われるよ。そうだったらあたし達全員ただじゃすまない」

だから止めておけと鈴羽の忠告。

「やたら詳しいな、鈴羽。SERENに殺されかけた事でもあるのか」
俺が茶化すように言うと、鈴羽がキツと睨んでくる。

今までに無い位の、もはや隠す気のない殺気にラボがシンと静まり返るのが肌で感じ取れる。

今の鈴羽は目で人を殺せると言っても過言ではないだろう。

しかし……やはり甘い。

これではSERENに恨みがあると主張しているようなもの。
それも踏まえ上で、改めて考えると、結論はすんなりとでる。

阿万音鈴羽「ジョン・タイター」。

こう考えれば、全てがすんなりといく。

そして、そうと分かれば

「鈴羽よ、何か悩みがあるのなら言ってみろ。聞いてやる」

「どうしてお前なんか……」

それは親の敵を見るような目。

震えた声に、爪が身に食い込む程に握り締められた拳。

その尋常じゃない様子に紅莉栖も橋田もただ息を呑むばかり。動く事も適わない。

そんな張り詰めた空気の中、唯一平然としている俺。

「相談に乗ってやると言ってるんだ。なんなら力なるとな」

「……何を企んでる」

「いや、何も」

純粹な好意……であるはずはない。

ただ少しでも話を引き出そうとしているだけ。

鈴羽がジョン・タイター、すなわちタイムトラベラーであるならば聞き出したい情報はいくらかでもある。

その為なら嘘でも偽善でもやってやる。

「……じゃあさ」

しばしの沈黙の後、鈴羽が低い声で。そしてまた一拍。

「君の事、教えてよ」

「……何？」

「君ってさ、謎だらけじゃん。だから興味があるっていうか、気になるっていうか」

その顔は表面上は好意的だが、腹の中では裏があるのが丸分かりだ。

……俺同様にな。

つまり、俺がかまをかけたから、かけ返してきた。

腹の探り合いってところか。

「いいだろう。だが、謎が多いのはお前も同じ。俺だってお前が気になる。ここは互いに包み隠さず話し合おうではないか」

俺がそう言うとならボから再び音が無くなる。

男と鈴羽が見つめ合う、もしくは睨み合う。

そんな中

「あっそびにきったニヤ〜ン」

空気を読まず、更には見事にぶち破ってラボ内に入って来た猫ミミが一人。

「ニヤニヤ、この空気は……」

元気よく乱入してきたフェイリスは俺達の様子を見て、テンションを少し下げる。

さすが人の感情に敏感なだけは

「倫太郎がスズニヤンに告白でもしたのかニヤン？」

噴いた。

「な……！」

いや、実際には噴いてはいのだが、それぐらい予想外な発言だった。

この暗い空気から何をどう察すれば、その結論が出るんだ……。鈴羽も慌てる。

そしてフェイリスは口をつり上げている。

おそらく空気を読んで、険悪な雰囲気を感じた上での犯行だ。

「まあ、気になるとかそれっぽい事は言ってたし、あながち間違いないかも」

「いや、それはちょっと強引じゃない？」

先程まで黙っていた橋田と紅莉栖も、ここぞとばかりにフェイリスの話に乗っかっていく。

さっきまでの妙な空気よりかは、フェイリスワールドの方がマシだと踏んだのだろう。

しかし……告白、か。

「では、鈴羽。明日、秋葉原を二人で出かけるとするか」

俺もあえてフェイリスに乗った。

「それって、デートかニヤ」

「な、なんであたしが……」

「俺の事が知りたいのだろう？」

ここでまた沈黙。

だが、さっきと違うのは、まだフェイリスワールドが健在だという事だ。

暗さも険悪さも無い。

まるで本当にデートの申し込みをしたかのような感じ。

「……わかった。その果たし合い、受けて立ってあげる！」
腹をくくったと俺を真剣な目で見返す。

しかし、果たし合いって……。

微妙に違うんだか、合ってるんだか、微妙な呼び方だった。

8月9日 11時10分

「……ねえ、岡部倫太郎」

「なんだ」

「どうして、ここなの？」

「どうしてとは、何がだ」

「いや、だから……」

「二人とも、どうかしたのかニヤン」

「鈴羽がこの店に文句があるそうだ」

「ちょ、別にそうは言ってないじゃん！」

「そうだったなのかニヤ、スズニヤン……」

「違う違う、だから目を潤ませるのはやめて！」

「かしこまりましたニヤンニヤン」

フェイリスはケロリと笑顔になって、猫手を作りニヤンニヤンと言う。

ここはメイクイーン。

昨日公言した通り鈴羽と秋葉原散策を始めて三十分たった位だ。

別に俺は鈴羽と話が出来ればどこもよかったし、知り合いが側にいれば少しは俺に対する警戒も緩くするだろうという事でここにした。

「これがメイド喫茶か……」

案の定、鈴羽の注意は俺から逸れている。

メイド喫茶を知らないと言っていたからな。殺伐とした未来から来たのならば、さぞ珍しいのだろう。

……まあ、まだ鈴羽がタイターだと確定はしてないがな。

「でもさ、メイドって給仕をする人の事でしょ。なんで猫なの？」

鈴羽の疑問。

その何気ない一言で店内の空気が一瞬凍った。

がやがやと雑談していた客達が静かになり、視線がこちらに……

鈴羽に集まる。

「え、え、もしかして、あたし何か失言した？」

「……気にしなくていいと思うぞ」

『ネコ耳装備なんてメイドじゃねえ！』

『ネコ耳＋メイドで破壊力2倍だろ！』

この店ではこの二つの意見が真っ向から対立しているらしいというのが、こここの常連である橋田の談。

だからこそ、鈴羽の一言は爆弾投下に近い。

「それはだニヤ…… 『萌え』 だからニヤ」

そんな空気を一変させたのはフェイリス。

客が皆、フェイリスの言葉に耳を寄せている。

「……萌え？ 萌えって何？」

無知な鈴羽フェイリスに問うが、正直知らなくてもいい、どうでもいい知識だと思う。

まあ、俺も詳しくは知らないが簡単に説明すると、橋田の様な人間が好むも、要するにオタク向けだと認識していれば多少の差異はあれど問題は無いだろう。

フェイリスもそのオタの一人であり、アキバの各ショップに萌え文化を積極的に導入するように働きかけた張本人だったりする。

この猫娘の趣味のせいで秋葉原がこれほどまでに混沌化したわけだが、その結果経済が活性化したというのだから世の中分からない。「へー、それが萌えなのかあ」

フェイリスによる洗脳もとい説明を受けた鈴羽がひとまず納得。

「そっぴや、母さんが昔はそんなモノがあつたって言ってたかも」

「ん、萌えが流行りだしたのは最近だと思うんニヤけど」

「え、あ、いや、何かと勘違いしてたのかも。あはは」

「ニヤニヤ〜？」

笑って誤魔化す鈴羽。

だが、フェイリスに誤魔化しは効かない。

フェイリスより優位に立つには、まず感情を顔や行動に出さない

ようにする事だな。

こいつは些細な変化も見逃さず、その上勘がいいので厄介極まりない。

「勘違いは誰にでもある。気にしないでやってくれ。それよりも「ヒー」を頼む」

「ブラックかニャ？」

「ああ」

そう受け答えをするとフェイリスはまたニヤンニヤンと奥へ消えた。

「あまり迂闊な発言をするな」

どこで誰が聞いているかも分からないのだ。

SERNにタイターだとバレてみる。有無を言わさず連行されるのは必至だ。

あと、鈴羽は確認するまでもなくタイターだ。

間違いない。

会話の節々にそれが漏れでている。

「母さん……」

鈴羽は何かを思い出すように、懐かしむようにその口から零す。

その表情は哀しげにも見えた。

そして、ふいに思い出したかのように俺を睨み出した。

「ねえ、岡部倫太郎。君には親っている？」

雑談……と言った感じではない。

おそらく何かを探ろうとしているんだろうが、もう少し敵意を隠して話題を切り出せないだろうか。

あからさま過ぎる。

「……なんだ、いきなり」

「ちよつと気になっただけ。昨日も言ったけど君の事もっと知りた
いからさ」

……親ねえ。

「そんなものは死んだ。十年前にな」

俺はコーヒーを飲みながら、今日の天気を言うかのように軽く、さらりと。

「それがどうした。親や家族のいない者など探せばそこら中にいるぞ」

「……寂しいとか、悲しいとか思わないわけ」

「そんな感情になんの意味がある。生きる事には必要の無いモノだ」

「な……！」

「そんなモノを一々気にしていたらまともに生きていられない。過去に捕らわれていては前には進めない」

……俺の様にな。

「そんなんだから、お前は他人を簡単に蹴落とせるんだね」

「そういうお前は、他人を気にして失敗する質だな」

自分の目的の為だけに行動する……それが賢明な判断。

その為なら手段も選ぶべきじゃない。

選んでる隙など誰も与えてくれやしない。

「……あたしは失敗なんてしない。何が何でも お前の野望を止めてやる」

もはや慣れた殺気の籠もった目。

周囲がニヤンニヤンうるさいメイド喫茶の中とは思えない。

しかし……こいつは何と言った？

「俺の野望……だと？ 何だそれは」

初耳にも程がある。

「とぼけたって無駄だよ。その為にあたしは……」

鈴羽はそこまで言うと言口をつぐんだ。

その為に未来から来た。そんなところだろうが……解せないな。

タイターの目的はSERENの野望を防ぐ事であり、SERENの駒、しかも末端に過ぎない俺をどうこつしたところで何も変わらないと思っただが……。

「場所を変えよう。ここでは互いに話しにくい」

鈴羽の言葉が気になった俺は周りの目を気にして立ち上がる。

「ニヤれ、もう帰るのかニヤ。コーヒーを持って来たニヨに……」
演技だろうが残念そうにするフェイリス。

それを見て、俺は再び座り無言でコーヒーを飲む。

そして飲み干すと今度こそ、勘定を済ませ店を出た。

「場所を変えるって、どこに行くつもり」

続いて店を出た鈴羽が問う。

俺はそれに答えず先に進む。

「ちょっと、答えなよ」

これも無視。

とてもじゃないがデートではないな。

こうして無言のまま移動して、たどり着いたのはラジ館。

見上げれば人工衛星らしきモノが未だめり込んでいて、それを目当てに集まる見物人も少なくはない。「場所を変えるって言うから
てつきり人気の無い所にも連れてかれると思っただけだ」

「安心しろ。もう少しすればその人気の無い場所に着く」

ビル前にはかなりの通行人がいるが、その視線をすり抜け、忍び込むように中に入る。

立ち入り禁止、故に無人。

一旦中に入ってしまったえば何の問題も無い。

「ここなら誰にも聞かれる事はないだろう」

俺は足を止めずに話を切り出す。

エレベーターもエスカレーターも動いていないため、階段を使って上を目指す。

足音が無駄に響く。

「俺の野望がどうか言ったな、それはどう意味だ。ジョン・タイター」

「……なんで分かったの」

鈴羽は低く暗い声で俺の問いには答えず疑問を返す。

動揺はしていない事から、バレている事位は薄々感じていたようだな。

というか、さすがにあれだけ、かまをかけられて気づいてなかったら致命的な程の鈍感だ。

「お前はもう少し自分の言動に気を配るんだな。隠しているつもりでも、疑ってかかれれば節々に怪しい部分が目につく。まずは殺気位消せるようになれ」

あれでは敵だと主張しているだけ。

殺気は威嚇に使う時にだけ出せれば十分であり、それ以外は必要無い。

無意味に警戒されるだけだ。

俺の言葉が終わると、音が足音だけになり、それに続いて鈴羽も消える。

「……あたしも殺すつもりなの」

顔を俯けているのと、俺が上段にいるせいで、鈴羽の表情は見えない。

ただ殺気や怨念、負の感情が渦巻いてるのは分かる。

そして、その中には自分の不甲斐なさや弱さを責めるようなモノも混じっている気がした。

「殺すつもりならこんな場所には連れて来やしない。死体の処理が面倒だろうが」

いくら中は人気が無くても外は違う。

しかも人工衛星騒ぎがあつて世界的にも注目されたビルで殺人が起こつただなんて、バレた時にもみ消すのも厄介だ。

血の跡も残せない。

「それよりも、俺の問いに答える。ネットで書かれていた事が真ならば、お前の目的はSERENの野望を防ぐ事だろう。それがどうして俺個人をどうにかするって話になる。俺は世界征服なんてするつもりはないぞ」

……出来る気もしないが。

世界を前にしたら俺なんて酷いまでにちっぽけ。

それ以上に世界を征服して何になるって話だ。無意味過ぎる。

まるで子供の絵空事。

しかもピンチの時に現れ、悪を殲滅する正義の味方並みの。

「……あたしは全部知ってる。嘘は通用はしない」

俯いていた顔を起こし、俺を視線で殺そうとするかのように睨む。「嘘と裏切り、それだけでお前は世界を手に入れた。そして、その嘘を塗り重ねるために数多の命を奪った」

鈴羽は言う。

俺が世界を手に入れると。

そして、俺が世界を滅茶苦茶にすると。

「お前のせいで沢山死んだよ。仲間も両親も友達も、あたしの知らない誰かも、お前の手下として虐殺に加担した連中も。みんなお前に殺されたんだ」

「戯れ言を。どうやってたら俺なんか世界を手に入れらるんだか」

睨む鈴羽に、馬鹿にするように吐き捨てる。

これは本音であり挑発。

まだまだ情報が足りな過ぎる。

少しでも引き出す……いや、吐き出させる。

「……あたしがいた2036年ではさ、お前はSERIN治安部隊ラウンダーのトップで300人委員会の一人、決して表舞台には出てこない影の独裁者になってる」

……ラウンダーのトップはともかく、300人委員会に独裁者つて。

映画か何かかと突っ込みたくなるな。

そもそもラウンダーが治安部隊を名乗っている時点でおかしい。

「お前はその独裁者の俺を見た事があるのか」

「……見た事はないよ。だけど、命がけで調べた情報だから間違いない」

……見た事も無いのに間違いないね。

あまりの根拠の無さに溜息が出そうだ。

マスコミの情報操作に踊らされる質だな、こいつは。

もし仮に俺が世界を手に入れたとしたならば、表舞台に出ない以上、命をかけた程度で手に入る位置に自分の情報など置きはしない。表舞台に出ない事はすなわち、目的は名声でないという事。ならば徹底的に隠れるべきだ。

出来るだけ安全な場所に、命を危険に晒さないように。

だというのに未来の俺は自らを神格化して『鳳凰院凶真』と名乗っているらしい。

隠れる気など微塵も感じない。

むしろその痛々しい名から自虐的に思える。

未来の俺は一体何を考えているんだ。

そんなあからさまなスケープゴートにされてまで何を成そうと言
う。

「……それで、わざわざ過去にまで遡って俺を殺しに来た訳か。ご苦勞様だな」

「お前を止めれば。未来は変わる。その為にあたしはこの時代に来たんだ」

鈴羽は殺気だった声を放つ。

平静を装っているが、荒立ちは隠せない。

「だったら何故、さつさと殺さない。お前がこの時代に来て何日経つ」

殺したいのならば俺と接触する必要などなく、さつさと銃で撃ち殺すなり手段はあつたはずだ。

それをわざわざスパイのように近づき、俺の実験にまで協力する意図が見えない。

「……世界線は収束する」

鈴羽を見つめていると、その口からふと訳の分からない事を言い出した。

「岡部倫太郎は2036年まで生きる事が、あたしの記憶から確定している。そして、その確定事項をあたしは覆せない」

だから殺害ではなく、干渉を選んだわけだ。

あわよくば電話レンジで未来を変える事が出来るように。

「……本当に俺が2036年まで生きていたら、俺はそれまで不死身って事か。ま、生きてないとは思うがな」

「あたしが嘘をついてるって言いたいわけ？」

「嘘も何もお前は俺を見ていないんだろ。死んでいるかも生きているかもお前は知り得ない」

「な……なら、お前が死んでいた場合、誰が世界を」

「300人委員会だろ。その場合、俺が死んでも未来は変わらないって事になるがな」

俺はそう言つと止まっていた足を再び動かし階段を登る。

「どこにいくつもり！」

鈴羽が叫びながら後をついてくるが無視。

延々と続く階段を俺は無言で登り、8階に出ると、ラジ館の壁にめり込むようにして、不安定な形で突き刺さっている人工衛星が目に飛び込んで来る。

「鈴羽、これの動かし方を教える」

後ろを振り向かず命令口調で言う。

「だ、だれがお前に……」

対する鈴羽は絶対に言わないと口を閉ざす。

その態度から、これの正体を鈴羽が知っているのは明白。

そして、その正体がタイムマシンである確率も低くはない。

忍ばせている銃で脅して吐かせる手もあるが……無駄だろう。

おそらく鈴羽は拷問を受けても吐かない。

自然と口から零す事はあっても、自分から言う事は決してない。

そんな感じを鈴羽の目から感じる。

「今日はこれで十分だ」

用は済んだと俺は、下に続く階段に向かう。

話は十分に聞いた。

十分過ぎる程に。

これ以上いても鈴羽の頭に血を昇らせるだけだ。

そう、やはり無言で階段を降りる。

8月9日 13時00分

「今日は誰もいないんだな」

「うん、でももう少ししたら、るかちゃんが来てくれるし、岡部くんもこうして来てくれたから」

だから寂しくはないよと、まゆりは微笑みながら言う。

鈴羽と別れた後、俺はしばらく秋葉原をうろついてから、この病院に向かった。

鈴羽の奴がつけてきていないか探っていたが、その心配は徒労で終わった。

なんせ、今までは正体を隠す為に自重していたんだろうが、俺にバレた今、開き直られる可能性は多いにある。

自分がジョン・タイターだと名乗り、俺がSERENに通じ、未来を滅茶苦茶にする悪の根源だと。

荒唐無稽な話だが、タイムマシンの存在を知ってるラボメンならば信じる可能性もある。

特に紅莉栖と鈴羽は仲が良い上に、冷たく接ってきた俺に信用なんてあるはずもない。

「……どうかしたの？ 悩み事？」

俯き考え事をしてしていると、まゆりが心配そうに言うので俺はさすがに『なんでもない』と誤魔化す。

まゆりの前では出来るだけ余計な事を考えるのを禁じていたというのに……迂闊だった。

鈴羽の事で少々混乱していたのかもしれない。

「もしかしてスズさんのことかな？」

そう頭の中で落ち着かせようとしていたので、まゆりの言葉に少し焦った。

……表情には出さないが。

「……どうしてそう思う？」

話題にも上がっていないのに、このタイミングでいきなり鈴羽の名を出した事に疑問と不安を覚えずにはいられなかったが……

「だって、今日デートだったんでしょ？ フェリスちゃんが教えてくれたんだー」

俺の心配は杞憂で済んだ。

まったく、フェイリスの奴め……余計な事を。

「デートではない、ただ飯を食い、秋葉原を歩いただけだ」

敢えて加えるなら殺気を交えた腹の探り合いぐらいだ。

デートの面影など見事なまでにどこにも無かった。

「えへへ、そうなんだあ」

……だと言うのに、まゆりは何が嬉しいのか笑う。

照れ隠しと勘違いしているなら酷い誤解だが……まゆりが笑っているならわざわざ訂正する意味は無いだろう。

それに、訂正しようとする程、照れ隠しの様に感じさせてしまう気もしたので何も言わない事に決めた。

「飲み物を買ってくる。まゆりは何がいい？」

「えーとね、オレンジジュース」

席を立ち、病室を出ようとする俺を、まだニヤニヤニコニコと笑うまゆりが見送る。

ホント……何が嬉しいんだか。

訳は分からなかったが、まあいいかと俺は自販機に向かった。

「あ、岡部さん。いらしてたんですね」

マウンテンデューとオレンジジュースを両手に持って歩いていると、るかの声が聞こえた。

「ああ、さっき来たばかりだな」

そしてるかの姿を確認すると軽く返事をした。
すると、るかは何を考えたのかいきなり顔を赤くし

「あの、えっと、その……」

としどろもどろになった。

そして、大きく息を吸い深呼吸。

「今日岡部さんと鈴羽さんって、で、デートしてたんですよね!？」
恥ずかしさを押しつけるような、るかにしては大きな声で目を逸
らしながらも尋ねてくる。

顔が真っ赤だ。

「まゆりにも言ったが、あれはデートと呼べるモノじゃない」

「こう言つとやはり照れ隠しに聞こえるが、実際違うのだからどう
しようもない。」

ただ一緒に出かけただけなのを、どうして女子連中はデートにし
たがるのか不思議でしようがない。

「……違うんですか?」

「断じて違う」

恐る恐る聞かると、バツサリと否定する俺。

事実有り得ない。

俺もそうだが、鈴羽も恋愛などしている余裕が無いのだから。

俺と鈴羽という組み合わせは、どの世界戦を探しても存在しない
と思う。

「じゃあ、今日は本当に出かけただけなんですか?」

「ああ、それに出かけたと言ってもフェイリスのいるメイクイン
で飯を食っただけだ」

説明するのが面倒なのでラジ館にも寄った事は言わない。

「そうだったんですか、てっきり……」

るかは胸に手をあて安心した風を見せる。

てっきりの後は何を言おうとしたのだろうか。

「くだらない事を言っていないでさっさと行くぞ」

こんな身も意味も無い話をしていても時間の無駄にしかない。

それに早くしないと手の温度でオレンジジュースが温くなってしまう。

「は、はい。あ、でも鈴羽さんにも飲み物買って来た方が良いんじゃないでしょうか」

早足で歩く俺は、るかの言葉でぴたりと足を止める。

「……鈴羽だと？ あいつがいるのか、ここに」

「はい。あれ、一緒に来られたんじゃないんですか？」

るかは首を傾げているが、俺はそれを無視して病室へと駆ける。

「あ、岡部さん……！」

るかの制止も無視。

急げば病室なんてすぐ。

鈴羽をまゆりに合わせる訳にはいかない。

まゆりに余計な事を吹き込んだりしたならばたたじゃおかない。

看護婦と何人かすれ違い目的地に達すると、扉に手をかけ開く。

ただしほんの少しだけ。

光が差す程度の僅かな隙間。

「スズさん、今日岡部くんとデートだったんだよね」

そう、またも『えへへ』と笑いながら言うまゆりの声に思わず手が止まった。

その笑顔に鈴羽も何も言わない。

言えない。

沈黙が病室の中に漂い、俺は何をぼさつと固まっているんだと扉の取っ手を持つ手に力を込め……また止まる。

「スズさん……岡部くんをよろしくしてあげてね」

「……え」

鈴羽は何を言ってるんだと疑問の声を漏らし、俺も理解出来ないでいる。

「まゆりの前じゃ平気そうな顔してるけど、きっと岡部くんは色んなモノを一人で背負い込んで、独りで悩んじゃってる。だから支えてあげられる人が必要だって、まゆりは思うのです」

……俺は動けなかった。言葉すら出なかった

「……岡部倫太郎を支える？」

「うん。スズさんだけじゃなくて、るかちゃんやフェリスちゃん、紅莉栖ちゃんに橋田くん……みんなに出会ってから岡部くん、少し楽しそうだった。今日はラボメンが増えたんだって」

……楽しくそうになんてした覚えは無い。そんな感情、とっくの昔に捨てた。

「……実はね、岡部くんとは幼なじみなんだけど再会したのは三年くらい前なんだ。最初は少し怖かったけど、まゆりの為に色々してくれて、入院費や治療費も出してくれて、その上まゆりが寂しくないように毎日会いに来てくれて……ホント感謝してもしきれないのです」

感謝なんて必要ない。

俺にとつて、まゆりは全てであり、その為だけに生きているようなものだ。

けれど

「でも、岡部くんにも自分の人生を生きて欲しいんだ。まゆりの為に犠牲にしないで、無理しないで」

まゆりは自分の為に生きて欲しいと言う。

重荷にはなりたくない。

「あの……どうかしたんですか？」

扉の前で固まり、まゆりの声が脳に響くだけだった俺は、第三者の言葉でようやく身体が機能する。

目の前には律儀に買ってきた鈴羽と自分の分の飲み物。

「……これを、まゆりに渡してやってくれ」

オレンジジュースの管をるかに押しつけ、扉から離れる。

「え、帰るんですか？」

「ああ」

俺は振り向かず病室から離れていく。

……あんな言葉を聞いた後に、どんな顔をして会えと言う。

曲がり角を右折し、るかから完全に見えない位置まで来ると

「くそっ……！」

鈍い音を響かせ、壁を思い切り右拳で殴りつけた。

手は痺れ、血は流れ、痛みが襲ってくる……が、そんな事はどうでもよかった。

まゆりに余計な事で悩ませ、心配をかけさせてしまった、そんな自分が憎くて疎ましかった。

……このままでは駄目だ。

何としても、何をしてでも、俺は運命とやりに抗い否定してやる。

まゆりは死なせない。

まゆりを辛い目に合わせはしない。

笑って元気に生きる……そんな夢で見るような未来を掴むんだ。

例え、その未来に俺がいなくても構わない。

死のうが、不幸になるうが。

まゆりが幸せであれば他には何もいらぬ。

8月10日 9時25分

まゆりを救う方法。

まゆりを病状は悪化する一方で、治療や手術も悪あがき程度に
しかならない。

医者の見立てでは、もって冬まで。

年を越す事は出来ないだろうと。

だが、俺はその事実を知っても尚、諦めなかった。

何か方法は、裏道でも抜け道でも何でもいいから存在しないのか
と。

そんなある日、まゆりがこんな事を言った。

『ねえ、ラボを作ってみない？』

流れも何も無く、いきなり。

ラボと言われても俺はさっぱりで、それは何かと聞き返すと、

『うーん、分かんない。でも楽しそうだった』

そう答えた。

なんでも夢を見たんだとか。

俺や橋田、るかにフェイリス、そしてまだ知らない誰かと毎日楽
しそうに団らんやおかしな研究をしている夢。

その夢の話聞いた時、俺は何故だか懐かしい気がした。

そして、俺はその一週間後、ラボを作った。

場所は他に無かったので天王寺から借りる形になったが。

おかげで、厄介事に巻き込まないと、るかとフェイリスは最初ラ
ボには誘わなかった。

親しい二人に何かがあったら、まゆりが悲しむ……そう思って。

それが、今では見事に厄介事に巻き込んでしまっている。

当初はまゆりの為だったラボが別の意味を持ち出してしまった弊
害。

いや、元をたどれば、それもやはりまゆりの為なのだが、俺は自

分の目的の為にラボを利用する事にした。

偶然出来た過去へメールを送る事を可能とする電話レンジ……それが全ての始まり。

これがなければ今も、まゆりの死に抗う手段を見いだせず、何も出来ない自分を呪いながらまゆりの死を見届ける事しか出来なかっただろう。

だが、今は違う。

世界を支配する因果の糸、人によれば運命とも呼ばれるモノを否定出来る手段が俺にはある。

そしてそれはラボを作ったおかげとも言える。

ラボがなければ、そもそも電話レンジが偶然作り出される事は無かった。

加えて、電話レンジがあっても俺一人の力では何も出来なかっただろう。

タイムマシンの存在とSERENの裏を教えてくれた鈴羽。

その証拠をSERENにハッキングして得たり、電話レンジの改良をもこなす橋田。

天才少女紅莉栖。

いくつもの偶然が重なり今がある。

俺はその偶然を決して見逃さない。

最大限に、限界を超えてでも利用してやる。

……例え、その結果地獄に堕ちる事になろうとも。

「あ、もうすぐ着くよ、岡部倫太郎」

端から呑気に見せかけた声が聞こえる。

電車で揺られながら思考にふけていた俺はその声を俺は無。

「おーい、聞こえてるー？」

けれど声は止まず、挙げ句明らかに無視を決めてる俺の耳もとで叫んできた。

「……言われなくても、次で降りる事は分かっている」「怠そうに、面倒そうに、鬱陶しそうに、仕方なくした返事。

「なら、反応ぐらいしてよ。心配するじゃん」

そんな俺の態度に気を悪くする事なく言葉は続く。

ここは電車。

隣にいるのは鈴羽。

向かうは遊園地。

……冗談みたいだろ。

だが、現実だ。

昨日の夜、正確に言えば今日の0時過ぎに送られてきた一通のメールにより俺は秋葉原の駅前に呼び出される事となった。

『明日の午前9時に秋葉原。デートの続き』

そうとだけ書かれてたメール。

明日というのが今日だと仮定して、険悪に別れた昨日の今日で俺を呼び出す理由……俺には嫌な予感しかなかった。

しかもわざわざ『デート』の続きと来た。

あの、互いを敵と認識しただけの名目上だけのデートの。

なので警戒を出来るだけして……と言っても、昨日と同じくらいだが、昨日の続きをする覚悟で駅前まで足を運んだ。

すると

『おっはー』

元気そうに手を上げる鈴羽の姿があり、側まで近づくと『じゃ、行こうか』と駅へと進もうとした。

そんな鈴羽に違和感を覚えながら『どこへ』と尋ねた。

すると懐からパンフレットを取り出し『ここ』と指差す。

『……何の冗談だ？』

『え、だってデートの定番なんでしょ。遊園地』

そうしてその後、俺は違和感を感じたまま遊園地へ向かう電車に乗り、もうすぐで目的地に着こうとしている。

……俺には今の鈴羽が理解出来ていない。

別に遊園地へ行く事に違和感を覚えているではない。

名目上とは言え、デートなのだからでも選択肢としてはありだ。

カモフラージュにもなり、運が良ければ油断させられるかもしれないと裏を持って考えたならば尚更。

それに昨日のラジ館のようないかにもな場所では、殺される可能性も多いに考えられ、あえて人の多い場所を選ぶのもおかしくはない。

俺が違和感を覚えているのは『デート』の中身ではなく……鈴羽自身だ。

「ほらほら、速くしないと扉閉まっちゃうよ」

駅に到着して停まった電車から一足速く降りた鈴羽が、速くしろと急かす。

……その態度にやはり違和感を覚えずにはいられない

電車から降りつつ鈴羽の顔をうかがっていると、鈴羽は『ん？』と首を傾げて疑問顔を返してくる。

俺と鈴羽、男女が並んで歩くその様は、客観的に見れば本当にデートに見えるかもしれない。

けれどそれは、普段の鈴羽相手なら有り得ない。

敵意を越えた殺気、俺と面する時、鈴羽はそれを絶えず向けていた。

隠そうとしても隠し切れない殺気……それが今は感じない。昨日ラジ館で別れた時には溢れんばかりだった殺気が。

油断させる為に隠してるのだとしても、今までの鈴羽から完全に隠すのは無理……そう考えていたのだが、それは甘く見てしまっていただけなのだろうか。

どうにも腑に落ちない。

油断するつもりはないが、調子が狂う。

「ここが遊園地かあ、実物は初めて見た。あの大きな円盤って観覧車だよな」

違和感を残したまま目的地に着くと、気のせいかな鈴羽はハシヤいである様にも見えた。

確かに鈴羽の言う殺伐とした未来では、こんな娯楽は消え去っていったのだろう。

トランプすらした事が無かったらしいからな。

相手が俺でなければ純粹に楽しめただろうに……と、鈴羽の態度を演技だと決めつけ思う。

鈴羽は駆ける様に入口の列に並び、入場間際になると『あたしお金無いよ』とか『デートは男が奢るモノなんでしょ』とか言い出した為、渋々俺が二人分払いようやく入場料。

お前なんかには借りは作らないとかなんとか言うタイプだと思っていたので、この奢れ発言も意外だった。

鈴羽は入場するや否や早足で進もうとし急かし出す。

「ほら、のんびりしてたら何も乗れないんでしょ」

別に全く乗れない訳では無いのだが……と心の中でため息。

その後もデートは続いた。

ジェットコースターに何度も乗ったり、昼食でカレーを食べ、また他のアトラクションを巡り走った。

メリーゴーランドやコーヒーカップと、俺からしたら何が楽しいのか分からないモノでも鈴羽はハシヤいでいた。

そんな鈴羽を見てみると、自然と昔を思いだす。

十年前に一度だけまゆりに行った遊園地。

絶叫モノは当時小学生だった俺達には乗れず、まゆりと二人でメ

リーゴランドやコーヒーカップにこうして乗っていた。

今思えば何が楽しかったのか、俺もまゆりもハシャいでいた。

……懐かしむ訳ではないが、時の流れを感じずにはいられない気分になった。

所詮ハシャいでいられたのは十年前の俺であり、今は違ってしまっている。

もう俺は何年も笑っていない。

笑えない。

そんな資格すらとうに失った。

「ねえ、最後にあれに乗ろうよ」

太陽は沈み、空も暗くなった7時過ぎ。

そろそろ帰ろうかと言うと、鈴羽は観覧車を指差した。

それは暗い世界で、その存在を主張するかのように眩しく輝く光の円盤。

鈴羽はその光に惹かれる様に進み、俺も後を追う光へ向かう。

近くで見ると、観覧車は一層大きく感じ、小さな箱がゆっくりと周り目の前をいくつも通過して行く。

そして人が一人、また一人と光の円盤の一部となり天に向かって昇って行き、俺と鈴羽もその例に習い地面を離れた。

ゆっくりと、ゆれながらも上昇。

窓からは遊園地の全体を見下ろせるまでに達した。

そこからは人は見えず、光だけが見えた。

闇に向かう俺が見下ろすのは光の世界。

人も、その笑顔もそこにはある。

「……きれいだね。あたしの時代にはこんなのは無かったからちょっと感動したかも」

反対側の窓から外を覗く鈴羽。

半日近く共に行動しながらも、今までの殺気も敵意も出す事無く、ひたすらに、休む暇なくアトラクションを巡りまわっていただけ。

正直拍子抜け。

時間を浪費し、収穫は無し。

おかげで、今日はまゆりに会いに行けなかった。
るかにメールで今日は行けないと伝えておいたから心配はしていないと思うが。

「……鈴羽、そろそろ何を企んでいるのか話たらどうだ」

殺気も敵意も感じなくても、何も考えていないはずかない。

単純に遊園地に来たかったのであれば紅莉栖やるかを誘えばいい話だからな。

そして今は完全な密室。

誰に聞かれる事も無い。

話をするなら今だ。

俺も、鈴羽も。

周りの目など、耳など気にする必要なく話せる。

「何も企んで無いよ。ただ……君を知りたかっただけ」

鈴羽は光の世界に目を向けたまま、振り返らずにそう言う。

そう言えば、昨日のデートも元々はそれが理由だったな、と思いで出しはするが、やはり納得出来ない。

俺の事を知りたいと言ったにも関わらず、今日は殆ど会話をすることはない。

本当にアトラクションを巡り走っていただけだ。

「……あたしは未来を変える為にこの時代に来た。君を止める為に」
鈴羽はやはりこちらを見ない。

俺も外を見下ろしてみると、地面が……光が遠のいて行くのを感じた。

観覧車はそろそろ最上部に向かう頃だ。

「君は悪だって、君を止めれば未来きつと良くなるって……そうずっと思ってきた」

両親や友人、挙げ句は未来を奪った俺が殺してやりたいくらいに憎かった……そう鈴羽は言う。

「でもさ、それが段々と分からなくなっていくんだ。前にあたし

が君を尾行した事あったでしょ。時々ラボからいなくなる君を見て、何かを企んでるんじゃないかって……そうしてつけていったら、その先には椎名まゆりがいた」

そうして、俺がラボを抜け出していたのは、何かを企んでいたのではなく、まゆりに会いに行っていたのだと知った。

確か、あの時はまだ、鈴羽をまゆりに会わせるつもりはなかったな。

まゆりに危害が及ぶまいと。

「最初は騙されてるんじゃないかって思った。椎名まゆりの前で見せてた優しい顔も親切も全部嘘に違いないって。……でも、彼女を見てると分からなくなった。昨日さ、椎名まゆりに会いに行っただ。岡部倫太郎は信用しない方が良くって警告しに。そしたら『岡部くんをよろしく』って言われたよ。支えてあげてって」

「……まさか、それで俺を信用したとでも」

俺を恨み憎み、俺を止める為に過去へと遡って来た奴が。

昨日は、あれほど殺気を向けていた奴が。

そんな都合の良い話があるはずがない。

鈴羽の覚悟がその程度だとは思えない。

「あたしは君を信じた訳じゃない。君を信じる椎名まゆりを信じただけ。……いや、本当は信じようとしたけど、まだ信じ切れてないってのが現状かな」

どうしたらいいか整理がつかなくて混乱中。

そしてそれを誤魔化す為の空元気。

そう鈴羽は言った。

だから、俺との接し方も分からず、誘っておきながら距離を取った。

殺気を感じなかったのもその為。

つまり、俺が悪かそうでないのかで揺れているという訳だ。

どうやらこいつ感情を隠せないだけでなく、情にも脆いらしい。

……そんな事ではいつか後悔するぞ。

一度成すと決めたら、どんな手段を使っても成し遂げる。そうではなくては。

「岡部倫太郎……君にとって椎名まゆりは何？」

鈴羽は外を見るのを止め振り返る。

真剣な目つきで俺を突き刺してくる。

気がつけば観覧車は最上部まで昇りきり、今度は下降を始めようとしていた。

観覧車は一瞬大きく揺れ、ピタリと止まる。

それに合わせて時間まで止まってしまったかのような錯覚。

俺は鈴羽の目を見つめ返して口を開いた。

俺にとってはまゆりは何かだと？

そんなモノ愚問にも程がある。

「まゆりは……俺の全てだ」

「……全て？」

「十年前、2000年問題が起きたあの年、俺とまゆりの両親は死んだ」

俺は過去を話す。

別に思い出している訳ではない。

こんな事、思い出すまでもない。

「そして、まゆりは祖母に、俺は親戚に引き取られて東京を去った。いや、逃げた」

あの惨事のあった東京から逃げ出した。

親や友達が突然死んでまともな精神状態ではなかったただとか言い訳は作るうとすればいくらでもある。

だが、逃げたのは事実であり消せない罪。

俺は自分の事だけしか考えず2000年問題の後、まゆりには会わずに東京を出た。

年を越す前まで四十度の熱を出して倒れていた俺を看病していたくれたまゆりを放って。

まゆりが辛そうな顔をしているのを直視したくなくて。

「そうして、俺が東京に戻ってきたのは三年前。そして、まゆりを見つけた。その瞬間まで俺はまゆりの事を忘れていた。……いや、忘れようとしていた」

俺とまゆりはただの幼馴染。

しかも、小学生の途中で別れた。

「向こうも俺の事を忘れていると思った。何も告げず姿を消した俺なんかを覚えているはずが無いと。けれど……あいつは覚えていた。それどころか『大丈夫だったんだね』と微笑んだ。自分は病気で命すら危うかったというのにだぞ」

治療費も払えず、ふらふらと弱弱しく歩いていたまゆり。

そんなまゆりを見たとき最初は、また逃げ出そうとした。

自分の為だけに人を蹴落とし生きていた俺に、生きている価値も意味も無かった俺にまゆりに、合う資格など無いと。

「その時、俺は決めた。まゆりを守ると。そして、まゆりは絶対に死なせない。そんなのが運命だというのなら俺は運命をぶち壊す。その為なら俺は何だってやってやる。俺の人生などいくらでもくれてやる」

俺は鈴羽の目を見つめながら、そう告白する。

デートの締めめの告白にしては、何とも色の無い内容だが。

暗く黒い決意の言葉。

鈴羽は、そんな俺を無言で見つめ返す。

そして、その一方で俺達を運ぶ観覧車は暗い空から、光で満ちた地上へとたどり着こうとしていた。

8月11日 14時00分

その後、観覧車を降りた俺達は無言のまま遊園地を出た。
俺も鈴羽も何も話さない。

駅まで歩く時も、電車に乗って帰る時も。

ただ、別れる時に鈴羽が『またね』と言った位だ。

もし俺の話聞いて、決意が揺らいだのならば、鈴羽は甘すぎる。
敵に同情なんてしても一銭の得にもならない。

だから俺は任務は常に、非情に無情にこなす。

感情なんて邪魔なだけだ。

俺を悪だと、敵だと一度認識したのならそれを貫くべきなのだ。

「これがタイムマシンだよ。これに乗ってあたしはこの時代に来た」
「またも鈴羽からの呼び出しを受けた俺は、一昨日も来たラジ館に
いる。」

人工衛星……タイムマシンの前。

「……動くのか？」

これを使えるのなら、わざわざ一から作る必要が無くなる。

余計な手間と時間が無用になる。

けれど、鈴羽は首を横に振る。

「うっん、動かない。燃料が無いんだ」

ならば、燃料を積みばと提案するが、この時代にはまだその燃料
は無いそうだ。

そして、仮に燃料があっても動かないと思うけどと鈴羽は加える。

「これって未完成品なんだ。父さんがSERENの技術を盗んで独自
に作ってたらしいんだけど、その途中で父さんは殺されて。それを、
あたしは無理やり動かしたんだ。無事に成功してよかったよ」

『ははは……』と乾いた声で笑う。

実験も検証もしていない、未完成のタイムマシン。

失敗すれば、命すら危うい賭けをこいつはおこなった。

俺でも躊躇するだろう無謀な行為。

俺とて命など惜しくは無いが、失敗する危険はおかせない。

失敗すれば可能性を失う。

正しく一世一代の賭け。

そんな賭けに成功して、やっとの思いでこの時代に來れたというのに、こいつは……。

「鈴羽……お前はそれを何故俺に話す。俺は今お前が言った父親を殺し、未来を滅茶苦茶にした張本人なのだろ。それを何故……」
解せない。

まさか本当に俺を信用したとでも言うのか？

「君は椎名まゆりが死なない世界線を目指してる、そうでしょ？」

鈴羽は俺の問いには答えず、逆に問いを返してきた。

「その世界線にたどり着く事が出来たら、あたしの目的も達成出来るんじゃないかって思ってたさ」

未来を変える……それが鈴羽の目的。

加えるなら最良の未来に。

「……俺に協力するという事か？」

「うん、あたしに出来る事なら」

まっすぐな瞳で、曲がらない心を持って俺を見る。

……こいつはどこまで甘く馬鹿なのだ。

俺に協力？

俺を信じる？

嘘と裏切りだけで世界までをも手に入れたという俺を？

自分の両親や友人を殺し、悪の根源だと言った俺を？

「あ、あたしそろそろバイトだから。二日も休んじゃったから店長怒ってたさ」

鈴羽は俺に背を向け、急ぐように階段へ駆けて行った。

残された俺は、タイムマシンに視線を向ける。

使えないとは言え、時空を超えた本物のタイムマシン。

これに燃料を積み、修理なり改良なりをすれば、一から作るより

かは早くこの時代のタイムマシンが出来るかもしれない。

だが、これを利用するには問題もある。

それはいわゆるパラドックス。

Dメールで過去を変えれば今もそれに合わせて改変されるように、世界はパラドックスを許さない。

もしこれを利用しタイムマシンの完成が早まったとすると、鈴羽がこれに乗って過去にやって来ようとする未来が無くなる可能性がある。

そうならば、これがこの時代にある事に矛盾が生じる。

つまり、鈴羽がこれを未来からこの時代に運んで来るのは2036年からだと確定してしまっている。

あらゆる事象が……世界線が収束するのならば、その事実を変えられない。

未来は変わらない。

「……ん？」

タイムマシンについてあれこれと試行錯誤していると、携帯が振動している事に気づいた。

電話だ。

「何の用だ」

携帯を耳に当てると、それだけを言い、相手の反応を待った。

「……確認、しなきゃいけない事があるから」
相変わらずの弱々しい口調。

これについては、元々コミュニケーション能力が不足している奴なので、仕方ないともう諦めてる。

「用件を言え」

俺が急かすと、電話越しの相手であるM4は、間を少し取った後
『タイムマシン』

そう言った。

『岡部くんが作ったって、それを確かめろって指示が……』

M4の弱々しい言葉はつまり、電話レンジの事はバレている、そ

ういう事になる。

時間がいよいよ無くなってきたらしい。

迷っている時間すら無く、一刻も早い決断が迫られる。

……しかし、どこから漏れたのだろうか。

盗聴でもされていたのか、F Bが盗み聞きでもしていたのか、もしくは未来からの指示なのか。

どっちにしろ、指示が確認の段階である事から、向こうの掴んでいる情報はまだ曖昧だと推測出来る。

この人工衛星型のタイムマシンに関する情報も。

ならば、まだ俺にも足掻く手段はある。

けれど、その手段は……。

一瞬、自分の決断に詰まり悩んだ。

そして、すぐに首を振り悩みを拒絶した。

……俺に手段を選んでいる隙など無いのだから。

「詳しい話は直接聞く。すぐにラジ館に来い」

『……了解』

電話を切り、タイムマシンの向こうの景色を見る。

まだ、太陽が昇る昼間だと言うのに……俺には真っ暗な闇が広がっているような感じがした。

8月13日 18時00分

鈴羽が協力すると言ってから二日が経った。

どうすれば、まゆりを救えるか……いくらか話したが結論が出る事はなかった。

電話レンジの検証も完全に手詰まり。

以前紅莉栖も言っていたが、金も設備も何もかもが足りない。時間が刻々と消費されていくだけ。

そして

「M3……FBから新しい任務」

タイムリミット。

「……未来ガジヨット研究所のタイムマシンを奪えって」

「……そうか」

思っていたより早かったが想定内の任務。

俺達がしている事がバレていると分かった時点で、いつかは来ると思っていた。

「バックアップに他のラウンダーも来る。抵抗すれば殺しても構わない。ただ……開発者である牧瀬紅莉栖と橋田至は捕らえてSERENに連行しろと」

監禁でもしてタイムマシンの研究をさせるって事か。

全く、SERENの感情の無さは異常だな。

俺より上だ。

確か、奴らがタイムトラベルの研究をしているのは国家機密だったはず。

裏には300人委員会までついているとか。

そんな機密を、IBN5100を入手するという任務を達成しただけで処分される使い捨ての駒風情が知っている事を奴らが許すとは思えない。

この任務が終われば、FBもM4もバックアップも処分されるだ

ろう。

唯一処分されないとしたら俺ぐらい。

紅莉栖や橋田と共に監禁され、タイムマシンの研究を強制される。そうして良いように利用されて、用済みになった後に処分される。そうなれば、俺の目的は果たせない。

だから　あの手段しかない。

利用されるのではなく、利用する。

その材料が俺にはある。

だが、それをすれば何もかもが終わる。

たどり着くのは鈴羽の言った最悪の未来かもしれない。

それでも……俺には他に手段が残されていなかった。

時刻は午後6時。

そらは黒い雲で覆われ光は感じない。

そんな中、俺はM4を連れある場所へ向かった。

「あれ、岡部。鈴羽と一緒にまゆりの所行ったんじゃない……て、その人誰？」

俺が立つのはラボ。

そこにいるのは紅莉栖と橋田だけ。

鈴羽は邪魔になるだけなので、まゆりの所にいかせた。

「うわ、電車止まってるじゃん。爆破テロとか……」

紅莉栖も橋田も普段通りに振る舞う。

違うのは俺だけだ。

懐から、この空間に異物を取り出す。

黒い金属。

この割りと平和な日本で、普通なら目にする機会の無い 本物の拳銃。

「動くな。動けば撃つ」

暗く低い、感情のまるで無い声を放ちながら、銃を紅莉栖に向ける。

橋田にはM4が。

「な、なんの冗談なの？ そんな玩具なんか使って……」

「玩具では無い、本物だ。これで、ついさっき天王寺を殺してきたところだ」

「な……！」

いつも冷静な紅莉栖が動揺を見せ、言葉を詰まらせる。

自分の知った人間が、同じく自分の知った人間に殺された……そんな冗談みたいな話を、俺は抑揚無く告げる。

「悪い冗談はもう止めて！ 何であんたが店長さんを殺すのよ！」
現実を認めたくない紅莉栖はとうとう叫んだ。

だが、俺の感情は全く揺れない。

「……邪魔だったからだ」

ブラウン管工房の店長であり、俺の上司であったラウンダー。通称FB。

あのままFBを放っておけば、FBの指揮の下、ラボの襲撃が行われ、紅莉栖や橋田と共に俺もSERENに連行されるなんて事態になっていた。

だから俺はFBの命を、その指揮権ごと奪った。

FBの指揮下だったラウンダーは、今俺の指示で動き、その一部には爆破テロの予告をやらせた。

まあ、指示というより脅しだがな。

俺に従わなければ死ぬと。

このまま任務をこなしたところで、SERENや委員会に用済みと処分されるだけだと。

それが嫌なら俺に従い、それすらも嫌ならFB同様に殺すと。

「お前達二人はSERENに連行する」

銃を突きつけたまま、俺は言葉を続ける。

「SERENって、あんた……」

出来るだけ脅し、出来る限り俺を信じないように。

俺に敵意を示し、俺を全く信用しなくなってくれればベストだ。

だから

「そついう事だ」

非情に無情に、銃の引き金を引いた。

大きな発砲音と共に放たれたその弾丸は紅莉栖の耳元を掠めて、

壁にめり込む。

そしてようやく恐怖を目に宿した紅莉栖の意識を刈り取り、気絶させる。

「M4、こいつらを縛っておけ」

同じく橋田を気絶させたM4に手錠と縄を渡す。

運ぶ時に抵抗されないように念には念を。

SERENの人体実験にまで及ぶタイムトラベルの研究の証拠、タイムマシンである電話レンジとその開発者俺を含む三人……SERENを脅すには少々足りないが出方次第では優位に立てる。

部の悪い賭けだとは分かってる。

だが、もう手段は他に無い。

それに、鈴羽の情報からすると俺はまだ死なないらしいからな。

2036年時点で名が残っているのならば、死ぬとしてもまだ先。

この賭けが成功する可能性は高いという訳だ。

向こうとしても、タイムマシン研究の発展の糸口に成り得る電話レンジとそれを作った俺達は惜しいはず。

そこで俺自らが手みやげを持って出向けば、いつでも処分出来る
と高を括り利用しようとするかもしれない。

所詮俺一人ではSERENを脅かす存在には成らないと。

そつ油断してくれれば俺にもやりようがある。

その為には俺は屈してはいけない。

一度屈すればちつぽけな俺なんて終わりだ。殺されるか、監禁され死ぬまで利用される。そうならない為にも屈してはいけない。

連行されるのではなく、自ら出向く

それにSERENに俺を脅す要素は無い。

俺は独りであり仲間などいない。

ロボの連中だって、利用する為だけに近づき、こんなにもあっさり切り捨てる事が出来るのだと……そう見せつける。

俺は目的の為ならなんでもする人間だと言う事は既に知られている。

そんな俺だからこそ、人間関係も自分の都合の為だけの仮初だと思わせられる。

俺に人質は通用しないと。

冷酷に非常に。

その為には紅莉栖達に俺を信用されては困る。

まるで馴れ合いは本当だったかのような錯覚に陥ってしまいそうだから。

誰かと繋がりがあるとそれは弱点になり、足を引っ張る。

だから俺は今まで独りで生きてきたのだ。

手間取ってる時間も無いので、FBから奪った携帯を取り出しSERENの本部に

そう携帯に指を伸ばした時、開けっ放しの扉から何者かが飛び入りM4に襲いかかった。

見覚えのある少女、いつも変わらないビンテージっぽいデザインのジャージ。

三つ編みの髪を揺らしながらM4を地面に叩きつけると手錠をかけ、拳銃を奪った。

「……何しに来た、鈴羽」

俺は乱入者に銃口と冷たい目を向け、向こうも銃と厳しい目を向け返してくる。

「嫌な予感がしたから……そっちこそどういっつもり？ 何でこんな事を……」

鈴羽はこんな場面で、そんな事を言う。
ついこの間まで、殺気と敵意を絶えず向けていた相手に『何で』と。

「何を言ってる、世界をも支配する悪になると言ったのはお前だぞ。嘘と裏切りだけで世界を手に入れたとな。そんな俺を少しでも信用したお前が愚かだったただけだ」

だから敵に同情しても何にもならないんだ。
非情で無情に。

感情など殺して。

「岡部倫太郎！」

冷たい目をする俺に対し、熱く激昂して叫ぶ鈴羽。

今にも引き金を引きそうな勢いだ。

しかし、引き金が引かれることはなく、その先に声が出た。

「こんな事をしても椎名まゆりは救われない。彼女が知ったら悲しむよ、傷つくよ」

鈴羽がするのは説得。

こんな嘘で塗り固められた俺を、まだどうにかできると信じて。

……どこまで甘いんだ、こいつは。

「お前に何が分かる。これしか他に手段は無い。考えた末の結果だ」
「でも……！」

「……どこまで愚かなんだ。お前は何しにこの時代に来た。未来を変えるんだろ？ 俺が憎いんだろ？ だったら変に迷わず、さっさとその引き金を引けばいい。もしかしたら死ぬかもしれんぞ」

俺が2036年まで生きる事が確定しているのならば、ここで俺が死ぬ事はない。

だが、そんな事を言い出したら未来なんて変えれない。

仮に死ななくても、撃てば俺の計画が狂い失敗するかもしれない。
……どっちにしる、鈴羽は俺を撃たなければ止められない。

「あたしは君を止めるよ。その為にあたしは未来から来たんだから！」

ガチャリと音を立てて鈴羽は引き金を引いた。

俺を……俺の足を狙った弾丸が地面にめり込む。

「俺を止めたければ殺してみろ、お前の決意はその程度か！」

足を撃った所で俺は止まらない。

それこそ、心臓を撃たれても、脳を破壊されても俺は動き続けてやる。

それだけの決意が、成さねば成らない事が俺にはある。

「ぐ……！」

銃を構え、俺は鈴羽の腕を撃ち抜く。

痛みで顔を歪ませ、うめき声が聞こえる。

けれど、鈴羽は銃を落とさず、追撃しようとして接近する俺に銃を再び向けた。

距離は縮まったが、またも銃を向け合い停止。

「君こそなんであたしを殺さなかったの？ 今じゃなくても、いくらでも機会はあったはず。それなのに君は、殺すどころかわざわざ逃がした」

「……ただの気まぐれだ」

「そついのを油断っていうんじゃない？」

銃を突きつけ、突きつけられてる状況で鈴羽口を止めない。

鈴羽を遠のかせたのは厄介事になるのを避けたかっただけ。

現にこうして面倒な事になってる。

けれど……どうして殺さなかったのかと問われれば、やはり気まぐれでしかない。

俺は今まで任務で何人も殺してきたが、知り合いを殺したのは実はF B……天王寺が初めてだったりする。

もしかしたら、知り合いを殺す事に躊躇いを覚えていたのかもしれない。

怯えていたのかもしれない。

今ある、例え仮初とは言え、暖かく騒がしい空間を壊す事に。

ラボに集まり、紅莉栖や橋田がああだこうだ言っていたり、メイクインでフェイリスのニヤンニヤンと煩い話を聞いたり、病室でまゆりやるか達と穏やかな時間を過ごしたり、この間みたいに鈴羽と遊園地に行ったりと……そんな生活に昔から憧れ、しがみつきたかったのかもしれない。

独りはもう寂しいと。

そう言えば、M4を……萌郁をラウンダーに誘った時も、気まぐれだって誤魔化したっけ。

だが　それが何だと言う。

「……もう俺は引き返せない。このまま二人を連れSERENに向かう」

「だったら、あたしがそれを止める。君が一人で引き返せないのなら、あたしが引き戻す」

「……やってみる！」

俺は動く。

引き金を引くのではなく、懐に潜り込む様に接近し鳩尾に拳をねじ込む。

敵に同情したって何にもならない……そう言ったのは俺だが、今に思えば俺は鈴羽に同情していたのかもしれない。

未来を変える為に、あらゆるモノを……自分の命すら投げ出し独りで過去に来た少女。

鈴羽よ、お前は言ったな。

未来を変えると、俺を止めると。

世界線は収束し、何をしても結局の結果は変わらない……そんな運命を肯定するような理論をお前は否定すると。

ならばやってみる。

土壇場で浮かんだ第二の賭け。

運命なんて否定できると、お前が証明してみせる。

「でや！」

俺の攻撃でぐらついた鈴羽が足で金的を狙う　　が、そんなモノは喰らわない。

それを喰らうのはせいぜい素人で、俺は素人では無い。蹴りを喰らいはしたものの、ダメージは殆ど無い。

足を上げ、隙を見せた鈴羽の足を掴み、もう片方の軸足を払い、倒す。

そして流れるように銃を向けようとすると　　鈴羽が受身を捨てて、被弾していない方の手で俺の銃を払いのけて、地面に転がした。おかげでトドメはさせなかったが、無防備になった鈴羽は地面に叩きつけられ、もろにダメージを受ける。

足を掴み、鈴羽を地に倒している俺のほうが圧倒的に有利なはずだった。

銃弾を喰らい、地に叩きつけられ、血まで吐いて……だというに、鈴羽の目は、まだ諦めていなくて、血を流す右腕を上げて銃口を俺に向けた。

それは執念とでもいうのだろうか。

絶対に諦めないという意思がその目に宿っている。

だがな

「無駄だ」

俺は躊躇い無く足を折った、

鈍い音がはつきりと聞こえ、鈴羽はまたも顔を歪ませる。

しかし今度は、歯を身に食い込む程に食いしばりうめき声は出さず、構えた銃も揺れはしても落とささない。

そして　　銃声が響き、俺のわき腹が血に染まった。

「あたしは……諦めない」

息切れ切れ、もはや意識を保つ事すら辛いだろうに、その目は未だ衰える兆しを見せない。

運命には絶対に屈しない、未来をこの手で変えてやる……その信念は痛いほどに伝わってくる。

でも、俺は非情でなくてはいけない。無情でいなくてはいけない。

心を揺らがせる資格も余裕も俺には無い。

俺は足を上げ、そして鈴羽の腹に勢い良く、体重を乗せて膝を落とすとした。

肋骨は折れ、内にもダメージを負ったのか血を吐く。

そして俺は、鈴羽の足から手を放し、声も出さず事が出来ず口から血を零す鈴羽から拳銃を奪う。

もう限界のはずなのに、それでも銃を掴む力は強く、少し手間取った。

「……残念だったな。お前はで俺を止める事は出来なかった。わざわざ過去まで来て、無駄足だったな」

第二の賭けは失敗に終わった。

鈴羽は未来を変えられず、運命に屈した。

俺がトドメを刺そうと引き金を引く指に力を込めた時……鈴羽は笑った。

「無駄じゃ……ないよ」

鈴羽は足が折れ、肋骨も折れ、血を吐き、ぼろぼろになっても尚諦めの意思を微塵も感じさせない目で俺をみ、向けられている銃無視して身体を動かさそうとする。

こんな絶体絶命の状況でも諦めず、この少女は運命に抗い続けた。

「……さらばだ、鈴羽」

そんな少女の目を見つめ返す事が出来なかった俺は、銃を彼女の頭に突き付け 引いた。

乾いた銃声がラボに響き、鈴羽は息を引き取った。

人なぞ、今まで何人も殺してきたはずなのに……今回はいつもと感覚が違って感じた。

罪悪感だろうか、後悔だろうか、それとも虚無感だろうか。

その違和感の正体は俺には分からなかった。

だが、何故だか目が熱かった。

涙はとうの昔に枯れ果てた、だから雫は落ちない。

ただひたすらに熱くなっただけだった。

「……これで俺にはもう道は無くなった」

当初の予定通り、俺は計画を実行する。

目的の為には手段を選ばず、自分すら殺し、独りで。

その為なら、鈴羽の言う世界の悪にだってなつてやる。

過去を……未来を変える為に、俺は今を犠牲にする。

まゆりを救えるのならだってやってやる。

岡部倫太郎という人間はもう死んだのだ。

ここにいるのはもう 鳳凰院凶真だ

9月27日 17時50分

あれから気がつけば26年が経過し、時は2036年となっていた。

俺にとってはひどく長く感じた26年間だった。

紅莉栖も橋田も萌郁も皆死に、世界の有り様も大きく変わった。

かつてジョン・タイターが予見した未来が忌避する事も叶わず訪れたのだ。

……まあ、こんな世の中にした根源でもある俺には嘆く資格など無いのは百も承知だ。

あの後、つまりラボを襲撃した後、俺は紅莉栖達をSERNに連行し、タイムマシンの研究をするように脅した。

家族や友人、人質などいくらでもいる。

紅莉栖の指摘した、金も頭脳も設備もSERN程揃っている所は無。

加えて、人工衛星型のタイムマシンの解析もさせる事で、研究は加速した。

その一方で俺は功績と脅しが功を征し、それなりの地位を手に入れていた。

SERNの治安部隊となったラウンダーのトップ。

だが、トップと言っても、ラウンダーである限り使い捨ての駒である事には変わりはなく、用済みになれば問答無用で処分される。

だから一刻も早く完成を急いだが……世の中そうそう思い通りにはいかない。まるで運命とやらが俺を陥れようとしているかの様に。

各地で起こっていた戦争紛争が悪化し、あの比較的平和だった日本すらも巻き込み、世界のどこもが争いで満ちていた。

そしてそれはSERNにも影響を及ぼし、研究の停止が危ぶまれる事態にまでなっていた。

一度停止されればいつ再開するかも分からなかった。

だから悠長に待っている時間など無い俺はそうなる事を危惧し戦争を終わらせた。

……支配という形で。

さすがにそんな事は簡単には、ましてや単独では出来るはずがない。

なので利用出来る者は利用しきると俺は世界の支配をSERNに、そしてその裏に存在する300人委員会に提案した。

すると、驚く程にその計画は通り、表向きの責任者は俺となった。元々奴らは時空を支配する事を企んでいた、だからこそ俺の案を呑んだ。

……責任を全て押しつけて。

責任者とは聞こえが言いが、実質の権力は俺には与えられず、権力も利益は全てSERNと300人のモノとなる。

都合が悪くなれば俺を処分すればいいだけだと、俺を名ばかりの責任者にした。

300人委員会の肩書きまで背負わされたが、実際には300人委員会でもなんでも無い俺には何の力も与えられていなかった。

そんな奴らの思惑を知りながらも、俺は世界の支配に取り組んだ。逆らえば滅ぼすと全てを脅し。

その為に俺は、幾度もDメールを送り、何十、何百、何千と数え切れない位の世界線を跨いだ。

失敗すれば、次は上手くいくように過去の自分に決定を託し、やがては独自に研究を進め改変後の世界線の記憶を思いだす事をも可能とした。

通常世界線を跨いで記憶を継続する事は有り得ない。

だが、俺は例外であり、常人なら気が狂う程の数の世界線の記憶を、とつくの昔に気など狂い果てた俺は所有し利用した。

それにより、SERNや300人委員会の裏をかき、奴らが考えていたよりも早く、完全な管理社会とまではいかないが、世界の

あらゆる動きをコントロール出来るまでになった。

そして長い間続いた戦争が終わった……その事実には歓喜する者も一部いたが、ほとんどがそうではなく、その戦争を力づくで終わらした俺を恐怖し、今までのいがみ合っていた国同士が協力までして排除しようという動きすらあった。

そして、全て潰した。

要するに戦争は終わっても平和など来ず、争いは延々と続いた。拳げ句は核を使った馬鹿までいた。

……もつとも、すぐに過去を改変しその張本人どもは全て殺した
が。

そんなこんながあり、SERNのタイムマシンが完成したのは結局あらかじめ決まっていた2034年。

そしてタイムマシンが完成するやいなや紅莉栖は殺された。

それが奴らのやり方であり俺自身もやってきた方法。

そうして世界を支配した俺は、誰からも疎まれ、俺自身も命を狙われ続けている。

しかも俺を都合良く利用しようとしていたSERNや委員会も、タイムマシンを持ってても予測不能で当初の予定を外れて実質的にも世界を支配している俺をやっかみ処分しようという動きもある。

……まあ、それは上層部の一部であり大概は恐れ媚びるがな。

何故なら今まで刃向かって来た者は皆滅ぼされているのだから。けれど、そんな足掻きもそろそろ限界に達しようとしていた。

毎日のように命を狙われ、時には死にかけた。

運命が俺を殺そうとしているかのように執拗に。

俺にはもう時間が無い。

だが、そう言いながらも俺はタイムマシンを使おうとしない。

二年も前に完成したと言っのに関わらず。

何故過去へ跳ばなかったのか……その問いに対する答えを、この2年、いや26年の間考え悩み、そして結論を出した。

それは……俺では未来を変えられない。

そんな身も蓋も無い答え。

逃げて逃げて、そして今も逃げ続けている俺に無理だと。

世界の支配者だとか独裁者だとか化け物だとか言われても、所詮俺はちっぽけで弱い人間だ。

運命を否定し支配する事は叶わず、逆に殺されようとしている。

……だが、俺は諦めた訳じゃない。

俺は、未来を希望を……全てをある人物に託す事に決めたのだ。

その為に今まで生き延びてきた。

「懐かしいな、全く変わってない」

俺は足を引きずり、わき腹からは血を流しながらその人物に近づく。

「……誰？ ていうか、凄い怪我じゃん！」

少女は心配して俺に駆け寄りうとし、俺はそれを『大丈夫だ』と言って止めた。

「でも応急処置ぐらいしないと……」

困った顔で心配そうに俺を見てくる。

甘くてお人好しで……本当に変わっていない。

「俺なんか結構っている時間はあるのか？ ラウンダーがすぐそこまで来ているぞ」

「え、それ本当！？ じゃあ、その傷って……」

「だから俺に構うなと言ってるだろ。とっと自分の目的を果たせ」
目で睨みを効かせて急かさせる。

もたもたしている時間は刹那たりとも無いのだ。

「ねえ、もしかしてどこかであつた事ある？」

だと言つに、こいつはまだ俺の前にいる。

「……ああ、ずっと昔にな。お前からしたら過去になるのか」

だから、さつさと疑問を納得させる。

『それって……』と驚いているが気にしている時間は本当に無い。

さつさと

「伏せる！」

俺が叫ぶと少女はしゃがみ込み、その真上を何かが掠めた。
おそらく銃弾。

何発かが放たれ、その内の一つ。

その他は

「おじさん！」

馬鹿みたいに両手を大の字に広げ仁王立ちで立つ俺の背中に埋まる。

「だから……さっさとしろと言うのだ……」

本来なら俺はこいつと接触する事は無い。

こいつは俺の事をただ恨み、殺意を抱いて過去へと跳んでいく。

その命を賭け、後先考えず。

「……分かった。あたし行くよ」

少し考え、躊躇った後、少女は銀の……人工衛星に似たモノに向かう。

そして、やっと言ったかと思うと立ち止まり

「君の名前を教えて」

そう言った。

「そんな事は……どうでもいいだろ」

知ったところで何にもならない。

なにより、俺はこいつが最も殺意を向ける存在。

そんな名を名乗っても話をややこしくするだけだ。

「だが、その代わり……頼みを聞いてくれ」

目は朦朧としてき、すでに立っているのも辛い。

だが、まだ俺は倒れる訳にはいかない。

それでは全てが無駄になる。

「……頼み？」

「ああ、まゆりを……椎名まゆりを救ってくれ」

真剣な眼差しで少女は俺を見つめる。

「過去を……そして未来を変えてくれ。こんな……」

そついいかけた所で、俺の脚は限界を向かえ地に倒れこんだ。

そして、またも駆け寄ろうとする少女を俺は目で止めた。
さっさと行けと、そう訴える。

曖昧な意識の中、少女が何かを言った後、足音が遠のいていくのが分かった。

銀の躯体が光を放ち、甲高いアラームが鳴る。

人工衛星……いや、タイムマシンとその周囲の空間が、ぐにやりと歪んだように見えた。

機体を包み込むように、光の繭が現れて。

その光で俺までもが包まれ溶け込んでいきそうな気さえた。

俺は以前にもこれと同じモノを見た。

2010年、今から26年前。

それにあいつは乗ってきた。

そのタイムマシンを俺は回収し、その結果SERENのタイムマシンの完成時期は変らなかったが、このタイムマシンには変化があった。

研究速度が本来より速かった為に成せた事。

未完なものには違いないが、過去へは確実に行ける。

命を賭けるまでもなく確実に、そして燃料も十分につまれているはず……以前とは状況が同じようで違う。

輝く粒子を俺眺めながら俺は、希望を託した少女を見送る。

俺には変えられなかった未来を変えてくれ。

俺には否定できなかった運命を否定してくれ。

まゆりを……そして紅莉栖達、皆が笑って生きていられる、そんな世界線に。

「がんば……れ、鈴羽……」

光の繭が消えていくのを確認すると、俺は 意識を手放した。

9月27日 17時50分(後書き)

これで鈴羽ルートも終わりです。

そして、この話で一旦『完結』扱いにしようと思います。

ですが、本編の後日談とか、萌郁ルートとか、もし 世界線のオカリンが 世界線に紛れ込んだらとか色々やりたい事もあるので、ひよっこり復活するかもしれません。

その時は、またよろしく願います。

8月11日 11時30分(前書き)

Chapter 05の終わりから分岐するIFルートです。

矛盾や、独自解釈が多くなる可能性があります。

拙い文ですがよろしくお願いします。

8月11日 11時30分

あれから四苦八苦しながらも電話レンジの解析を続けているが成果は無し。

何も分からないまま3日が経ってしまっていた。

過去改変も起きた様子は無い。

このまま、ただ時間だけが経過し、何も得られぬまま終わってしまふのだろうか。

……いや、そんな事にはならない。させない。

俺が認めない。

どんな手段を使おうとも、未来を変えると決めたのだから。

その瞬間を掴み取るまで諦めないと誓ったのだから。

例えその結果、俺が不幸になろうとも。

「……しかし、具体的にはどうするか」

秋葉原の街を宛もなくさ迷う俺は、雑踏の中独り言を呟く。

勿論誰も聞いてやいないし、そもそも俺なんかの言葉に興味すら無いだろうが。

所詮俺は、数多にいる人間の一人に過ぎず、ちつぽけな存在でしかないのだから。

俺が世界の意志とやらに喧嘩を売った所で、世界は笑いすらせず気にも止めないだろう。

それでも、俺は抗うと決めたのだ。

運命だなんて言葉を否定してみせると。

俺の方こそ、世界を嘲笑ってやると。

まゆりを助けるのだと。

その為に俺は、紅莉栖達を利用し、今はあのSERENをも利用しようとして画策している。

全てを欺き、全てを裏切り。

……と言っても、今俺に出来る事は限られているのだが。

一つは、ジョン・タイターとそのタイムマシンの搜索。

これに関しては、あらかた目星がついており、あとは裏付けだけである。

二つは、電話レンジの解析。

だが、これは先程述べた様に光明がこれっぽっちも見えない状況。今日はフェイリスがラボに来ているらしいが、何も変わりはいらないだろう。

いつも通り徒労に終わるだけ。

で、三つはSERENを利用する為の下準備。

これに関する今の武器はハッキングで得た極秘情報と電話レンジの存在のみ。

せめて、何人か、最低でも数十人程裏切り者をラウンダー内部に作れば動きやすくなるのだが、それにはFBをどうにかしなくてはならず、FBに手を出してしまえばSERENへの反逆宣言をするようなもの。

慎重にタイミングを見計らわなくてはならない。

つまり、結論から言うと俺がする事は今まで通り。

いつSERENが俺を裏切り者と認識し処罰してくるか分からない現状では、この停滞感がもどかしく、焦るばかりだった。

「……こんな所であれこれ考えも仕方ないか」

気がつけば、大勢が行き交う中、一人立ち止まっていた。

俺は再び足を動かし、とりあえず腹も減ってきたので昼飯でも食べるかとするかと店を探す。

今は生憎フェイリスがいないのでメイクインに行っても意味はない。

フェイリスがいないのに、あんなニヤンニヤン煩い空間に好んで行く意味が見いだせない。

さて、ならば何しよう。

ラーメンか、カレーか、それとも手軽にケバブにでもするか。

「まあ、何でも」

何でもいいか。

そんな何気ない言葉を呟こうとした瞬間、激しい目眩が俺を襲った。

つい最近二度味わった感覚。

いや、それ以上。

視界が歪み、世界を見失った様な錯覚。

何の前触れも無く訪れたソレに、俺は足を止め、目を覆う様に手の平を顔に当てた。

そして、目眩が収まり、目を開く。

「なんだ……」

視界に飛び込むのは秋葉原の街。

つい今の今まで見ていた景色に違和感。

何かが変わり、何が違っている気がする。

……そうだ。さっきの目眩は、世界線が変動した反応。

つまり、この違和感も世界線が変わった事によって生じたものだ。今まで何度やっても起きず、大して期待してなかった現象が不意打ちでやって来た。

誰かがDメールを送り過去を改変したのだろうか。

察するに、フェイリス辺りだろうが……それを知る術は俺には無い。

どんな内容のDメールを送ったのかさえ。

何故なら世界線が変われば、前の世界線で何をしたのかなんて覚えていないのだから。

過去が変われば今も変わる。

唯一変わらないのは、俺の記憶のみ。

理由はまだ分からないが、改変前の記憶がある事は間違いなくメリットだ。

そして、改変後の記憶が無い事はデメリット。

些細な事なら問題は無いのだが、改変後の世界線の俺しか知らない重大な秘密などがあった場合、その秘密を俺は知る事が出来ない

のだ。

もういっそ、改変前と改変後の記憶両方があれば便利なのだがな。

「しかし……」

世界線が変わった事で何かが変わった。

その事は何となく感じているのだが、その肝心の何かが何なのか分からない。

今一度、視線を秋葉原中に泳がせ　そして気づいた。

違和感の正体。

それは一言で言うと、雰囲気だ。

この秋葉原に漂う空気が明らかに違っているのだ。

どこかレトロな感じ。

周囲を見渡しても、ほとんどが男で、メイドの格好をした女なんて見当たらない。

それどころか、いわゆる萌え系の店すら探しても無い。

この街を混沌とさせていた『萌え』が　きれいさっぱり消えているのだ。

かつてあった電気街としての秋葉原に戻った……そんな感じに思える。

確認してみたが、あのメイクインすら無かった。

消えていた。

これが今回の世界線が変わった影響。

今までに比べると、明らか過ぎるまでの大きな変化。

一体、どんなDメールを送ればこんな風に改変されるというのだろうか。

……しかし、これ程の大規模な改変だと、他にも変化がありそう
だ。

その点も探してみる必要がある。

一応、軽く確認しておく事にしよう。

そう、俺はポケットから携帯を取り出し、メールを

「……なんだこれは」

メールを送ろうとアドレス帳を開いたと同時に、指が止まった。俺の頭にクエスチョンマークが浮かぶ。それは疑問というより疑惑に近い。

そして困惑にも。

何故なら、アドレス帳に登録されている人物の半分近くが理解出来ないものにすり変わっていたのだから。

助手やら、閃光の指圧師やら、ダルやら。

あだ名なのかもしれないが、誰の事かさっぱりである。

少なくとも、俺はこんな名前を登録した記憶は無い。

おそらく改変後の、この世界線の俺の仕業なのだろうが……何故こんな訳の分からない事をしているのか見当もつかない。

自分の行動だというのに理解出来ないのだ。

世界線移動の影響。

改変後の記憶が無い事による弊害。

携帯一つでさっそくそれが露呈した。

もしかしたら、俺が思っている以上に今回の改変による余波は大きいかもしれない。

問題がこれからも発覚していく可能性は大いにある。

……だが、同時にこれはチャンスである可能性もある。

世界線が大きく変わった事で、俺を取り巻く環境にも変化が生じている。

俺は再度アドレス帳の一覧に目を通す。

数える程しか無いその名簿の中に、明らかにおかしな名前があった。

ジョン・タイター。

俺はこいつとアドレスを交換をした記憶は無い。

ネット上での交流も一度も無い。

なのに、今の俺の携帯には当然の様にその名前が登録されている。

……まあ、他にま奇妙な名前がいくつかあるがな。

現状を把握する為にあいつと連絡をとろうと思ったが、それより

まずメールの履歴から見た方が良さそうだ。

と、言う訳で受信メールから目を通して見たが、バイト戦士に鳳凰院凶真と訳の分からないメールが続いている。が、その鳳凰院凶真という奴から来ているメールは三つに不自然に別れており、それぞれが六文字以下。

Dメールと考えるのが妥当なメールだ。

勿論、俺はこんなメールに見覚えはない。

それどころか他の普通のメールにもだ。

先の二回の改変ではこんな事態は起きなかった。

何がどう変わればこんな事に

携帯と睨み合いながら思索していると、視界にふと見覚えのある人影が映った。

俺はそれに気づき、携帯を閉じるとその人物に向かって歩き出した。

「こんな所で何をしている」

すぐ近くまで寄り、そう問いかけたが 無反応。

顔も上げようとせず手元の携帯を凝視しブツブツと何かを呟いている。

目にはクマがあり、髪もほつれておりいつもと様子が違っている。

「おい、聞いているのかM4」

反応が無いので再度呼びかけてみると、M4はビクツツと体を震わせ、勢い良く焦る様にこちらに顔を向けて来た。

やはりいつもと様子が違う。

「……………どうしてそれを？」

切羽詰っているというか、混乱しているというか、取り敢えず取り乱していた。

弱々しく、震えた、迷いのある声。

昨日会った時はいつも通りだったというのに、いきなりどうしたんだ……と、頭を悩ませたが、これも世界線を移動した事による影響かもしれないと一端この疑問は置いておく事にした。

それより、何がどうしてなのかが俺には理解が出来ない。

『それ』が何かも分からない。

……と、言動を分析しようと試みていると、M4はまた携帯に視線を戻し操作をし始めた。

そして間もなく着信。

送り主は閃光の指圧師。

内容は『それはFBと私しか知らないはず』だった。

……もしかして、閃光の指圧師とはM4の事なのか？

タイミングからするとピッタリなのだが、もしそうだとすると何故目の前にいるというのに言葉でなくメールなのか、そもそも何が伝えたいのかが分からない。

「お前は一体何が言いたいんだ」

俺は問いかけるが、M4はうつむき無言。

で、また着信。

『どうして岡部君が私のコードネームを知ってるの？』

携帯を開き内容を確認すると、いよいよM4の言動の意図が読めなくなってきた。

「お前はさつきから何を訳の分からない事を……そのコードネームを付けたのは俺なのだから知っていて当然だろうが。そもそも何故メールで言葉を伝える？ 言いたい事があるなら口を開けと前に言っただろ、忘れたか？」

M4は以前口を開かず……いや、よく見ると口を小刻みに震わしている。

何か言いたいけど声が出ない、それとも声を出すのが怖い……そんな感じ。

目は大きく身開けられ、俺を見つめたまま静止。

その瞳に映るのは動揺。

こいつとの付き合いはもう四年近くになるが、今のこいつは何をしたいのかさっぱりだ。

要領を得ない。

M4は硬直が解けると、再び携帯に視線を落とし、何かを打ち込む。

そして手に握る携帯が何度も震え、確認すると全て閃光の指圧師からだった。

「だから、メールではなく直接」

「あれー、萌郁さんだあ」

M4に口で話せと再び訴えかけようとしていた最中、俺の耳は聞き覚えのある声を捕らえた。

毎日の様に耳にし、そしてこんな所で聞くはずの無い声。

俺は言葉を失い、無意識に瞬きを止め、有無を言わず振り向いた。

「もうオカリン、勝手にいなくなっちゃ駄目だよ。捜したんだよお」
中学生にも見えるあどけなさの残る顔つき。

状況が呑み込めず呆然としている俺とは裏腹に、明るく能天気な声と素振り。

水色を基調とした服に身を包み、頭には帽子。

全てを犠牲にしてまでも助けたかった少女が、まゆりが
目の
前に確かにいた。

8月11日 12時05分

「何で……まゆりがここにいる？」

有り得なかった。

いや、実際には有り得ない訳でも無いが、俺は有り得ないと思っ
ていた。

「何でって、オカリンがいなくなっちゃったからあちこち捜してた
んだよ。そしたら萌郁さんとお話してるのを見つけたんだあ」

明るく、笑顔で語る少女の振る舞いには弱弱しさを感じなかった。
普段は気丈に振舞っていても、どうしても隠しきれない病人特有
の弱さがあったというのに、それが今は感じられない。

医者からも外出はしないように言われていた。

いつ何が起きるか分からず危険だからと。

少なくとも、病院を出るには外出許可が必要なはずだった。

……だと言うのに、まゆりは平然と、当たり前前の様にそこにいた。
「外に出て……いいの？」

俺がそう尋ねても、まゆりは首を傾げて、何を言ってるのと同じ
らを見る。

「病院にいらなくて大乘なのか？」

質問を重ね、まゆりは更に首をかしげる。

「病院？ どうして？」

まるで病院という言葉が出てきた事が理解できてない口ぶり。

何年も世話になり、最近は入院しぱっとなしだった病院。

まゆりにとっては切っても切れない身近な存在はずだ。

なのに、まゆりはキョトンとしている。

まるで

「まさか……病気じゃ、ないのか？」

そう、まさかだった。

長年に渡りまゆりを苦しめ、死に招こうとしていたはずの病気。

それが突然消えるなんて都合のいい事が起きるなんて有り得ない。そう思っていた。

だから、まさかだ。

「なに当たり前の事言ってるの？ まゆしいは元気だよ？」

俺がまるで見当外れのおかしな事を言っているかのようなまゆりのリアクション。

当然だと言わんばかりに肯定した有り得ないはずの『まさか』。

「はは……」

こちらを見つめるまゆりを前に俺は笑っていた。

想定外すぎる展開。

予想だにしていなかった現実。

身体は歓喜からか自然と震えている。

笑うだなんて行為、最後にしたのはいつだったのだろうか。

もう何年も、笑っていないかった。

笑ってなんていられなかった。

感情を殺し、目的の為に何でもしてきた。

無常で非情。

そんな生き方をして、俺はここまで来た。

そして、これからもそうして生き、孤独に死んでいくのだろうか……

…そう思っていた。

何をしてでもまゆりを救う。

そう掲げて、周囲を裏切り、SERENに刃向かおうとしていたこの矢先だ。

俺の意図せぬ世界線移動により、まゆりを死に至らしめようとしていた病気が、最初からそんなモノは無かったと言う様に消えていた。

目の前には、明るく元気な少女。

サプライズにも程がある。

こんな事があるのかと。

肩透かし……そんな感じに似たような感覚である。

本当にこれは現実なのかと、夢ではないのかと、ほっぺたをおもむろに引つ張つてみたりと色々やっている。

そしてまた笑う。

笑わずにはいられない。

「どうしたの、オカリン？」

挙動不審な俺を見てまゆりがそう問う。

そのオカリンというのは俺の事だろう。

昔、幼い頃にはそんな風に呼ばれていた気がする。

懐かしい。

昔に戻つたような錯覚を覚えてくる。

「くく、何でもない。ちよっとサプライズを喰らっただけだ」

俺は今どんな顔をしているのだろうか。

鏡が無いので確認は出来ないが、おそらくこれもまた十年ぐらいしていない表情だろう。

先程から携帯が着信を告げるように震えているが、そんな事はどうでもいいと気にも留めない。

ただただ笑う。

今まで殺し続けてきた、溜め込み続けてきた感情の分だけ。

周囲の視線も気にはならない。

ああ、こんな都合の良い展開が有っていいのだろうか。

「……タイムリープマシン？」

ひとしきり笑い、落ち着いた俺は街を歩きながら、ここで何をしていたのかを尋ねた。

すると、電話レンジをタイムリープ出来る装置に改造する為のパーツを買いにラジオセンターへ向かう所だった、とまゆりが教えて

くれた。

俺はその途中で突然いなくなったそうだ。

「凄いよねー」

怪訝に思う俺を余所に、まゆりは能天気にもそう言う。

話から察するに、そのタイムリープの案は俺が思いつき、それを聞いた紅莉栖が出来ると言って、今は改造準備の最中。

世界線が変わった事で色々と変化が起きている。

まゆりに秋葉原、俺の人間関係。

すぐに分かった違いだけでそれぐらい。

M4の拳動不審もこれに加えられるかもしれない。あまりにも何度もメールを送ってくるので、携帯の電源を切ってしまった。

時間が経てば違いはさらに出てくるだろう。

そして、今まさに追加されるところ。

過去へメールを送れる原理不明の電話レンジ、それがどういう訳かタイムリープなんて機能を備えようとしていた。

少し前なら、ついさっきまでの俺なら、それは確実に良い知らせだった。

これで目的に一步近づいたと。

だが、今の俺にとっては悪い知らせ。

既に目的を達してしまってる今、タイムマシンなんて不要、そして邪魔でしかないのだから。

「ああ、おそらく人類史上初の試みだ。実現すれば世界中が驚愕する事になるだろう」

くくく……と、余裕そうに、尊大な態度でまゆりに返す。

俺の胸をざわつかせる不安をまゆりは悟らせたくはない。

無用な心配はさせたくない。

だから平気なふりをする。

実際にタイムリープマシンなどを開発してまったなら、世間に公表する前にSERENに奪われる可能性が高すぎる。

あいつらの情報網を舐めてはいけないのだから。

いつ、どこで情報が漏れるかも分からない……というより、研究をしているラボの真下にラウンダーがいるのだから、ほぼ確実にSERNに漏れる。

そうだったら、せつかくあるこの平和は冗談みたいに崩れさってしまっ。

「さて、さつさと調達を済ませラボに戻るか」

ラジオセンターに着くと、ポケットから買うべきパーツ一覧が書かれたメモを取りだし進む。

その後ろをまゆりがついてくる。

微笑ましく、懐かしい光景。

こんな平和がずっと続けばいい……そう不安を胸に秘めながらも思わずにはいられなかった。

8月11日 13時00分

パーツを一通り買い終えると、俺は一旦ラボへと向かう。まゆりは友達に用があるとのこと、駅前で別れた。

聞いた事の無い名前だったが、この世界線のまゆりは案外交友網が広いのかもしれない。

「しかし、ここは何も変化がないな」
目の前にはラボのある古ビル。

一階ではブラウン管工房が店を構えており、覗いてみると奥には店長がいた。

鈴羽は見当たらない。

単に今いないだけなのか、バイトをしていないのか、そもそも存在しないのか。

色々と確かめる要素は多そうだ。

「あ……」

階段を登り、ラボのドアを開くと、PCの前に座っていた紅莉栖がこちらを見て、その後慌ただしくキーボードやマウスを弄りだした。

「ちょ、ちょっと。入ってくる時はノックぐらいしてよっ」
そして突っかかってくる。

「俺は毎度毎度ラボに入る度にノックをせねばいけないのか？」

「そ、それがマナーじゃない」

「だが、お前もノックせずに入ってくるだろうが」

「う……」

紅莉栖は言葉を詰まらせる。

普段なら言い返してきそうなところなのだが、何故か冷静さを失っている。

焦っているというか、取り乱している感じ。

何か隠しているのか？

「そんな事より！ パーツちゃんと買ってきて来たんでしょね！」

「ああ、メモ通りにな」

不自然な話題転換だったが、あえて合わす事にした。

元より紅莉栖の隠し事には興味はない。

インターネットをしていたようなので、おそらくプライベートな話。

俺には関係ない。

そんな事より、タイムリープマシンの事の方が重要だ。

「紅莉栖、タイムリープの原理についてももう一度説明してくれないか、念の為に」

まゆり情報だと昨日説明していたらしいが、当のまゆりが理解出来ていなかった為、こうして紅莉栖に聞くしかない。

昨日説明したでしょ、なんてうんざりとされるかもしれないが、俺にとっては初めてなのだ。

我慢して欲しい……って、なんだ？

紅莉栖が鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をしている。

「……今、紅莉栖って言った？」

「言ったが、それがどうした」

「どうしたって、いつも助手だとかクリスティーナとかふざけた呼び方で、まともに名前を呼んだことなかったじゃない。だから、ちよっと驚いただけよ」

ああ、なるほど。

アドレス帳にあった助手とは紅莉栖の事か。

あだ名かなにかなのだろうが、どうして助手なのかが分からない。クリスティーナに関しては、ある程度察せるが、少々滑ってる感がある。

だが、呼び方しかり、紅莉栖の俺に対する対応といい、前よりフレンドリーな気がする。

少なくとも、壁を感じない。

俺が意図的に作っていた壁が。

「すまないな、呼び方に違和感があるなら直そう。助手、それともクリステイーナの方がいいか？」

「なっ、まともになったのかと思えば……」

軽口にて、そして俺にとってはまじめな言葉を返すと、紅莉栖は顔から熱気を放った後、ぶつぶつと呟く。

反応しないで、これからの対応を考えようとしたのだが……アドレス帳に従って助手にしておくか。

それに、あだ名で人を呼ぶなど、記憶に無いくらいに久しぶりだからな。

……コードネームなら腐る程あるが。

ちなみに、まゆりの会話からダルが橋田の事である事も判明している。

高校からの友人で、大学も一緒だとか。

フェイリスや、るか達に関してはまだ聞き出せていないが、あまり突っ込みすぎると不審に思われる。

まゆりは、ああ見えて勘の良い奴だから。

「まあ今はそんな事は置いて、俺の要求に応えて欲しいのだがな」

「……あんたってホント、自己中心的よね」

「ふん、お前がそう思うのならそうなのだろう」

それから紅莉栖は文句を言いながらも、タイムリープマシンについて説明をした。

紅莉栖にとっては二度目、俺にとっては一度目の解説。

それによると、この世界線では電話レンジの原理についておおよその解が出ているらしい。

起動条件は、下のブラウン管工房にある42型ブラウン管が点灯している事。

なんでも、これがリフターの代わりにしているとか。

そして、電子が注入され、カー・ブラックホールによるリング特異点を携帯の電波が過去へと送られる。

……と、電話レンジの仕組みにある程度予測がついたのはいいが、

送れるのは依然36バイトのデータのみ。

これでは、Dメールを発展を進展させる事も、ましてや物理的タイムトラベルなんて不可能。

そう、諦めようとしていたところで、紅莉栖がタイムリープの案を出した訳だ。

紅莉栖の研究を利用して記憶をデータ化し、更には橋田の『LHCとミニブラックホール実験、ラボのPCから使えるようになったお』の発言を受け、取りだした記憶データをLHCのブラックホールで36バイトに超圧縮する事に。

そうする事で、Dメールと同じ要領で電話レンジで記憶を過去に送れる。

後は携帯を通じて過去の被験者の脳に記憶をぶち込むだけ……というのが、紅莉栖のあげたタイムリープらしい。

かなり滅茶苦茶である。

そんな方法で本当にタイムリープが出来るのかも疑わしいし、なによりも……LHCを間借？

そんな事をしてただで済むとは思えない。

例え、今すぐにはばれなくても、いずれ分かる。

いや、この見計らったかのようなタイミングでLHCが起動している時点ではれている可能性が考えられる。

もしSERNがタイムマシンを開発したのならば、Dメールの様なモノを用いて未来から指令をだしているかもしれない。

それどころか、タイムリーパーやタイムトラベラーがそこに紛れ込んでいないとも言いきれない。

SERNに手を出す事は、宣戦布告にも等しく、勝つか負けるしかないのだ。

そして、今まで多くの人間が、組織がことごとく破れてきた。

前の世界線では、全てを投げだし、SERNに反逆しようとしていたが、今は投げ出す事なんて出来ない。

まゆりを巻き込むことは出来ない。

ならば　今すぐタイムリープマシンの開発を止めるべきか？

いや、タイムリープが出来なくても、Dメールが送れるだけでSERNにとってこの電話レンジは価値がある。

もし、すでにバれているのならば、やり直しが出来る可能性を生むタイムリープマシンは有用だ。

とりあえずタイムリープマシンを作り、それが仇となるなら自らタイムリープし、開発を止めればいい。

それこそ、電話レンジの開発すら無かった事にすればSERNに狙われる要素は無くなる。

「なるほどな。ならばさっさと完成させてしまおう。作業の準備を始める」

「……ホント上から目線だな、あんたは」
文句を言いながらも紅莉栖は作業に移る。

それは俺と途中から加わった橋田も手伝いながら暗くなっても続いた。

8月11日 21時50分

作業を一旦中断して休憩をとっていると、携帯が振動し、着信を告げた。

まゆりと別れた後に電源を入れたのだが、受信ボックスを埋め尽くす未開封の閃光の指圧師からのメールにうんざりした。

異常な量。

最初の方など秒刻みで送られており、電源を入れてラボに着くまでも十回は着信した。

あまりにも量が多いので、後回しにしておいたのだが……さすがに鬱陶しい。

また電源を切ってもいいのだが、それでは根本的解決にならない。M4がこんな異常な行動を取るのは初めてだが、冷静に昼間のやり取りを思い出してみると、M4の記憶と俺の記憶にはズレがあるように感じた。

これもおそらく世界線の移動による変化なのだろう。

「どうかしたのー、オカリン。携帯とにらめっこして」
ソファに座って縫い物をしているまゆりが、携帯を見つめながら突っ立つ俺を心配する。

「いや、何でもない。ちょっと考え事をしていただけだ」

まゆりは夕方に戻って来てからは、俺達が作業をしている間も黙々と、服の様なモノを作っていた。

それは何だと尋ねると、コミマのコスと返答。

……これが世界線ギャップか。

まゆりが何を言っているのかさっぱりだった。

「しかし、まゆり。まだ帰らなくていいのか？ もう外も暗いぞ」
既に時計の針は9時を回っており、女子高生が一人で帰るのは少々危険だ。

世の中は荒れているからな、暗くなるとおかしな連中が増える。

まゆりが帰る時は、送っていく必要があるな。

「ん、あのね、まゆしいは今日はここにお泊まりするのです」「ここに泊まるのか？」

まあ、俺もここに泊まっているし、夜道を歩くよりかは安全だろう。

「……そもそも帰ると言っても、まゆりはどこに住んでいるんだ？ 一人暮らしだとしたら余計に心配になる。」

「うん、お父さんとお母さんにもね、そう言っているよー」「えへへ」と、笑いながら明るい口調でそう言う。まるで当たり前のように。

「……お父さんとお母さん、だと？」

「んー？ お父さんとお母さんがどうしたの？」
まゆりは俺の疑問に、困惑に気づいていない。

「……二人は元気なのか？」

「うん、元気だよー」
肯定。

そしてそれは俺の記憶する過去の否定。

まゆりが病気でなく、こうして元気な様に。

秋葉原から萌えが消えた様に。

「……なあ、まゆりが俺の両親に会ったのはいつだ？」

「うーんとね、オカリンのお母さんには今朝会ったけど、お父さんには最近会ってないかも。あ、オカリンのお母さんが偶には帰って来るように伝えてくれて言っていたよ」

「はは、そうか……帰って来いと言っていたのか」
あの母親が。

十年前に死んだはずの母親が。

「まゆり……2000年問題って知ってるか？」
馬鹿げた問いだ。

世界中を混乱させ、今も続く戦争を生んだ元凶。

俺やまゆりの両親を殺し、俺自信の人生をねじ曲げた大惨事。

2000年クラッシュだとか言い方は違っても、あれを知らない者はいない。

いない……はずなのだ。
なのに

「うーん、なんだろう?」

知らない、そう言わなくてもポカンとした表情がそれを主張していた。

「それって騒がれてた割に大した事なかったやつじゃん。何で今更?」

「確か、世界中のコンピュータが誤動作を起こして大変な事になるってやつだったっけ?」

紅莉栖や橋田もだ。

2000年問題という名前は知っているが経験していない、実際には起きていない……そんな反応。

俺からしたら有り得ない反応だ。

そして確信を得る。

この世界線では 2000年問題が起きていない。

ネットで確認もしてみた。

やはりどこも、ただ杞憂だったとしか扱っていない。

実家に電話もしてみた。

十年ぶりなので、まゆりに電話番号を聞いて。

そしたら……当然のように繋がった。

電話越しに聞こえた母親の声、遠くからは父親の声もした。

間違いない。

俺も、まゆりも両親は死んでいない。

俺は2000年を過ぎても東京で、実家で親と共に過ごし、今もまゆりとこうして一緒に生きている。

「くくく、ははは……」

夢みたいで、実に恵まれ世界だ。

笑わずにはいられない。

そして同時に 責めずにはいられない。

2000年問題も起きず、まゆりも死なない。

そんな恵まれた日々を生きながら、どうしてこの世界線の俺はタイムマシンを求め、SERENにハッキングなんかをしかけたんだ。

自ら平穩を手放す自殺行為。

何故、どうして、何の為に……それが今の俺には全く理解出来なかった。

俺の場合は他に手が無かったというのが理由だが、この世界線では違うはず。

おそらくだがラウンダーにすらなっていないだろう。

元々俺がラウンダーになったのは金に困っていたから。

だが、この世界線では両親が健在で養って貰っている。

ならばラウンダーになる理由も必要も無い。

社会の裏で生きる事も無い。

……だというのに、立場はまるで違うにも関わらず、やっている事は同じ。

おそらく何か事情は有るのだろうが、もし好奇心だとかふざけた理由だったならばただの馬鹿だ。

殺したくなる程の馬鹿。

……まあ、そんな事は無いと祈るが。

いくら世界線が違ったとしても俺は俺。

そんな愚かなはずがない……が、平和ぼけという言葉もあるからな、一概には断定できん。

「今度は何よ……」

「またいつもの発作じゃね」

突然笑いだしたかと思えば、深刻そうに考え込む俺を見て、周囲の反応は拳動不審だと心配するでなく、またかとも言うような呆れた感じ。

この世界線では、普段からこんな風だったのだろうか。

非常に悩ましい。

「少しコンビニに行つて来る」

取り敢えず当たり障りのない理由をつけて、ラボを出てみた。

一応コンビニには向かってみるが、この世界線での店の配置が俺の記憶通りとは限らない。

何も買わずに戻れば、怪しまれるかもしれないので少々迷う覚悟が必要そうだ。

……もつとも、コンビニに行くなど、ついでどころか口実でしかないが。

本題は

「……またか」

ポケットの中で何度も振動する携帯。

もつと言えば、その送り主。

コードネームM4、前の世界線では俺の部下だったラウンダーだ。今の俺がラウンダーでないのならば、昼間のM4との会話はかなりまずかつたはずだ。

M4が困惑して当然。

ラウンダーでないのならば、FBやM4というコードネームを知っているのは不自然だ。

そして、それを知ってるのが当然の様に振舞ってたのも。

あの場で、おかしかったのはM4ではなく俺の方だったって訳だ。ならば、どうにかして誤魔化す必要がある。

更に可能ならいくつか情報を引き出したいが……あまり無茶はしない方がいいだろう。

……だが、ここで問題だ。

連絡を取るのならば手っ取り早い手段が電話だ。

一々メールでやり取りをするのは時間がかかるし、煩わしい。

しかし、アドレス帳にM4の電話番号が載っていない事から、この世界線では俺は電話番号を知らない。

一応覚えているから電話をかける事は可能だが、知らないはずの電話番号を知っているのは不自然だ。

ならば、やむを得ない。

ため息をつき、半ば諦めた風に携帯をいじりメールを送る。
そして着信する。

その間、たったの数秒。

どれだけ文章を打つのが速いんだ。

『電話は苦手。メールでお願い』

電話番号を教えてくれと頼んだのだが失敗。

話すのが苦手なのは知っていたが、この世界では極端に会話を嫌うらしい。

これでは、ラウンダーとしての業務にも支障が出ると思うが……。『なら簡潔に纏める。M4とは俺がお前に勝手に付けたあだ名のよくなものだったのだが、もしかしたら本当にそう呼ばれていたのか？』

そう打ち込んだ文章を改めて見直し、しばし躊躇した後に送信ボタンを押す。

嘘とも呼べないまでの、酷い言い訳。

そんな偶然あるはずない。

名前や容姿などの特徴から取ったのならまだしも、M4だなんていかにもコードネームらしいあだ名をどうやったら偶然勝手につけられるのだ……と、心の中でうたうた言っている間に再び着信。

『そうだったんだ。いきなりその名前で呼ばれたからびっくりだよ。

こんな偶然あるんだね』

……おいおい、マジか。

こいつは何年ラウンダーやってるんだ？

こんなあからさまな言い訳を普通信じるか？

それとも、これは信じた振りをして相手を油断させる手か？

……まあ、普通に考えれば一番最後だろう。

だが、相手がこっちの嘘に乗っかってくれるのなら、これ以上詮索される事はないだろう。

『ところで岡部くんは、ISBN5100見つけられた？』

M4……いや、うっかり呼ぶとまずいので萌郁にしておこう。閃光の指圧師は個人的に呼ぶのに抵抗がある。

萌郁は、話題を変えてきた。

内容はラウンダーの最優先事項であるIBN5100。

この世界線でも秋葉原にIBN5100があるという情報があるらしいな。

そして、情報収集として俺に接触したと。

前の世界線では、三年近く探しても見つからなかったが、この世界線ではどうだか分からない。

案外ひよんな所から見つかるかもしれない。

だが あんなモノを見つけた所で何の意味も無い。

少なくとも俺には不要。

あれを求めるのは、コレクターか、転売目的の奴か SERN ぐらいだ。

『俺はIBN5100を探さない。おそらく噂はデマだったのだから、お前もさっさと諦めた方がいい』

下手に見つけてしまっただけはラウンダー及びSERNに目を付けられる元。

明確に関与しないと主張しておく必要があった。

……最後のは蛇足だったかもしれないが。

例えば、世界線が変わって関係が無かった事になっても、萌郁は元部下。

IBN5100を見つければ処分されるのを分かっている、見過ごすのは気分が悪かったのだ。

まあ、おそらく

『そう。でも私はまだ探してみる。何か分かっただら教えてね』
無駄なのだろう。

あいつは命令に忠実だったからな。

第三者にあれこれ言われても、途中で止める事はしないだろう。

俺は用が済んだので、携帯をポケットにしまいコンビニを目指す。

迷うかもしれないと思ったが、前通りの場所だったのであっさりと見つかった。

そして、そろそろラボに帰るか……と、思ったところで携帯が震えた。

また、萌郁か？

そう思いながら確認してみると、それは見知らぬアドレスから。

そして、中身は

『お前は知りすぎた』

そんな簡潔な文章に、血塗れた人形の首。

それを見て直感的に悟った。

俺達はもう……SERENに目を付けられていると。

8月12日 10時00分

俺達がSERNに狙われる理由は、大きく分けて二つ。

電話レンジと、ハッキング。

タイムマシンを開発しているSERNは、どんな手を使ってでも電話レンジを手に入れようとするだろう。

そして、開発者を拉致して無理やり研究をさせる。従わなければ殺すだけ。

それが奴らの手だ。

殺す事に躊躇は無く、自分達の野望の為に平気で他を蹴落とす。そんないかれた連中に目を付けられたら、厄介どころではない。ハッキングがばれただけでも殺される。

だから俺は その二つを無かった事にする。

電話レンジも開発されず、ハッキングもしない。

そんな風に『今』を改変する。

だが、Dメールでは不確定。

確実に過去を変えるには、物理的なタイムトラベルをするか、タイムリープをするかしない。

「なら、さっさとマシンを完成させるしかないな」

もたもたしている暇は無い。

こうしている間にも、ラウンダーは俺達を襲う算段をつけているかもしれないのだから。

一刻も早くタイムリープマシンを完成させ、過去を改変する。

それが今考えられる最善手だ。

……いや、もう一つだけ手が無い訳では

「おーっす、岡部倫太郎」

「……鈴羽か」

ビル前のベンチに腰掛けてしていると、バイト中の鈴羽が声をかけてきた。

今は早朝。

昨日は夜遅くまで作業を続けていたといのに、紅莉栖はもうタイムリープマシンの作成を行っている。

まゆりもコス作りを再開。

俺は息抜きに、冷蔵庫にあつたお茶。

冷蔵庫の中身には何故か大量のドクターペッパーが冷やされていたが、どうやら買ったのは俺らしい。

俺の好物らしいのだが……今度気が向いたら飲んでみる事にしよう。

「あれ、今日は鈴羽なんだ。いつもバイト戦士って呼んでたのに」
この世界線でも鈴羽は、ラジ館に人工衛生が現れた翌日からブラウン管工房でバイトをしているらしい。

あとこの世界線では、鈴羽はあまりラボに出入りしてないらしく、紅莉栖との仲も険悪らしい。

……まあ、最も謙虚な違いは俺に対する態度だな。

殺気ゼロ。

気を許しているようなこの感じは演技ではなさそうだ。

「気まぐれだ、気にするな」

「ふーん。……あのさ、牧瀬紅莉栖は上にいるの？」

「ああ」

何気ない会話……そのつもりだったのだが、鈴羽は何やら敵意の様なものを醸し出した。

対象は俺ではない。

「牧瀬紅莉栖には留意して」
突然の忠告。

鈴羽の身から漏れた敵意は、紅莉栖宛てらしい。

前の世界線では、時々意見が衝突してたとはいえ、同じホテルに泊まるくらい仲が良かったというのに……。

「あいつが何かしたのか？」

「……あの頭脳は危険すぎる。それに、結局あいつ、実験のことし

か考えてないんだ」

俺と問いに一旦声を詰まらせたかと思えば、再び敵意を込めて語りだす。

まさに目の敵。

鈴羽は紅莉栖のことを語れば語るほど、その表情を険しくさせていく。

「君たちは利用されてるだけだよ。いい、よく聞いて。あの女は、SERNに通じてる」

「……なんだど？」

紅莉栖がSERNに通じている？

それはSERNと直接繋がっているのか、ラウンダーであるという意味なのか。

どっちにしる、想定外の宣言だ。

紅莉栖はSERNの闇を知ったとき、本気で怒っていた。

科学者に対する裏切り行為だと言っていた。

それだけ、純粹に研究のことを考えている。

それにIBN5100の存在を知らなかった。

ラウンダーならば知らないはずがない。

もし、嘘をつき誤魔化していたのなら大したものだが、紅莉栖は隠し事が苦手なタイプ……いや、その認識自体が術中にはまっている証拠なのか？

それとも、世界線が変わって俺がラウンダーでなくなったのと同様に、紅莉栖もSERNと繋がりが新たに出来たのか？

「その情報をお前は一体どこで手に入れた？」

「……あたしはそれを存知している。タイムマシン開発の功績も、あの女のものになった」

ジョン・タイターの正体は鈴羽だと予測はつけていた。

今の鈴羽の言葉も未来を知っているかの口調。

ならば、紅莉栖がSERNと通じているというのは事実なのか？

「だからさ、気を許しちゃダメ」

鈴羽はジッと俺の目を見る。
そして、気づいた。

この鈴羽の紅莉栖に対する敵意は以前の世界線で俺へと向けられていたもの。

憎きSERENの手下だった俺へと。

「……鈴羽、もう少し詳しく話をしたい。場所を移動出来るか？」

「え、でも、あたしバイト中だよ？」

「どうせ客など来ないだろ。大事な話だ」

「……分かった。店長に相談してみる」

鈴羽は店内に戻り、テレビの前で新聞を広げている店長の下へと向かった。

見るからに暇。

あれで鈴羽に真剣に働けなどとほざいたならば、傲慢以外の何者でもない。

一分程待つと、交渉が終わったのか店を出、「おっけーだってさ」と右手でOKマークを作り成果を伝える。

「では行くか」

「でもさ、大事な話って言っても、わざわざここに来る必要は無かったんじゃない？　ここ立ち入り禁止だしさ」

「立ち入り禁止だからこそ、誰にも聞かれずに済むだろう。……ま

あ、ただ誰にも聞かれたくないだけが理由なら、鈴羽の言う通りここまで来る必要はないがな」

今俺と鈴羽はラジ館の6階と7階の間を繋ぐ階段を登っている。

誰もおらず雑音も聞こえない。

ただ足音が無駄に響くばかり。

やがて7階を通過し、更に階段を登り8階に出ると、ラジ館の壁にめり込むようにして、不安定な形で突き刺さっている人工衛星が目に飛び込んで来る。

人工衛星と呼びはするが、誰も認めてはいない謎の物体。

銀色の樽型駆体。シリンダージャッキ。張り出した太陽電池パネル。スラスタ。アンテナ。

その正体不明の物体に俺は近づく。

今は、おそらく警察の手によるものだろうワイヤーが張られており、落下しないよう固定されている

「さて、話の続きをしようか。鈴羽……いや、ジョン・タイター」

「な……！　なんでそれを！？」

鈴羽の反応を見て予測は確信へ。

……しかし、もう少し隠す気は無いのだろうか？

「さっきの会話を思い出してみろ。存知しているだとか『なった』」

だとか、未来の出来事を過去形で語っていたぞ。それに、お前はジョン・タイターの話題に敏感すぎた」

「うっ……でもさ、それだけで分かるものなの？　一応カモフラージュもしてたのに」

「他にも疑わしい点はいくつかあった。ネットにジョン・タイターが現れたのと、お前が現れたのもほぼ同時だったとかな」

まあ、疑う切欠になったのは、俺に対する殺気だが……この世界線ではそれが無い。

だからあくまで勘と言う事になる。

それに、鈴羽の言っていたカモフラージュとは、男っぽい書き込みだったとかなのだろうか、ネットでの書き方だけで性別を特定するのは難しい。

だから、最初から性別を決め付けず、後から分析するのが良い。

「気をつけてたつもりだったんだけどな……」

「残念ながら『つもり』でしか無かったようだな。これからは気をつける」

何せ、鈴羽がバイトしているのはブラウン管工房。

店長……FBはタイムマシンの存在を知っている可能性が高いのだ、すぐ近くにラウンダーがいる状態では迂闊な事は言えば、正体がバレかねない。

「分かった。……で、大事な話って何？」

真剣な顔つき。

貼りつめた空気。

「ネットで情報を集めてみた。2034年にSERNはタイムマシンを完成させ、デイスとピアを構築する。そして、お前はそれを阻止する為にこの時代に来た。そうだな？」

「うん。時代はSERNによって支配されたデイストピアで、争いは完全に消えたけど人々は自由を奪われてる」

デイスとピア……極端な管理社会の事だ。

前の世界線では、力づくの支配だったが、こちらでは違うらしい。2000年問題が起きていない事が要因か？

それとも別の……。

「あたしはさ、SERNの支配からの解放のために戦うレジスタンスなの。この時代にタイムトラベルしてきたのは。そんな『今』を変える為。……君からしたら未来になるのか」

SERNタイムマシン開発に成功したことで、時間という4つ目の次元に干渉できる唯一の存在になった。

その結果、たった2年で、世界の秩序は全て塗り替えられた。

「そんでもって、さつき忠告した牧瀬紅莉栖。2036年において彼女は、タイムマシンの母として崇敬されている。2010年にタイムリープの概念を史上初めて発見し、その後もSERNのタイムマシン開発に貢献した人物。それがあたしの聞かされた牧瀬紅莉栖っていう人間」

「……なるほどな」

だからSERNに通じていると。

だが、おそらく現時点では、紅莉栖とSERNの間に繋がりはない

い。

タイムリープの事が世間に知れていると言う事は、俺達の敗北宣言に近い。

ラウンダーに捕らえられ、無理やりタイムマシンの研究をさせられたのだから。

家族や友人を人質にでもとって。

……俺ならそうしていた。

「お前は未来で紅莉栖に会った事はあるか？」

「会ったことは一度もないよ。2036年にはもう死んでいたし」

「殺された、か」

「……殺された？」

「少なくとも今の紅莉栖はSERNを快く思っていない。未来でもそうで、無理やり研究させられていたのなら、タイムマシンが完成した時点で用済み。奴らにとって紅莉栖は邪魔となり、処分した。そんなところではないか？」

「……あたしの時代では、極端に長生きの人と、不審な亡くなり方をする若い人の二種類がいた

SERNに逆らうような言動をする人はどんどん消されていった。もしかしたら、牧瀬紅莉栖もキミが言う通り、そうだったのかもしれない」

「知っている事は大事だが、その情報を絶対だと決め付けるのは、時に無知より危険だ。覚えとけ」

「……うん」

コクリと頷く。

おそらくそんな事は百も承知なのだろうが、常に意識しておかねば、人はついつい思い込みを少なからずする。

そうして、誤解が生じたり、真実が見えなくなったりするのだ。

「でだ、鈴羽。お前が乗ってきたタイムマシンはどこにある」

空気が静まり、間を取ると俺は本題を切り出した。

すぐ目の前にある、人工衛星のような物体に視線を注ぎながら。

「多分キミが思ってる通りだよ」

鈴羽は歩き出す。

そして、人工衛星に近づき 手を触れた。

すると、ハッチの様なモノが開き、人工衛星の中があらわになる。

「これが……タイムマシン」

ジョン・タイターがネットに現れるより少し前に秋葉に突如出現した謎の物体。

その正体がタイムマシン。

もしかしたら程度には考えていたが、事実だと認識すると、少々胸がざわつく。

周囲に警戒を払い、誰にも聞かれていない事確認し、俺も人工衛星 タイムマシンに近寄る。

過去を、未来を、そして今を変える可能性を持つマシン。

それが、手を伸ばせば届く位置にある。

「動くのか？」

自分でも予測し、鈴羽からもタイムマシンだと告げられても、これが時間を跳躍するタイムマシンという実感が湧かない。

不安。

「そりゃあ、動かなくちゃ困るって」

鈴羽はタイムマシンの中に入り込み、操作をする。

そして、回転灯と思えるモノが光り、回転しだした。

そして

「うそ……」

力の無い、愕然とした、絶望味をはらむ声が漏れた。

そして、必死な風の中、機械をいじるが

「あうっ！」

火花が飛び散る。

「動かない……」

振り返り、こちらを見る鈴羽の顔は今にも泣き出しそうだった。

そして、俺は悟った。

「……故障してる」

タイムマシンがあるのならば、タイムリープマシンを待たずとも過去に直接跳べる。

そんな俺の希望は

ここにはもう無かったのだと。

8月13日 14時00分

「直せないのか？」

「……無理。あたしは、父さんが作ったものに乗ってきたただけだから。仕組みそのものは、マニュアルを完璧に暗記してるけど……」

仕組みを知っていたところで、直せるものではない。

そもそも2036年のタイムマシンを現代で修理できるのかも怪しい。

「……結局、タイムリープマシンの完成を待つしかないわけか」

タイムリープマシンを完成させ、ラウンダーが行動を起こす前に過去を変える。

それが、やはり今出来る最善手だ。

8月13日、午後2時ごろ。

昨日も紅莉栖とまゆりはラボに籠りつきりだった。

俺と橋田も紅莉栖を手伝い

「完成」

紅莉栖がそう告げた。

「引き分けだねー」と、タイムリープマシンとコスのどちらが先に完成するかを競争していたらしいまゆり。

「あー、疲れたお……。フェイリスさんに癒されたい……」と疲れの様子でテンションの低い橋田。

そして

「私たち、ひよっとすると、とんでもないものを作っちゃったかもしれない……」と、バツが悪そうな顔で言う紅莉栖。

ラボ内の空気はどこか重い。

ふと、視線をやった電話レンジには、X6800を通じてヘッドギアが接続されている。

これにより記憶を読み取りデータ化、そしてLHCに転送しブラックホールで圧縮。

あとはそのデータをDメール同様に携帯で操作し過去に送る。

Dメールと違うのはメールではなく電話だという点だ。

過去へと送られた記憶を、受信者が携帯で電話に出る事で脳へと送り、記憶を上書きさせる。

……ただし、紅莉栖曰く、過去へ送れるのは記憶のみで意識や人格は転送しないらしいが。

「これで本当にタイムリープが出来るのか？」

鈴羽のタイムマシンを見た時と同じく実感が湧かない。

元が電子レンジと携帯なのだ、なおさらだ。

「出来る……はず。理論上は」

「もしタイムリープに失敗したらどうなる？」

「SERNのタイムマシンみたいに、ゼリーマン化する可能性はゼロよ。このマシンで送るのはデータであって、実物じゃないんだから」

カット&ペーストではなく、あくまでコピー&ペースト。

オリジナルが消えることはない……と、紅莉栖は言う。

だが、もし過去へと転送する過程で記憶がフラクタル構造化してしまった場合、過去の俺へと上書きされるスカスカの記憶。

一種の記憶喪失になりかねない。

タイムリープはまだ問題がいくつもある。

だが やるしかないのだ。

「……口であれこれ言ってもしょうがない。マシンを動かさせ、実験を始める」

「ちよ、今から？」

「ああ、時間をおいたところで何かが変わる訳でもない。結局、実験と検証を繰り返さねば改良などされんのだ。そうだろう、紅莉栖」

「……ええ」

紅莉栖は科学者であり、実験好きだ。だからこそ、渋々ながら肯定する。

紅莉栖とて、実験してみたいに決まっている。だが、前例の無い試み、未知の領域に踏み込む事に躊躇してしまっているのだ。

……俺だって、余裕があるならそうしていたさ。

いや、そもそも焦っていないければタイムリープマシンを作ろうなどともしない。

SERNに目を付けられる要因を、一刻も早く消さなくてはならないのだ。

もたもたしてられない。

「でも、誰がタイムリープするわけ？」

「僕はパス」

「……ほえ？」

橋田は拒否、まゆりは……おそらく話しについていけないのだろう。

紅莉栖もおそらくしない。

「俺がやる」

元々、俺はその為にタイムリープマシンを作る事を決めたのだ。

タイムリープし、過去を変える為に。

「……マジで？」

「ああ、マジだ」

決意を込めた、真剣眼差しを紅莉栖や橋田、ついでにまゆりに送る。

「……分かった。でも、まずは短い時間から。一時間……は、放電を起こさないから三時間くらい。もつとも、あくまで予測だけど、タイムリープマシンは一度に最長で48時間しか跳躍できない……と思う」

「なっ……たったの48時間だと!？」

思わず怒鳴る。

叫ぶ。

48時間……つまり2日では電話レンジが作られるより前には戻れない。

2日前ではハッキングすらした後だ。

「……理由は？」

「分からない。私もマシンのすべての原理や構造を理解して作ったわけじゃないから」

「……そうか。なら、取り敢えず3時間だ」

タイムリープマシンが完成してしまつた以上、例えそれが不完全でもSERENはどんな手を使ってでも狙つて来る。

ならば、それに対抗する手段としてタイムリープマシンが使えるかどうかは確認しておきたい。

たつた2時間でも何度も繰り返せれば、対策を練る時間を稼ぐくらいは出来るからな。

俺はヘッドギアを頭に装着し、紅莉栖はX6800に設定を打ち込む。

42型ブラウン管テレビが点灯済みなのは既に確認してある。

「ねえ、オカリン。本当に大丈夫なの？無理しちゃだめだよ？」

大丈夫かどうか……それは誰にも分からない。

それを知るために俺はタイムリープをする。

不確定な事象を、不確実な機械を用いて起こす、現代においてはまさに未知の試み。

不安な要素はたくさんある。

現にマシンを作つた紅莉栖でさえ、いざマシンを動かすとすると躊躇いのようなものが見える。

だが

「ああ、心配するな」

俺は余裕そうに、いかにも大丈夫そうに返事を返す。

そのやり取りをみて、紅莉栖が決心したのか、マシンを起動させ

る。

直後、青白い光がラボを照らし、放電現象が始まる。
同時に地震と間違える程の揺れ。

そして

俺の記憶は時を越え

過去へと

跳んだ。

意識が一瞬途切れ、再び繋がった時には混濁していた。

ここはどこで、俺は誰か……そんな根本的な疑問にすら即座に答え
える事が出来ない。

視界も歪み、超音波にも似た音の激流が、頭の内側から響き渡り
脳を痛い程に刺激する。

異常事態。

何が起きたのか見当もつかず、錯乱している脳を酷使し記憶を遡
ってみる。

そう、確か、俺は

思い出す。

吹き飛び焦点を失っていた世界が像を結び、再生され始めた。

電流が全身を駆け巡った様な錯覚を覚え、脳が覚醒。

そして、同時に痙攣したかの様に身体が震え出す。

視界に映るのはラボの開発室。

当の俺は携帯を耳に添えたまま、電話レンジの前で棒立ち。

呼吸をする事すら忘れていたのか、息苦しく窒息しそうで、酸素
を求めて口を大きく開く。

額を垂れる汗が鬱陶しいが、今はそれどころではない。

手に持つ携帯を耳から離し、時刻を確認。

すると 8月13日の11時28分。

それが今だった。

過ぎ去ったはずの過去が今、ここにある。

タイムリープ。

たった3時間だが、俺は確かに時を越えた。

過去へと戻った。

「ちょっと、岡部。邪魔だから突っ立てるだけならどいて」

後ろから声をかけて来た紅莉栖を無言で見つめてみた。

ついさっきまで、タイムリープマシンが云々と話し合っていたはずなのに、そんな事実は無かったかの様に紅莉栖は振る舞う。

「おーい、聞こえてるか？」

ラボを見渡すとまゆりが終わったはずのコース作りを再びしており、橋田そしてよく見ると紅莉栖も数時間と同じ様に電話レンジの改造に取り組んでいる風だった。

違和感。

だが、それはタイムリープをした事による時間のズレによるもの。間違いない。

俺の記憶は　　過去へ跳んだのだ。

8月13日 19時10分

タイムリープは可能。

その事実はいくらからの対策を練る上で重要にはなるが、有利とは言えない。

実質戻れるのは11日までであり、ラウンダーの襲撃はほぼ不可避だと思われる。

いつラウンダーが襲撃して来るか分からない。

今の内にまゆり達を逃がすという手もあるが、逃がした先が安全圏だとは保証されていない。

俺がまゆりと一緒にいれば、例え遠くに逃げても追われる事になる。

だからと言って、一緒にいなければ守れない。

紅莉栖、橋田、そして俺はタイムリープマシンを開発した当事者なので、SERNとしては生かして捕らえたいはずだ。

現に鈴羽の言う未来では、紅莉栖はSERNの一員としてタイムマシンの研究をしていた。

なら、俺達三人は逆らいさえしなければ、とりあえず殺されはしない。

だが まゆりは違う。

こんな風にタイムマシンやSERNの問題に巻き込んでしまつてるとは言え、SERNにとっては無価値。

余計な事を知っている邪魔な人間でしかない。

いつ殺されてもおかしくない。

るかやフェイリスも危ないかもしれない。

俺達を従わせる為の人質になる可能性は大いにある。

常に俺達はSERNの脅威に晒されている……だが、実際に取れる対策は今の所無い。

向こうの動きが読めないのだ、悔しいながらも待ちをして出方を

うかがうしかない。

唯でさえ圧倒的に不利な上に後手に回るといふこの現状。

安堵する暇などどこにもない。

「はい、オカリン。ドクターペッパーさん」

……にも関わらず、今俺がいるラボは緊張感があまり無い。

冷やされたドクペを差し出すまゆり。

手元にはまゆりの飲み物も用意されている。

あの後、再びタイムリープマシンが完成すると、このマシンの扱いは保留にする事に決めた。

安全性が保証されていないからだとか色々理由を述べてみたが、結局の所は悪あがきである。

このタイムリープマシンが本物であるという確証が、どこから漏れてしまったら、即ラボに押し入れられてもおかしくはない。

だから取り敢えずタイムリープマシンは一旦置いておく事にした。

……と、皆が徹夜の作業から解放され、内輪で宴会をやるうという話になった。

そして今に至る。

マシン改造が完了してから約5時間が経過。

以前ラボ内は明るく、ラウンダーが攻めて来る気配はない。

まゆり、紅莉栖、橋田、そしてまゆりに呼ばれたと言って現れた
鈴羽。

卓上に並ぶお菓子やピザ。

ちなみに今日はブラウン管工房はすでに店じまいをしているそう
で、42型ブラウン管は電源が切られているらしい。

つまり何か合った時、タイムリープマシンはすぐには使えない。

今後の事も考えて、ブラウン管工房の開閉店に左右されず、こちらの都合で42型ブラウン管テレビを点灯させる方法を考えるべき
だな。

「フェリスちゃんや、るかちゃんにもね、声をかけたんだけど、今日は無理って言われちゃったー」

「……そうか」

フェリスは雷ネットの大会、るかは理由は不明だが恥ずかしいとの事で欠席。

橋田はフェイリスの応援に行きそびれた事を悔やんでいたが、俺としては少しホツとしていた。

フェイリスやるかは、これ以上俺に……ラボに関わらない方がいい。

現時点でどういう扱いかは知らないが、下手をしてSERENに目を付けられ巻き込まれる事になったら適わない。

食べて騒いで、時は過ぎていった。

鈴羽と紅莉栖が一緒にいるという事に多少の不安はあったが、自然体とは言わないまでも鈴羽と紅莉栖は会話を交わしたりしていた……もつとも、子供の様な言い合いが殆どだったが、それでも目の敵にしていたこの前よりは幾分かマシだと言えよう。

鈴羽にも何か思う所があったのだろう。

「ねえねえ、オカリン」

段々と騒ぎも落ち着き、そんなラボをドクペを口にしながら見渡していると、まゆりが近づいてくる。

ちなみに余談だろうが、ドクペは意外と旨かった。

「なんだかね、ここ何週間かで、すごくにぎやかになったねー」

ニコニコとした顔で語るまゆり。

俺にはその何週間の記憶は無いが、まゆりが喜んでいるのなら、俺も喜ばしい。

そして、ふと思い出す。

前の世界線で俺がラボを作ろうとした理由を。

入院中のまゆりがある日、こんな事を言ったのだ。

『ねえ、ラボを作ってみない？』かと。

流れも何も無く、いきなり。

ラボと言われても俺はさっぱりで、それは何かと聞き返すと、
『うーん、分かんない。でも楽しそうだった』

そう答えた。

なんでも夢を見たんだとか。

俺や橋田、るかにフェイリス、そしてまだ知らない誰かと毎日楽しそうに団らんやおかしな研究をしている夢。

その夢の話を聞いた時、俺は何故だか懐かしい気がした。

そして、俺はその一週間後、ラボを作った。

今に思うと、まゆりが見た夢とは、今まさにあるこのラボでの日常なのではないかと思う。

まゆりが夢見た今。

そして、俺も望んだ今。

それがここにあるのだ。

もし、この『今』を崩そうとする者がいるのならば、俺は容赦しない。

どんな手を使っても、この『今』を　まゆりを守る。

「あのね、ラボメンが8人に増えたでしょ？　ちよっと狭くなってきたなーって、まゆしいは思うんだー」

まゆりは笑顔で言葉をつづる。

俺はそれを黙って聞き、時折頷く。

「お友達たつくさんできたしね。ダルくんでしょ、クリスちゃんでしょ、るかちゃんでしょ、スズさん、萌郁さん、フェリスちゃん、店長さん、絢ちゃん、他にも他にも」

店長やその娘は友達とは違う気がしたが、まゆりがそう思っているのならそうなのだろう。

……もつとも、どれだけ仲が良くとも店長がラウンダーである事には変りは無く、いつ俺達を脅威に晒させるかも分からない。

それは萌郁もわかり。

奴らにも色々と事象があるのは知っているが、もし敵として現れ

たなら、容赦はしない。

そう、改めて覚悟を確認した時だった。

緊急速報の音が聞こえ、視線をテレビに向けると

『爆破テロ予告で山手線、総武線、京浜東北線の全線が運転見合わせ』

そんなテロップが表示されていた。

秋葉原駅の完全封鎖。

それは、以前俺がもしラボを襲撃するならどうするかを考えていた時と同じ手だ。

逃げ場を失わせ、同時に自分達にはこれだけの力があるのだと誇示をする。

そうする事で、相手に逆らう気無くさせるのだ。

つまり　とうとうやって来た。

SERNが、ラウンダーが動き出した。

ラボメンの各々も、テレビに気づく。

それから発せられるのは、『帰りはどうしよう』という現状に困った言葉ばかりで、危機感を感じているモノは無い。

……まあ、それもそうだろう。

誰も自分達が命の危険に晒されているなんて、思いやしない。

普通に育ち、普通に生きてきたのだ。

当然の反応とも言える。

現状を理解している者がいるとするならば

「岡部倫太郎、1つ聞かせて」

目を細め、険しい顔、重い口調の自称未来人、鈴羽。

「タイムリープマシンは、完成してるんだよね？」

「……ああ」

「そっか、あたし、用事思い出したからちょっと出かけてくる」

鈴羽はそれだけを伝えると、返答も待たずに、さっさとラボから出て行った。

端から見たら不審な動き。

現状を理解している俺でも、行動の意図は見えないが、何かをしようとしているのだろう。

ここは注意を払いながらも、鈴羽には思う通りにさせておこう。今迫っている問題は、鈴羽がどこではないのだ。

問題は、俺がどうするか。

どうやったたら、この危機的状況から抜け出せるのか。

身体を動かす事も忘れ、固まりながら脳をフル稼働。

何か手は無いかと答えを求め。

逃げるか？

……いや、どこに。おそらく秋葉原中にラウンダーが配置されている。

地下鉄やバス、タクシーなどの交通網を使っても、逃げ切る事は難しいと思われる。

そもそもどこに逃げるといふんだ。

これはゲームじゃない。

鬼ごっここの様に、日が暮れたからと言って終わらない。

捕まるまで終わらないのだ。

相手は多勢に無勢。

何の手も思いつかない。

次第に焦りは増し、心臓の鼓動が煩く感じる。

一步も動けない。

「……オカリン？」

そんな明らかにおかしい俺を、心配そうな目でまゆりは見てくる。

そんなまゆりを、心配無用だと言って手を握る。

不安にさせる必要は無い。

まゆりは俺が守るのだ。

やがて、テレビがついているにも関わらず、ラボは静まり返り返った様に感じ

突然、いきなり ドアが蹴破られた。

そしてほぼ同時に5人程の人間が押し入ってくる。

向けられるいくつもの銃口。

異様な空気がラボ内を支配する。

誰も声を出せず、動けない。

そんな中俺は、出来るだけ自然にまゆりの手を引き、俺の背後に移動させる。

俺自身は、前に出て乱入者達の銃からまゆりが死角に成りやすくしようと試みる。

「動くな。全員両手を挙げろ」

乱入者の内の一人、浅黒い肌をしたクルーカットの男が、押し殺した声を発する。

こいつが乱入者の……この場にいるラウンダーのリーダー格か？

俺はこんな状況を何度か見た事があるが、他のラボメンは実物の銃を見ることがすら初めてだろう。

最初に両手を挙げたのは俺。

大きく、真上では無く斜め方向に。

奴らの視界から、ほんの少しでもまゆりの姿を無くす為に。

そんな俺に続いて、橋田、紅莉栖、まゆりが手を上げる。

皆、俺の後ろ方向だ。

先程まで明るく騒がしかったラボの面影はここにはない。

緊張感が痛いほどに貼り詰め、ラウンダー達も無言で銃を構えている。

互いに沈黙。

テレビから聞こえてくる笑い声が酷く場違いだ。

相手は銃を持った6人の男。

対してこっちは無防備な男女が合わせて5人。

俺一人がここから脱走するだけなら可能かもしれないが、そうなれば残されたまゆり達が危ない。

だからと言って、勝負に出れば間違いなく負ける。

手詰まり。

ラウンダーが襲撃してきた時点で、逃げる事すら許されていない

のだ。

だから 戻る。

タイムリープをして、まだ平和な時間に戻るのだ。

そうすれば対策を練る為の猶予も生まれる。

何とか隙を見て、例え撃たれて死に掛けようがタイムリープさえすれば、撃たれた事実も無かった事になり、無事な傷一つ無い身体に戻る。

……だが、これを実行する為に肝心な隙が今は無い。

下手に動けば射殺される勢い。

いくら撃たれても良いとは言っても、殺されてしまっただけでは元も子も無い。

向こうとしても、このまま硬直状態を続ける意味は無いのだ。

何かしらのモーションを起こすはず

注意を払う。

最大限に集中力を高める。

そんな俺の耳に……新たな音が届いた。

蹴破られたドアの向こう。

足音。

察するにヒールの音。

女が階段を登ってくる音だ。

段々とその音は大きくなり、やがてすぐそこまで近づき、止った。すぐ目の前にその女が姿を現して。

黒のライダー服に、拳銃も備えている。

しかし まさか、こいつとはな。

先に攻め込んできた男達が何もしなかったのは、この女を待っていたから。

つまりは、リーダー格かそれに近いもの。

「タイムマシンを、回収させてもらう」

飽きる程に聞いた声で女は 萌郁は言葉を放つ。

前の世界線では、俺と共にFB直属の部下だった。

この世界線でもそうなのだろうか、それとも普段からリーダーの様な事をしているのだろうか。

「牧瀬紅莉栖、岡部倫太郎、橋田至。3名については、我々と一緒に来てもらう」

3人。

それには当然の様にまゆりが含まれていない。

萌郁の命令に従っても、逆らっても ほぼ間違いなく殺される。こうなったら俺にはいよいよ打つ手が無くなって来た。

隙をうかがうにも、向こうはその余地すら与えてくれない。

下手に粘っても、銃があるんだ。

無理やりにも拘束させられる。

足でも撃てば逃げられなくなるのだから。

……だがだ

「早く」

急かす萌郁に、

「……どういう事だ？」

俺は言葉を返した。

「答えられない」

萌郁は俺の問いかけに首を振った。

そして、数秒ほど沈黙し、

「とにかく、来て」

また言葉を発した。

端的で短い命令。

「どこへだ？」

俺が問う。

萌郁は無言。

まあ、そうだろうな。

俺でも答えない。

いや、俺ならこんな無駄な問答はさせない。

さっさと足なり腕なりを撃って黙らせる。

そして一気に拘束する。

相手の中心人物が傷つけば、その仲間の心も折れてしまうのだから、容易いだろう。

所詮相手は素手の上に素人。

逆らってきても歯など立ちやしない。

「今は携帯を使わなくても普通に喋れるんだな」

だから、こんな風に言葉を許している時点で甘いのだ。

萌郁はまた黙り、代わりに

「余計な事を喋るな！」

先程のクルーカットの男が銃を向けたまま威嚇してきた。

どうやら、実質的なリーダーはこちらの男の方のようだな。

全員が萌郁の部下だったのなら、こつも出張って気はしないだろうからな。

俺は仕方なく口を閉じる。

これ以上下手に刺激して発砲されたらかなわない。

……出来れば、もう少し時間稼ぎが出来ればよかったのだがな。

「拒否することは認めない、一緒に来てもらう」

銃を構えて萌郁が再度命令する。

それに対し俺は無言で、手を広げながら立ち尽くす。

紅莉栖は、何故3人だけなのか問う。

橋田は、取り敢えず言う事を聞いたほうがいいのではとおどおどしながら震えた声で言う。

そして、まゆりは『ラボメン仲間……だよな?』と、涙を流

していきそうな悲しそうな声で言う。

裏切らないよね、そんなはずは無いよねと、何かの冗談だよねと

……そんな願いが含まれているような気がした。

「……分かった、従う。だから銃を下ろせ」

「それは出来ない」

「それで無くてはいっ殺されるか分からない、不安と恐怖で身体がすくんで足が動かないんだよ」

従う気など無い。

一瞬でも隙を見せれば、タイムリープマシンを起動出来　　ない。
そうだ、忘れていた。

マシンを起動させる為に必要な42型ブラウン管テレビが今はついでいない。

だから、今すぐにはタイムリープは出来ない。

……こうなったら、もう祈るしかない。

だから、その祈りが届くまで時間を稼ぐ……それしか俺に出来る事は無い。

そう決心を決めて口を開こうとした時だった。

萌郁の持つ拳銃の引き金にかかった指が震えた。

ぶつぶつと自己暗示をするかの様に言葉を発し、萌郁は　　引き金を引いた。

銃声が響き、弾丸が俺の腕をかすった。

そして　　後ろにいたまゆりが血を流して倒れた。

8月13日 20時55分

「まゆり！」

銃声の直後、俺は敵の警戒をも忘れて、とっさに振り返った。するとそこには悲鳴もあげず、ただただ苦しみながら崩れるまゆりがいた。

力が全身から抜け落ち、糸が切れた人形のように胸を撃たれたのか、その辺りが血で滲んでいた。

人が撃たれる姿は今まで何度も見てきた。

その中には俺が直接撃ち、殺した者も多い。

数え切れない死を目の当たりにして俺の心は麻痺していた。はずだった。

誰が何人死のうが感情は揺れず、冷静。

なのに、まゆりが撃たれた今は冷静さなんて無様に抜け落ちていた。

敵に背を向けまゆりの側へ。

『動くな！』という声と発砲音が聞こえても、そんな事するかと。

「オカ……リン……」

「喋るな！」

息はまだある。

致命傷じゃない。

今すぐにも病院に運べば

「もう一度言う。3人と一緒に来て」

萌郁の冷たい声。

「これ以上の警告はしない。抵抗するなら、あなたたちも殺す」

……今は襲撃されている真つ最中。

病院にどうやって運ぶ？

119に連絡をする事すら叶いそうに無い。

奴らが許すはずがない。

それからしばからく……いや、実際には数秒しか経っていないの
だろうが、体感的に長い時間が経過すると、まゆりは静かに目をつ
むり、僅かに動いていた身体は動かなくなった。

それを俺は、何も出来ずただ見下ろすだけ。

「言う事を」

「黙れ……！」

こうなる可能性は十二分に危惧していた。

だが、実際に事が起きると予測していた以上に感情のコントロー
ルが上手くいかない。

まゆりをこんな目に合わせたSERENが憎い。

そして何の力にも成れなかった自分がそれ以上に憎い。

まゆりは死なせない。

俺はそんな未来を認めない。

気道の確保、心臓マッサージ、人口呼吸……その他にもやれる事
はやった。

だが 反応は無い。

やはり素人の応急処置では効かない。

そもそもこの応急処置は病院に運ぶ事を前提としたもので、こん
な状況では端から無意味なのかもしれない。

だが、しかし、それでも、俺は諦められなかった。

もう二度とこの少女を見捨てないと誓ったんだ。

絶対に救うと決めたんだ。

俺は死のうが地獄に墮ちようが構わない。

だが、まゆりだけには幸せに生きて欲しい。

それが俺の願い。

俺の全て。

「お願い、言う通りにして」

まるで祈る様に頭を垂れる俺の後頭部に、冷たい金属の感触。

萌郁の拳銃。

それは最後の忠告だと、従わなければ殺すと無言で訴えている。

完全な不利。

せめてナイフを袖に仕込んでいれば、まだ手はあったかもしれないが、今の俺には反撃の手札が一つもない。

……だから俺は動かずに、情けなく、無様に祈る。

今まで一人でやっていく覚悟を、他人を騙し欺き、利用して来たと言っのにも関わらず。

ただただ祈るのだ。

「っ……！？」

……隙が生まれるのを。

何が起きたのかは知らない。

突然萌郁が呻き声を上げ、俺に突きつけられていた拳銃が一瞬後頭部から離れた。

そして俺はその一瞬の隙について萌郁の鳩尾にめがけて肘を目一杯喰らわす。

身体は九の時に折れ、拳銃は地面を転がり、それを俺が拾う。

これで萌郁に俺は殺せない。

そして萌郁を盾の様になっている為、他のラウンダーが発砲しても、致命傷を負う事はない。

……まあ、その心配は無用そうだが。

「伏せて！」

いつの間にか現れた鈴羽が、入り口近くに立っていたラウンダーを気絶させ、さらにもう一人。

ラウンダー達がとっさに銃口を向けるが、気絶させた男を別の男の方へと投げ飛ばしてそれを妨害。

流れる様な動きで次々と倒して行き、最後に屈強そうなクルーカットの男を奪った銃で撃って、その後は他のラウンダー同様伸ばしてみせた。

「……来るのが遅い」

俺はもたれ掛かる姿勢から持ち直しかけていた萌郁の顎を拳で打ち上げ、脳を揺らして気絶させると形成逆転を起こしてみせた鈴羽

に、感謝するでなく真つ先に文句を吐いた。

「……ごめん。どうしてもやっておかなくちゃいけない事があったから」

申し訳なさそうにする鈴羽。

どうせ現れるのならば、もう少し早く来て欲しかった。

そうすれば、まゆりは苦しまずに済んだ。

「……だが、助かった」

しかし、鈴羽のお陰で八方塞がりだった現状が逆転したのも事実。鈴羽はSERENを憎んで、未来を変える為にこの時代に来た。

そして、俺がラウンダーの襲撃に気づいたのと同時にタイムリープマシンは完成しているのかを確認だけをして、唐突に姿を消した。その事から俺は、鈴羽も襲撃に気づき、対抗策を練る為に一旦姿を眩ましたのだと推測し、鈴羽が現れるのを祈っていた。逃げたのではなく、戦う為に消えたのだと。

「……どうなってるの？ いや、それより早く救急車を呼ばないと！ 警察も！」

騒ぎが鎮静化すると、脳がまともに回り出したのか紅莉栖がもつともな事を叫ぶ。

「救急車と警察は紅莉栖に任せる」

倒れるまゆりに目をやると、俺はすまないと心の中で呟き、タイムリープマシンの下まで歩み寄る。

「鈴羽、42型はついてるな？」

「うん」

ならば後は起動するだけだ。

まゆりを救う為に、こんな『今』を変える為に。

「ちょっと、タイムリープマシンを使う気？ さっきは使わないって」

「実験はしないと言っただけだ。そしてこれは実験ではない」

「なら、私が」

「駄目だ。俺がやる。俺の責任だ」

そう、全て俺の責任。

記憶に残っていないとはいえ、この世界線でもタイムマシンを作ろうとし、SERENにハッキングをするようにけしかけとの俺だ。その結果、SERENに狙われ、こうなった。

だからこれは俺が負うべき責任で、俺が解決しなければいけない問題。

「でも、もし失敗したら……」

ヘッドギアを装着し、X6800に設定を打ち込む。

「……心配は無用だ。俺はすでに一度、タイムリープをしている」

「え？ それって」

「させる、か……！」

銃声。

クルーカットが立ち上がり、ふらつきながら近づいて来る。

もたもたしている暇は無い。

ラボ内のラウンダーは気絶させただけ。

それにラウンダーは秋葉原中に散らばっており、そいつらがいつここに突入してくるかも分からない。

……しかし、せめて銃は奪っておくべきだった。

迂闊。

愚か。

「紅莉栖、鈴羽、すまない。後は任せた」

タイムリープをすれば、俺は過去に戻り、襲撃された今を一旦無かった事出来る。

だが、残された紅莉栖達はどうか。

俺が過去へ戻ると同時に再構築されるのか、俺の記憶が跳んだ後も彼女達の時間は続くのか。

もし後者なら責任を負うどころか、投げっぱなしの逃避。

これしか手は無いとは言え、自分の無力が情けない。

携帯を取り出し、マシンを起動。

バチバチと音を立てて電気が走り、タイムリープするまでのカウ

ントダウンが始まる。

俺がやり直す。

俺が全て無かった事にする。

……例えそれが、ただのエゴだったとしても。

2000年問題は起きていない、まゆりは病気じゃない、ついきまで仲間と一緒に元気で楽しそうに笑っていたんだ。

まゆりが過ごすべきなのは、そんな日常。

銃を持って、殺す殺されるな非日常はお呼びでない。

もし、呼んでもいないのに、勝手に来るといふのなら
俺が全
て背負い、独りで戦ってやる。

電話が繋がる、過去へと記憶が跳ぶ。

8月11日 21時05分

人生は一度きり、だから一秒一秒を大事に生きる……そんな言葉を聞いた事がある。

だがその言い方だと、やり直しが出来るなら一秒一秒を粗末にして良いような響きを覚える。

やり直せると言っても、最終的に選ぶ未来は一つだけ。

失敗を無かった事にも出来るが、成功も無かった事になる。

思い出も培って来た人間関係も、積み上げてきた努力も、全て。

やり直すのは、つまりは結果をよくする為。

しかし、やり直した結果が悪化しない保証は無い。

仲の良かった友達や愛し合っていた恋人とすれ違い仲がこじれるかもしれない。

前は成功した事も、失敗するかもしれない。

受験、就職、その他色々。

だから、もしかしたら人生は一度きりの方が楽なのかもしれない。

……仕方ないと諦められるから。

過去を後悔しても意味はない……そんな言い訳が出るから。

全てにおいて、やり直す前を上回り、後悔をしない……そんな人生を得る事が出来る人間が果たしてどれだけいるというのか。

俺は諦めない。

絶対に。

何があるかと。

俺の望む未来は存在しないとされても……何度でも繰り返す。

頭痛……いや、脳痛。

脳を針が刺す様な刺激に見舞われ、意識が歪む。視覚、聴覚、触覚……様々な器官から得られる情報が一瞬ストツプした気さえした。

思い出すどころか、記憶が吹き飛びそうな衝撃。

だけど、俺は呻き声一つ漏らさずに堪え、意識を立て直そうと試みる。

すると

「オカリンは休憩？」

そこには、まゆりがいた。

能天気で明るく、怪我一つ無いまゆりが、俺の目の前でコス作りをしている。

過ぎ去ったはずの過去。

だが、間違い無く『今』。

8月11日、2日前。

「ああ、気分転換だ。マシンの方は……クリスティーナとダルに任せておけば大丈夫だろう」

「そうなんだー」

紅莉栖や橋田をあだ名で呼ぶのは未だに慣れないが、いきなり呼び方が変わると不審なので、この世界線に合わせている。

……バイト戦士や閃光の指圧師はあまり呼びたくは無いが。

周囲からの情報から察するに、この世界線の俺は俗に言う厨二病というものだったらしい。

実に痛々しく、平和な奴だ。

俺にはそんな風に戯れ言を言っている暇など無かった。戯れ言より虚言。

そんな人生だった。

「ねえねえ、またケータイ鳴ってるよ。見なくていいの？」

「ん、そうだな。少し外に出てくる」

携帯を掲げて電話だと主張。

まゆりはそれを見て『気をつけてねー』と理解。

実際には電話ではなくメールのだが、その意図は無言では通じないだろう。

通常、メールで外に出る必要性は無い。

ただ誰にも見られない様に念には念を押しただけだ。

「さて……」

携帯を開く。

視界に飛び込むのは受信履歴に並ぶ閃光の指圧師の名前。

この時点では、まだM4云々の失言の言い訳をしていなかった。

だから執拗にメールを送ってくる。

『直接話したい。今すぐ会えるか？』

送信。

……受信。

『メールじゃだめ？』

『大事な話だ。ラジ館の屋上で頼む』

送信。

……受信。

『わかった。今すぐいくね』

約2週間前に人工衛星が墜ちて来て以来、名物となり人集りが出
来ていたラジ館前も、この暗さでは人はいない。

明かりもほとんど無く、辺りは静寂。

「……来たか」

俺も到着したのはついさっきなのだが、呼び出した側としては余
裕でいなければならぬ。

隙など見せたら交渉は終わりだ。

「大事な話って何？」

萌郁はやはりメールで会話をしようとして来る。
正直煩わしい。

「口で直接話せ、M4」

あえて呼ぶコードネーム。

萌郁は目を見開き俺を見る。

「……目は泳いでいるが。」

「命令だ」

あくまで上から。

しくじったなら、失敗点を分析しやり直すまでだ。

「……ど、どうしてその呼び方を知ってるの？ それは」

「FBと自分しか知らないはずだ……と」

コクリと頷く。

その動きは警戒しているのか、少々ぎこちない。

「俺がそのFBだとしたら？」

頬をつり上げ、不敵に、意味ありげに、怪しい笑みを浮かべる。

「……それは無い。FBに確認した」

「……成る程な。」

FBには既に報告してある訳か。

「それに……FBは女性」

「……何を言っているんだ、お前は？」

情報を少しでも引き出そうと、博打を仕掛けて見たのだが……萌郁が訳の分からない事を言い出した。

「FBが女だと？ 何故そうなる」

俺の知るFBは、ブラウン管工場の店長、天王寺祐吾。
間違い無く、見るからに男だ。

それがどうして女という事になる。

まさか、この世界線では別の人間がFBを名乗っているのか？

「……メール」

「何？」

「メールを見てたら……分かる」

「声は？ 会った事は無くても電話ぐらいした事あるだろ」

「……ない」

首を小さく振り否定。

電話は一度も無くメールのみのやり取り。

ならば、この世界線でもFBは店長のままである可能性は大いにある。

タイターの様に、正体不明の文章だけのやり取りだと、性別を偽りやすい。

一人称を『私』にするだけで、勝手に女だと勘違いしてくる奴もいる程だ。

……しかし、こんな質問をしている時点で、俺がFBだと言葉が虚言なのは明らかだな。

まあ、FB本人に確認しているのならば、どれだけ取り繕ったとしても無駄だろうから、構わないだろう。

今は情報を引き出す事が大事だ。

「俺がFBだというのは冗談だ。俺はお前と同じラウンダーの末端だ」

「……そんな話は聞いてない」

「おそらく管轄が違うからな、FBも知らないだろう。そもラウンダー同士は正体を隠しているんだ、コードネームを知っていたとしても俺だと気づかないだろうな」

ハツタリ。

ラウンダーの正体は秘密どころか、個人情報まで割れている。

そうでなければ思う通りに、都合良く駒として動かせない。

おそらくFBもM4の正体を知っている。

萌郁は携帯に文字を打ち込む。

しかし、俺の携帯は着信しない。

「……了解した」

携帯を見つめて無言だった萌郁が、返事を確認したと思うと、そう言った。

「了解したとは何がだ」

「岡部君は私に従ってもらう。逆らえば命は……無い」

俺が萌郁に従う……前の世界線とはまるで逆の関係。

「分かった」

この世界線ではラウンダーであろうがなかるが、SERENを敵に回す。

ならばラウンダーとして敵側に潜り込む。

そうする事で得られる情報や、選べる選択肢があるかもしれないからだ。

FBだって馬鹿じゃない。

俺を信用はしてないだろうし、利用する気でしかないだろう。

ならば俺も利用仕返すだけ。

どんな手を使ってでも俺はまゆりを救う。

「俺のコードネームは……M3だ」

その為には、闇に身を堕とす事も躊躇いはしない。

8月12日 10時35分

この身がどうなっても構わない。

しかし、だからと言っても、がむしゃらに、考え無しに行動しても意味は無い。

俺に何が出来、何をすればいいのかを理解する事が第一歩目。

俺が思いつく限り、まゆりを確実に守るには、SERNに目をつけられない……これぐらいだが。

SERNに反逆しても勝てる見込みはまず無く、仮に勝てたとしてもまゆりが無事でいる保証も無い。

前の世界線では、失うモノが無かったからこそ、反逆などという捨て身が出来たのだ。

奴らの常套手段である人質のいない俺だったからこそ。

……だが、今は違う。

まゆりがいる。

紅莉栖や鈴羽、橋田にフェイリス、るか、他にも両親。

それにそもそも、前の世界線での反逆の目的はタイムマシンを作り、過去を変える事でまゆりを救う事。

つまり、まゆりが病気でない今では、SERNへの反逆も先に述べた目をつけられないように過去を改変する事に繋がる。

そう考えると、反逆は合理的でなく、非常にリスクである。

……それに、先に確実に失敗すると言われたら、実行する気は一層無くなる。

「俺がレジスタンスをね……」

ラジ館の屋上で、俺は前と同じく鈴羽と向かい合っている。

昨日の夜、萌郁と別れた後は、またラボに戻りタイムリープマシンの作成に戻った。

タイムリープマシンを完成させない事には、やり直しが出来なくなる。

萌郁からは、今の所指示は無い。

……余計な、相談めいた雑談は何通か来たが。

関係が悪化すると面倒なので、全て返しておいたが、かなり鬱陶しい。

今は、前回と同じ時間を選んで鈴羽に接触し、ラジ館でタイターや人工衛星の正体の話をし、更には前は突っ込まなかった話題に触れるために。

2036年において、俺はテロリストとして有名になっているらしい。

鈴羽の所属するレジスタンスを作り、デイスとピアを構築し支配するSERNに反逆。

そして、2025年に殺された。

SERNに好き勝手やられた挙句、まゆりも救えずに。

そんな中、鈴羽の父親がSERNの目を盗んでタイムマシンを作り、その途中で死亡。

その未完のタイムマシンにのって、鈴羽は未来を変える為にこの時代にやって来た。

これではSERNに反逆しても意味は無い……そう最初は思った。

だが、レジスタンスを作った事で、鈴羽の父親がタイムマシンを作り、この時代まで持ってきてくれた。

……今は故障してしまっているが。

これを活かせるのならば活かしたい。

タイムリープは48時間しか遡れず、Dメールでは過去の改変を思う通りに行えない。

このタイムマシンが使えるのならば問題無く、直接過去に干渉出来る……が、タイムマシンを直せる人物など心当たりが無い。

「なあ、お前は未来を変える為にタイムマシンに乗ったのだろう。具体的な計画はあったのか？」

「……あるよ」

無い、と言って来たらどうしよかと思った。

無鉄砲すぎて笑えない。

「世界は、世界線とアトラクタフィールド出来ている」

世界線とは簡単に言うと、一本の糸の様なモノで、過去から未来まで続いている。そして、その糸は細かい、様々な可能性が重ね合わせの状態で内包されており、個々に分岐している。

しかし、いくら分岐しようとして一本である以上最終的に同じ結果にたどり着く。

過程は違っても、結果は変わらない……そしてその収束範囲にある世界線の束、糸で例えるなら『より糸』の様なモノがアトラクタフィールドだとか。

「このアトラクタフィールドもたくさんあるんだ」

鈴羽はあらかじめ用意していた一本のより糸をぶらさげる。

「この『より糸』が、アトラクタフィールド とすれば、その範囲内にあるのは 世界線。そして、これがアトラクタフィールド に」

さらに取り出された二本のより糸。

「それぞれのアトラクタフィールド、範囲内にたくさん可能性世界線を内包していて、アトラクタフィールドごとに、起きる事象も収束する結果も違うんだ。干渉性は喪失していて、それぞれが独立を保ってる」

三本のぶら下がったより糸は、絡まる事無く、それぞれが垂れている。

つまり、そう言う事なのだろう。

……このより糸も、果てしない規模で長くすれば絡まるだろうがな。何百、何千年という規模で見ればアトラクタフィールドも収束するのかもしれない……が、今は関係ない話なので、独立しているという体で進める。

「しかし、お前の言い方では未来は返られないと言っている様に聞こえるぞ」

それこそ、俺の嫌いな運命を肯定している様だ。

「同じアトラクタフィード内にいる限り結果は収束する。だけど、今あたしたちがいるアトラクタフィードの、範囲外に……世
界線にたどり着ければ、収束する結果も変る」

通常は独立している別のアトラクタフィードに干渉出来る時が存在する。

アトラクタフィード同士が完全に分岐しようとしている瞬間……

……それが今。

「ダイバージェンスが大きく変わる分岐点は、2010年にあるってあたしは教わった。2000年や1991年並みの、ものすごい大分岐が起きて、アトラクタフィードレベルで枝分かれするって1991年はソ連崩壊、2000年は……2000年問題。」

この2年では、アトラクタフィードが大きく分岐した。

その話を聞いて、俺は何となく察しがついた。

俺は一度、鈴羽の言うアトラクタフィードを超えている。

2000年問題があった世界線から、2000年問題の起きなかった世界線に。

だからこそ、世界の有様も俺の歩んできたモノとは大きく変わったのだ。

「……ならば、2010年の事件は、電話レンジというわけか」

世界の有様を大きく変える大事件、それはおそらくSERENのディストピア構築。

その切欠となった電話レンジは、その存在自体が十分に大事件と言える。

「そう、人類史上初のタイムマシン開発成功」

「つまり、その事件を無かった事に改変すれば、違うアトラクタフィードに収束するわけだ」

……結局、最初から俺がしようとしていた事と変わらない。

「で、肝心の計画は？ どうやって改変するつもりだ」

それが分からなければ、この会話は殆ど意味が無かった事になる。まさに時間の無駄。

「IBN5100」

「……なに？」

「SERNが君達に気づいたのは、一番最初にタイムマシンを使ったときのメールのデータだって、父さんは予測してた。その時空を超えたメールを、エシユロンが補足した。まだ、確認してないだろうけど、いづれ発見される。そして、未来から指示をして、君達を襲う。だから、そのデータを消せば、SERNは君達に気づかない。

世界線にたどり着ける」

そのメールアドレスを消すのに必要なのがIBN5100。

SERNがラウンダーに、最優先事項として探させていたモノの正体がこれとはな。

「……だが、一番最初のメールとはどのメールだ？」

前の世界線の俺が最初に送ったDメールか？

それとも、この世界線の俺が最初に送ったDメールか？

「えっと……最初は、最初だと思うけど……」

鈴羽の言葉が真実ならば、ここが世界線で、最初のメールを消してたどり着くのが世界線。

そして、俺が元いた世界線はそのどちらでもない。

ことなるアトラクタフィールドから、アトラクタフィールド に来た事により、前の世界線の行動や事象は全て無かった事になっている。

2000年問題に、まゆりの病気、俺がラウンダーだったという経歴。

なら、前の世界線で送ったDメールも無かった事になっていると言っても問題は

無い。

そう思いかけたが、俺が最初に世界線を跨いだ時の事を思い出す。

あの時、送信履歴からは、確かに無かった事になっていた。

だが、受信履歴にはしっかりと残っていた。

というより、そのメールにより行動が変わった事により世界線が変わ

ただ。

無ければおかしい。

だから、そのDメールはこの世界線にも存在する。おそらく、2000年以前に送られたDメールが。しかし、そうなると、最初のメールはどっちだ。それに、もしだ。

もし、前の世界線からこの世界線に移動した理由が、Dメールの身ではなく、Dメールをエシユロンが捕らえた場合だったらどうする。

その場合、データを消した時点であの世界線に逆戻り。

違う。

そうじゃない。

因果の始まりを思い出せ。

覚えているはずだ。

ふと、脳裏に浮かんだ一場面。

血溜まりに倒れる紅莉栖。

それを俺は見下ろしていた。

これは何だ？

こんな記憶は俺には無い。

なのに、妙な言葉が俺の記憶を刺激した途端、無いはずの記憶を思い出した……気がした。

訳が分からない。

……こんな記憶は、今は様は無い。

紅莉栖は生きている。

この記憶が間違っているのだ。

今は、どうまゆりを救うかを考える時。

「……IBN5100がどこにあるのか知っているのか？」
話題を戻す。

可能性があるなら試してみるべきだ。

IBN5100を使い、消すべきメールが2000年以降なら迷わ

ず消せばいい。

それなら、逆戻りは無い。

俺は、余計な事で迷っている時間は一秒足りとも無いのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3319u/>

Steins;Gate 暗黒世界のドヴェルグ

2011年9月27日03時13分発行